

(表紙)

繼豐公

實曆四年 自三月
至十二月

重年公

追
舊
記
雜
錄

卷百八

繼豐公御譜中

去歲訟レ公、繼豐雖レ蒙_レ至今夏一在國浴湯之 恩免上病
猶尚未好焉、乃今年三月十三日重年呈_レ使翰於執政、
又延_レ繼豐參府之期_二屆_一來歲夏_一也、詳見_レ于後_一、而執政
回章在_二重年之譜中_一、

全上

扣正文在家老座 (卷「此御書重年公御譜中ニ殘有之」)

一筆致啓上候、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦奉存外、然

重年公御譜中

正文在文庫

返々このちニてもとり々無事ニ御座りま、

御心安おほしめし被下へくり、御ふみのやう、いよ

くめてたくかしく、

(島津様豊)

隅州様御機嫌よく御座あそはし、御そもしさまにも御安

全の御事ニおはしまし外由、かす々御めてたさ、さて

重年公御譜中
正文在文庫

御札令披見外、
大納言様益御機嫌能被成御座、二月廿七日東叡山
(家重差、梅沢氏)
至心院様御靈前 御参詣之段被承之、恐悦旨尤外、紙面
之趣及言上外、恐々謹言、
(采)
「寶曆四年」 三月廿二日 秋元但馬守
松平大隅守殿 涼朝判

繼豊公御譜中
正文在文庫

は年頭の御壽この地におゐて、使にて申まいらせ、なを
わかなのめてたさつかひにて、御もく録の通りまいらせ
外得者、御ねん入御禮のやう誠こめてたさ、御たかひに
いくひさしくと、めてたくかしく、
(采)
「寶曆四年」 やよひ中の一 日
(繼豊差、竹越より)
まつ平(島津重年)
薩摩守殿 御返事
竹

繼豊公御譜中

御札令披見外、
大納言様益御機嫌能被成御座、二月廿七日東叡山
至心院様御靈前 御参詣之段被承之、恐悦旨尤外、紙面
之趣及言上外、恐々謹言、
(采)
「寶曆四年」 三月廿四日 秋元但馬守
松平薩摩守殿 涼朝判
御名内
(留守居)
岩下佐次右衛門
一 粃七萬貳千九百俵
壹俵ニ付三斗五升入
高四拾貳萬九千石分
琉球國高共
右者壹萬石粃千俵宛圍置可申旨被仰渡外付、右之通圍
置外段國元より申越外、此段申上外、以上、

重年公御譜中
扣正文在江戸家老座

松平薩摩守領内、去酉年分圍粃俵數書上
松平薩摩守殿
秋元但馬守
涼朝判
「寶曆四年」 三月廿二日

正文在文庫

御札令披見候、同氏薩摩守妻女死去付〔重年室、島津久尚女〕、薩摩守に從

公方様御意之趣奉書相達、難有由得其意外、紙面之通及言上外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆四年」 四月四日

松平大隅守殿

秋元但馬守
涼朝判

1445 全上

御札令披見外、同氏薩摩守妻女死去付外薩摩守に

御意之趣奉書相達、難有由得其意外、紙面之通各申談及

上聞外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆四年」 四月四日

松平大隅守殿

西尾隱岐守
忠尚判

1446 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、妻女死去付外

御意之趣奉書相達、難有由得其意外、依之爲御禮被差越

使者外、紙面之通各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆四年」 四月四日 西尾隱岐守
忠尚判

松平薩摩守殿

1447 全上

御札令披見外、妻女死去付外、從

公方様御意之趣奉書相達、難有由得其意外、依之爲御禮被差越使者外、紙面之通及言上外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆四年」 四月四日 秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

1448 重年公御譜中

扣正文在江戸家老座

〔島津重年〕
松平薩摩守に

松平薩摩守

村梨子地から草〔浮線菊〕 御紋散し中高蒔繪

御料紙硯箱

〔島津樁豊〕
松平大隅守

黒塗〔浮線菊〕 御紋散し蒔繪

御茶辨當一通り

御小道具共

右之通可被差上^レ、

〔卷〕
「寶曆四年」 四月

1449 全上

正文在文庫

御札令披閱^レ、御内室死去付

上意之趣奉書到來之由、仍芳簡御念入儀存^レ、恐^レ謹言、

〔卷〕
「寶曆四年」 四月十一日

尾張宰相 宗睦判

薩摩少將殿

御報

1450 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將

又同氏大隅守當夏參府可在之筈之處、今以病氣同篇^ニ而

長途之旅行難成^ニ付、來夏迄罷在養生爲致度旨被申越^レ、

令承知^レ、依之被差越使者^レ、紙面趣各一覽之事^レ、恐

謹言、

〔卷〕
「寶曆四年」 四月十八日 西尾隱岐守 忠尚判

松平薩摩守殿

1451 全上

正文在文庫

御香具一箱并丸熨斗一箱被獻^レ之^レ、遂披露^レ處一段之御

仕合^レ、恐^レ謹言、

〔卷〕
「寶曆四年」 四月廿二日 西尾隱岐守 忠尚判

松平薩摩守殿

1452 全上

御香具一箱并丸熨斗一箱被獻^レ之^レ、遂披露候處一段之御

仕合^レ、恐^レ謹言、

〔卷〕
「寶曆四年」 四月廿二日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

1453 繼豊公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲松平右近將監

可述外也、

〔采〕
「寶曆四年」
五月二日

家重公
墨印

松平大隅守殿

1454
全上

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕
「寶曆四年」
五月二日

秋元但馬守
涼朝判

松平大隅守殿

1455
重年公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲松平右近將監

可述外也、

〔采〕
「寶曆四年」
五月二日

家重公
御墨印

薩摩少將殿

1456
全上

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕
「寶曆四年」
五月二日

秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

1457
重年公御譜中

初重年納_二島津備中貴備女_一、而儲_レ令子_二稱_レ島津善次郎久方_一、承_レ懿親故兵庫久季之家統_二方今在_レ國矣、去歲十二月十五日元服改號兵庫

而就_二台老松平右近將監武元_一以爲_レ之先容_一、武元諾焉、

越五月十一日爲_二參覲_レ發_レ國、久方亦從_レ駕東行矣、久方出於松門橋乃駕矣

二階堂林左衛門行通・福山平太夫安都・河野安之右衛門

通古、近習役迫水善左衛門久芳以下供奉焉、同月二十四

日到_二豐前大里_一直駕_レ船、六月十九日着_二船于播州坂越_一、

遂陟_二播磨路_一同二十四日到_二攝州大坂_一、二十六日遡_二河

流_二二十八日着_二城州伏見_一、七月二日發_二伏見_一向_二美濃

路_一、同四日止_二宿濃州大垣_一、濃・勢・尾三州去歲所_レ關

役治_レ水處也、故往承_二台許_一、翌五日發_二大垣_一略歷_二覽

1458

其處、即御郡代青木次郎九郎、御代官吉田久左衛門來執、
 謁矣、既而臨_二東海道_一、到_二遠州金谷驛_一、連雨大井川水
 瀰而不_レ得_レ涉、滯宿者六日、同月二十二日到_二着于江府芝
 第一_一久方芝嶺東門、同二十五日、上使西尾隱岐守忠尚來_二于芝
 第一_一而置入中興、即日詣_二老中各第_一拜_二謝焉_一、同二十八日登_レ
 營以_二參觀_一也、拜_二謁

家重公及

家治公、獻上方物如_二先躰_一、乃登_二西城_一亦奉_レ謝_レ焉、
 直詣_二執政各第_一謝_レ之、是日從_レ例家老伊勢兵部貞起・新
 納內藏久品拜_二謁

台顏_一、各獻_二上御太刀・銀馬代一枚・紗綾二卷于

家重公、御太刀・銀馬代一枚于

家治公也、

重豪公御譜中

(島津重豪)

同四年甲戌重年公將欲_レ攜_二久方_一朝_二於東武_一、豫就_二老
 中松平右近將監武元_一以爲_二之先容_一、夏五月十一日重年
 公發_二府城_一、久方亦從_レ駕_一久方出_二府城虎之關高欄_一、
 帶_二過_二棧門橋_一而駕_レ、經_二九州

路_一、自_二豐前大里_一航_二播州坂越_一、歷_二攝州大坂_一溯_二河
 流_一、自_二城州伏見_一歷_二美濃路_一如_二濃州大垣_一、歷_レ覽去歲

1459

重年公所_二關_一役治_二水之處_一、秋七月二十二日到_二着江
 都之邸_一自_二芝嶺東門_一、
 入_二中興_一

○同月二十七日讀書始、川上平右衛門親央(久徳)録_二待讀_一、
 ○八月朔日習書始、小倉仲之丞知映筆_レ行爲_二相手_一焉、

重年公御譜中

扣正文在家老座

1460

水行御普請御中休付、御役人様方一應被成御引取筈_レ間、
 御手傳方人數表引取有無之儀可申上旨、先達_レ承知仕、
 御場所_レ申越_レ外處、秋御普請仕入方并小屋番・風廻等之
 人數表自差置不申_レ外_レ不叶儀御座_レ外處、八月末又老九月
 初比_レ水引御普請御取掛有之由御座_レ外得老、纔之日數御
 座_レ外故、戊五月_レ忽奉行を初、其外之役人_レ本小屋・出張小屋共
 當分之通罷居_レ外様仕度旨此節申越_レ外、弥奉願_レ外通被仰付
 被下度奉存_レ外、此段申上_レ外、以上、

(采)
 「寶曆四年」五月十九日 松平薩摩守内
 岩下佐次右衛門

1461

重年公御譜中
 正文在文庫

御札令披閱_レ外、弥御無_レ吳之由玆重_レ外、我等路次無恙參府

御禮迄相濟大慶之事外、依之入御念外段欣然之至存外、
恐々謹言、

(卷)
「寶曆四年」五月廿五日
尾張中納言
宗勝判

薩摩少將殿
御報

1462 継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間
可御心易外、随而鏗節一箱被獻之外、各申談遂披露外處
一段之御仕合外、恐々謹言、

(卷)
「寶曆四年」六月六日
堀田相摸守
正亮判

松平大隅守殿

1463 全上

御札令披見外、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御事外間
可御心易外、随而鏗節一箱被獻之外、遂披露外之處一段
之御仕合外、恐々謹言、

(卷)
「寶曆四年」六月六日
秋元但馬守
涼朝判

松平大隅守殿

1464 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺之外、益御安全御
儀外間可御心易外、随而琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・
赤貝鹽辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之外、各申談遂披露
外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(卷)
「寶曆四年」六月六日
堀田相摸守
正享判

松平薩摩守殿

1465 全上

御札令披見外、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺之外、益御勇健御
儀外間可御心易外、随而琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・
赤貝鹽辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之外、遂披露外處一
段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕
「實曆四年」
六月六日
秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

1466
重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、暑氣之節弥御無吳之由珍重外、仍目錄之通饋給、入御念之段欣然之至存外、我等無恙在之事外、恐々謹言、

〔朱〕
「實曆四年」
六月廿二日
尾張中納言
宗勝判

薩摩少將殿
御報

1467
全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月晦日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

〔朱〕
「實曆四年」
六月廿三日
堀田相摸守
正亮判

松平薩摩守殿

1468
継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將亦其方病氣同篇ニ而今以不相勝付、來夏迄罷在被致養生度段、同氏薩摩守相伺外處、願之通被 仰出、難有由得其意外、紙面之趣各一覽之事外、恐々謹言、

〔朱〕
「實曆四年」
六月廿三日
堀田相摸守
正亮判

松平大隅守殿

1469
全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又其方儀病氣同篇ニ而今以不相勝外付、來夏迄國許罷在

養生被致度段、同氏薩摩守相願外處、願之通被 仰出、

難有由得其意外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

〔朱〕
「實曆四年」
六月廿三日
秋元但馬守
涼朝判

松平大隅守殿

1470 繼豊公御譜中

正文在文庫

從

大納言様 姫宮様江御結納之爲御祝儀、以使者如目錄被
獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔寶曆四年〕 六月廿五日

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

1471 全上

從

大納言様 姫宮様江御結納之爲御祝儀、如目錄被獻之外、
遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔寶曆四年〕 六月廿五日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

1472 重年公御譜中

正文在文庫

從

大納言様 姫宮様江御結納之爲御祝儀、以使者如目錄被

獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔寶曆四年〕 六月廿五日

堀田相摸守

正亮判

松平薩摩守殿

1473 全上

從

大納言様 姫宮様江
御結納之爲御祝儀、如目錄被獻之外、遂披露外處一段之
御仕合外、恐々謹言、

〔寶曆四年〕 六月廿五日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

1474 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月晦日増上寺 御靈屋
御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

〔寶曆四年〕 七月朔日

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

1475 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將

又爲端午之御祝儀、時服并御肴拜領之、難有由得其意^レ、

紙面之趣各申談及 上聞^レ、恐^レ謹言、

〔寶曆四年〕

七月五日

酒井左衛門尉 忠寄判

松平大隅守殿

1476 全上

御札令披見^レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將

又從

公方様爲端午之御祝儀、時服并御肴拜領之、難有由得其

意^レ、紙面之趣及言上^レ、恐^レ謹言、

〔寶曆四年〕

七月五日

秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1477 繼豊公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之^レ、遂披露^レ處一段

之御仕合^レ、恐^レ謹言、

〔寶曆四年〕

七月六日

西尾隱岐守 忠尚判

松平右近將監 武元判

酒井左衛門尉 忠寄判

堀田相摸守 正亮判

松平大隅守殿

1478 全上

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之^レ、遂披露^レ處一段

之御仕合^レ、恐^レ謹言、

〔寶曆四年〕

七月六日

秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1479

重年公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段
之御仕合外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆四年」七月六日

西尾隱岐守 忠尚判

松平右近將監 武元判

酒井左衛門尉 忠寄判

堀田相摸守 正亮判

松平薩摩守殿

1480 全上

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段
之御仕合外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆四年」七月六日

秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

1481 重年公御譜中

扣正文在家老座

〔卷〕御返答

御手傳場に小奉行三拾人・步行士三百人・足輕五百人被
差出外様、當春一色周防守様より被仰渡外段者、其元は
本文被申越趣致承知純、被差稱候別紙此方へ留置

〔此旨及御返答候、以上〕
表申越置候處、春御普請之分者御成就ニ由、當秋方水行

御普請一方ニ相成り得者、應ヶ所候ほとの人數被差置
可相濟儀と、於御場所及吟味、小奉行三拾貳人・步行士
百六拾四人・足輕貳百三拾壹人ほと被差出、外ニ浮人數
被差置相調積ニ由故、別紙之通青木次郎九郎様・吉田久
左衛門國様國に御届被申出候處、被聞召置外旨御挨拶有之
外段、輒負殿より被申越外付、於寔元周防守様方に岩下佐次
右衛門純罷出、右之趣御取次ニ由申上外處、被聞召置外旨
被仰聞候段申出候、其段御場所に者申越置外間、其元は
老輒負殿より委細被申越ニ由可有之候得共、此段者爲御
存申越外、以上、

〔卷〕
「寶曆四年」七月八日 〔上〕 鳴津主鈴

〔卷〕
「八月八日」 義岡相馬殿

〔下〕 鎌田典膳殿

1483 右別紙

寫

一小奉行 三拾貳人

一歩行士 百六拾四人

一足輕 貳百三拾壹人

右老水行御普請之節、御場所々は差出外人數、都合右之通差置可申候、尤手替り人數も申付置外、且又惣奉行役始、其外之役人共、元木屋・出張木屋に相詰、追々御場所は相動申外、場所係人數書別紙差上申外、以上、

六月八日 御名内 山澤小左衛門(盛 通)

右六月九日於笠松御役所、青木様・吉田様 江御銘、差出候、

1484 寶曆四年甲戌

七月九日 川畑友助 御兵員方足輕にて出込人を、求磨に捕へ、刺れて死之。

1485 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、去月廿日東叡山 御鑿前御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及

上聞外、恐々謹言、

(朱)「寶曆四年」七月十二日 酒井左衛門尉 忠寄判

松平薩摩守殿

1486 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者今度從

大納言様 姫宮様は御結納被進外段被承之、目出度被存由得其意外、依之被差越使者外、紙面趣各申談及上聞外、恐々謹言、

(朱)「寶曆四年」七月十三日 酒井左衛門尉 忠寄判

松平薩摩守殿

1487 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者今度從

大納言様 姫宮様は御結納被進外段被承、目出度被存由得其意外、依之被差越使者候、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

(朱)「寶曆四年」七月十三日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

重年公御譜中

扣正文在江戸家老座

今月四日大垣驛に御宿、翌五日御普請場に御越御見分

有之、青木次郎九郎様・吉田久左衛門様御出會御挨拶

等有之、石田御木屋場に御休、起驛に御宿(尾張國尾西市)にあり、

兵部致御供外、大垣御宿に平田靱負殿・伊集院十藏(久慈)・

堀堀右衛門・伊地知新太夫・山澤小左衛門參上、右人

數之内石田に御先に被差越、又老御供相動外、御普請

場の様子、得と被申上候、

一 八月末比より當分御引取之御役々越こゝ、九月初よ

り水行御普請御取掛、當年中成就有之外様江戸より御

差圖こゝ、年内成就有之外由、

一 難場六ヶ所御普請之儀承外處、右之内油嶋新田(伊勢國桑名郡)より松

之木村迄之間、築留、又老切共申之由、是老川筋

千九拾間餘之間、石を埋立、水涯より上、蛇籠こゝ築

立土を掛、堤之様相成、川一筋之所二筋相成由、石

坪凡敷萬千餘坪、埋方御入用之由、最早折角方々よ

り石相寄申外、此所別ゝ之難場と相聞得申外、

但石坪と申外老、六尺四方之箱壹ツを石坪壹坪と申

之由、

一 石坪を埋外水中之業を、水下御普請と申、水涯より上築立外業を、水上御普請と唱申之由、

一 無動寺村崩所御普請、又老大檜川(尾)切之儀、村方より相願外付、江戸に爲被伺置由、御普請被仰付外老、御

手傳方々相付、此分又々相重申外、石坪表七八千程

之御入用之由、

一 難場六ヶ所之儀老、外請負こ被仰渡外、是老別ゝ御入

用少キ由、村請被仰付外得老所之者共致事外付、先

懸勝手向專存六ヶ敷取立御入用多由、

一 水行御普請御入用金大底拾萬兩可及こ付、可差續旨先

達ゝ大坂に靱負殿より申越爲被置由、於大坂承外付、

弥其通之御入用之考こり哉之段承外處、右之段大坂

に被申越外節迄老、七郷輪中堀割御普請相止外段を究

ゝ不相知難場所普請之程合表難計、右通爲申越事外、

然處堀割御普請老相止、引替難場御普請之方相決外付、

此御普請仕様帳内こる青木様御方より借、賦立外處、

別紙兩様之通こり由、然老春御普請御入用相込外老、

拾二三萬兩こハ何れ之筋こも不及賦と相見得外、猶御

普請場に御問合之上、於其元御考こ可相成事と存外、

一 春御普請御入用金之内、三萬兩餘相殘、當分格護有之

之由、

由外、

一公義より御入用金先達の壹萬兩被渡置外、又々御金相渡申善之由外、

一只今迄の御普請仕様ニ付、存寄外儀共老無之哉と大野

備純鐵兵衛に承外處、如何程も有之外、同役又老檢者杯表

同前申外、都る儀、人足手間を込申致方ニ外、然共

何ぞ強ニ老無之外、見分宜様仕立申之由外、夫故御物

入多外、見掛宜儀を專ニ被成共ニ老有之間敷哉と申

外、御國元ニ右通致普請外ハ、半分之御入用ニ右

相濟可申哉と存外場所段々有之と申外、御普請役之衆

杯、權柄ニ中々存寄外儀共申外も取揚無之、申出

外儀も罷成躰有之外、押外申外者、却る御不勝手之

儀も到來可仕模様ニ有之外、御普請場に致出勤迄ニ右

人足等ニ表致下知事表無之と申外、

本文被申越候旨趣、委曲致承知候、御普請御人料御手当、且又御場所考ニ

右之段爲御存申越外、此外承外儀表有之、爲申達置

相成候儀共者、何分ニ成申該候様可致候、以上、

儀共表有之外得共、不及申越事故差扣外、以上、

但、別紙此方江扣置候、

八月八日

(朱)
「寶曆四年」七月十七日

(朱)
新納内藏

(白)
伊勢兵部

(白)
義岡相馬殿

(朱)
「下」
鎌田典膳殿

重年公御譜中

扣正文在家老座

水行御普請難場三拾八ヶ所、外受負之願段々申出趣、

先達の委細問合申越置外處、今月朔日青木次郎九郎様・

吉田久左衛門様より御留守居兩人御用之由、差支候者

誰そ一人致同道可罷出旨申來、佐久間源大夫儀差支外

付、山澤小左衛門・愛甲源左衛門罷越外處、高木様御

三人御列座、御普請役相詰、御兩所方被仰聞外者、先

達申出置外難場之内六ヶ所、水上水下共ニ御手傳方

より外受負ニ可申付旨江戸表より被仰越候間、左様可

相心得旨被仰聞外旨申出外、

一右御普請所に遣ひ外枰之材木者

公義御入用金を以被相渡事外間、村方方相納造調迄同

斷御入用候間村方より致善外、御手傳方より老檢者迄

を可差出外、御普請場御用之竹表村方より相納善ニ被

仰渡置外旨被仰聞外段申出外、

一蛇籠造人足、遠州邊之者ニ爲造候者、右六ヶ所迄御

手傳方方請方可申付外、其外之御普請場に御用之蛇籠

者、右人足ニ不及、村方請御普請之事ハ間、籠造表村
方人足ニ爲造申等ハ、且以樋造調之儀者御入用金ニ

而被相拂ハ間、入札御役所より被仰付受人被相究ハ、

尤右作調ハ節者木屋懸ケ御手傳方ハ被仰付事ハ、右受

人追御手傳方ハ可被遣ハ間可申談ハ、右伏方人足者、

御手傳かた御取計ニハ村方ニ被仰付置ハ由致承知ハ

付、左ハ者、いづれ之村ハ被仰付ハ段承知仕度ハ、賃

銀等可申談由申上ハ處、追可被仰聞ハ、冬中致業ハ

間、急キハニ不及旨致承知由、右御用之御材木被相渡

場所追御沙汰可被成由、是又被仰聞候旨申出ハ、

一先達ハ段々申上ハ難場六ヶ所、外三拾貳ヶ所御普請場

之儀、大粧之御普請ニ候故、村受ニハ者御早行無心元

ハ間、外受ニ被仰付度由申上ハ處、御兩所より此儀者

相成間敷ハ、定式御普請ト者相替、組合村々被仰付御

普請仕立ハ間、滯有之間敷由被仰聞候ニ付、其通ニモ

可有御座ハ得共、春御普請之趣ニハ者急ニ出來仕間敷

ハ、百姓共彼是ト申分可仕儀案中ニハ、左ハ得者御成

就延引可仕旨、別ハ心遣仕ハ段申上ハ處、前條之通組

合村々被仰付ハ得者、定式一村限御普請ト者相替ハニ

付、滯有之間敷ト被思召ハ得共、究ハ者難被仰ハ、相

滯ハハ、其節御取揚外ニ被仰付様可有之由、久左衛
門様被仰聞ハ旨申出ハ、

一水引御普請當年中御成就ハ様ニト江戸表より被仰越

ハ、此儀御手傳方ハ可申達旨爲被仰渡儀ニハ者無之ハ

得共、序なから御咄被成ハ、右通別何ハ御急キ被

成事候、來春中表御掛リ被成ハ者、御手傳方御内々之

入用及過分可有之ハ、其上一日ニハ者早ク相濟候得者、

御手傳方ニ表御幸之筈ハ、御役人方ニ表御同前之由被

仰聞ハニ付、相應ニ御挨拶爲申上置由ハ、七郷輪中新

川掘割者御見合、右代リニ油嶋新田より松木村迄之間

築留メ、十二九ツ者可被仰付ハ、左ハ得者右御普請御

入用石坪貳萬千餘ニハ、江戸ハ被仰遣置ハ間、盆過

表向御沙汰有之、其節御帳可被相渡由御咄有之ハ付、

右御普請及年内御成就之御事ハ者、則ハ致手配、石之

儀者寄方不申付ハ不叶筈ニ存ハ由御答申上ハ處、石

之儀隨分寄方可致吟味ハ、九月より先キハ舩及差支、

其上寒氣之節石取ハ儀成兼候間、致出精可寄ハ、此涯

寄兼候者、到右時節ハ者、石運賃も高直ニ相成、旁御

不勝手之筈ハ間、當時寄方肝煎ハ様ニト被仰聞ハ由、

且又水行御普請之諸色近日中ハ可被相渡ハ間、致其心

得出張之役人中、公義御役人より問合次第請取に罷出外様可申渡置旨被仰聞外由申出候、

一笠松より壹里程上、無動寺村と申所崩所有之外、右場所も此節之御手傳に可相込哉と被思召外、石坪三千程も入り由、外に大樽川に切壹ヶ所村方段に相願趣有之、是も同斷に可被仰付哉、左候得者石五千入り、兩條江戸に被相伺置外、未相究由御咄に外旨申出外、

一油嶋より松木村迄に切御普請場、水上水下共に外受負申付度儀并三拾貳ヶ所村方に吟味申付外上、不都合之請方に外者、直に外受に申付度旨小左衛門名前なる書付相認、去ル二日差出外處、御兩所被成御逢、油嶋に切之儀者昨日爲被仰聞事外間、外受に申付外手當可致外、三拾貳ヶ所御普請場之儀に付申出趣者、高木内膳様御在所多羅に御引取にて外故、近日御越之節被仰談、何分可被仰聞旨致承知外段、小左衛門申出外、右書付差出外付る者、河野猪左衛門に小左衛門方申談、得と御兩所に御内意申上、且又已前御普請役相勤、當分浪人なる宮驛に罷居候者、久左衛門様御別懇之由に付、小左衛門より手寄を以致面談、笠松に列越再應に得御内意外處、三拾貳ヶ所之儀御手傳かた御願之通外受に

1491

者難被仰付外、子細者江戸に被仰上ル往反も有之、其上組合村に被仰付置外故、御取放右村を外之御普請場に御差加へ不被成外不叶事外、左外得者帳面しらへに日數相懸り外、御急キ之事候得者、右に差支候間相濟間敷外、依之村方何程なる可請合哉と金高相積り申渡、夫なる者罷成段申出候者、其節右御普請所を外請負に申付度旨御手傳かたより申出候者、可相濟事外由御内意被仰聞外付、左候者其趣御役人様被仰談、御手傳方に被仰聞外筋に仕度外、大柱之御普請所に候得者、役人共村受迄なる者御早行別る無心元存罷居外付、再應相願申事に御座外、願書者前條御内存同斷之趣に外間、可然様被仰談被下外様、右浪人なる得と申上、書付差出外由申出外、且又油嶋新田築切御普請仕様帳盆過被成御渡筈に付る者、其内請方吟味不相成差支外付、猪左衛門に小左衛門より申談、久左衛門様に御内談いたし、右御普請仕様帳御取、寔之御内なる致御借用、去ル朔日夜中書寫、猪左衛門なる御帳返上いたし外段申出外、

右之通小左衛門、源左衛門に被仰聞候旨申出外付、
(米)御返答

難場六ヶ所受負外儀入札爲申渡、當分吟味有之候、

本文被申越趣致承知候、以上
右躰いまた不相決り付、御入用金高も不相知候條、

追申越り様可致り、前條ニ相見得り通、難場六ヶ所、外之三拾貳ヶ所も村方不都合之請方申出り者、外受ニ申付度旨申出心得ニ故、其節申出り通ニ被仰渡り様、尚又一色様より御郡代方に被仰越儀者、御内意御取計可有之旨江戸に申越り、尤前條之趣者御通路之節、達 貴聞、御供之御家老衆に委曲申達置り、此段申越り、以上、

(卷)「實曆四年」八月八日 (卷) 平田頼負
七月廿二日 (卷) 上

(卷) 義岡相馬殿
「下」 鎌田典膳殿

重年公御譜中

扣正文在家老座

一御步行 四拾八人

一右同 拾人

但本御小屋御番人并押番之見合

一足輕 四拾四人

右老水行御普請場所八拾三ヶ所御目論見帳先頃被相渡

り二付、應右場所致手配、小奉行貳拾貳人・御步行百

六拾四人・足輕貳百三拾壹人御普請場に被差出り人數、御郡代方に及御届、被聞召置り段者先達其元江及問合り通候、然處右御普請場所外ニ油嶋松之木村迄千間餘之切水分ヶ御普請并大樽川切・無動寺村崩所有之、重御普請可被仰付との御沙汰ニ、江戸表より未何分御下知者無之候得共、石寄方等可致吟味旨去ル朔日被仰渡、別紙問合申越通り、右通御普請所相重候付者、御步行并足輕右之通及御不足り間、御役々相しらへ勤場人數配別紙之通ニ、千間築切水分御普請之儀者、別の大造之場所ニ得者、此内御届申上置り人數并江戸より被差越候浮人數相込り者、不及手旨吟味之趣申出り間、右人數早速御場所勤被申渡早々被差立、九月初ニ者必御場所に參着り様可被申渡り、秋水行御普請者、八月末九月初比より一二三四之手共ニ、一同ニ御取掛り之御手當ニ、依之蛇籠御用之石壹萬九千程之坪數ニ、寄方折角御催促有之事ニ、當分者船數も大小毎日三百艘程ニ、一日ニ百坪計ツ、者、日々岐阜表より石田・八神と申所に乗り下シ、石壹坪者六尺四方ニ、只今迄漸七千坪餘之寄方ニ、

此石坪さへ過分之坪數ニ候得者、來月中都合無心元存
 外處、油嶋ノ切ニ者、貳萬三千程之石坪數、切土八千
 四百坪餘ニ有、右寄方何様ニ可相調哉と御役々にも吟
 味最中ニ有、川行御普請都而之諸御入用之竹木、其外
 之品右應石坪・土坪ニ、大分之事ニ有、右受取之者も
 多人數無之有難成、大概右人數ニ有者可相濟哉と存
 外、水行御普請ニ御取掛り、若及不足候ハ、小役人
 又者御役々與力をも被差出相濟外様ニ致考ニ有、當春
 定式御普請之節、不足人數御催促有之節者、遠國故追
 々致着筈と御答申上させ有得共、秋御普請之儀者、前
 以御手當等之儀段々爲被仰渡置儀ニ有、其上此間人數
 賦いたし御届申上候節、浮人數之儀、以後御用不差支
 程ニ見合、差置可申旨をも爲申出置儀も候得者、右通
 之御挨拶者難成筈外間、其御考を以一日も早く被差立、
 九月上旬ニ者到着外様ニ可被申渡り、石請取并諸色受
 取之儀者、筆算相應ニ無之有難成外間、不足御歩
 行四拾八人之儀者、年若ニ有者可成程筆算等有之候者
 を吟味被致、被差越度外、無左有得者、別有御用差支
 申外、尤別有寒深キ場所ニ有故、年行之者御普請御場
 所ハ罷出外有及勤續不申外間、其御考ニ有御首尾可被

成外、右人數下人者壹人ツ、召列外様ニ可有之有、御
 普請場ハ罷出外節者、不僕ニ有難成外、爰ニ有召
 抱外得者別有高賃銀之由外得者、其身共ニ及迷惑之筈
 外、此段者爲御考外、右重御步行・足輕之儀者、可成
 程江戸御供代り之内より御場所ハ被差出外ハ、御國
 元より被差越外より者、御勝手も宜筈ニ候得共、別紙
 にも申越外通、江戸より及漸御步行三拾人程被差越筈
 候得者、此上者江戸ハ重人數之儀者難申越外、足輕之
 儀者又外江戸より被差越外筋ニ者相成間敷哉と、爰元
 にも物頭代ハ吟味致させ外處、御供代り足輕も最早
 餘計者無之積ニ有旨申出外、
 一勢州之内、油嶋新田地内ハ猿尾四ヶ所、上坂手村猿尾
 二ヶ所、大嶋番所上猿尾一ヶ所、葉名十萬山洗堰、右
 御普請者未同者不濟外得共、石并切土等者、兼有場
 所ハ寄置外様ニ此間御郡代方より被仰渡り、右御普請
 場ハ及小奉行・御步行餘多入申事ニ有得共、此分者右
 申越外人數を以、菟哉角間ニ逢外様可致候、右通ニ有
 者御普請所相重外様ニ有之有得共、最初御目論見ニ七
 郷堀割被仰付筈之處、右場所ハ御見合ニ有、其代りニ
 油嶋ノ切其外之御普請所被仰付筈之由外、七郷堀割と

ハ御入用も格別ニ相減、尤御普請仕立リ日數も過分ニ減申積ニテ頂上之儀外、御疑及可有之と存外ニ付爲御存外、
(朱)御返答

本文逐一致承知候、御歩行之儀被申越候人數、浮式入相重ノ都合六十人、足輕之儀も其人相重、四拾六人被差遣候申渡、早、相止廻首馬可申出旨外、右次第之儀者江戸に及及問合答外、以上、申渡置候間、令首尾申出候者、立日限申渡追、差立可被遣候、此段及御返答候、以上、但被遣候別紙此方へ扣置候

〔寶曆四年〕七月廿二日 (朱) 平田靱負

(朱) 八月八日

(朱) 義岡相馬殿
鎌田典膳殿

右ニ添別紙

油嶋ノ切方

一石受取方

一右同蛇籠作檢者

一右普請方勤

一石受取竿取

一石くり上方

一右御普請方勤

大檜川ノ切御普請有之外得者左之通

御步行 十五人

右同 四人

右同 十人

足輕 十人

右同 十人

右同 十人

右同 十五人

一石請取方

一右同蛇籠作方檢者

一右場所勤

一石受取竿取

一石くり上方

一右御普請方勤

無道寺村崩所御普請有之外得者左之通

一石受取方

一蛇籠作檢者

一右御普請方勤

一石請取竿取

一石くり上方

一右御普請方勤

諸出張

一諸色受取方勤

一諸出張方石受取

一諸色請取方に相付外

一石請取方に相付外

一御步行 四拾七人

右水行御普請ニ付、五出張不足人數として、本御木屋

御步行 三人

右同 貳人

右同 四人

足輕 三人

右同 貳人

右同 六人

御步行 貳人

右同 貳人

右同 三人

足輕 貳人

右同 貳人

右同 五人

御步行 十人

右同 十七人

足輕 八人

右同 十七人

御步行 十七人

右同 十七人

御步行 四拾七人

御步行 四拾七人

より被遣筈、

一同廿八人

右本御木屋受取、水行方に相勤筈、

一同壹人

右金廻出張詰之内、松崎次左衛門於御國元御暇申出被

差立跡、

御歩行

合百四拾八人

内七拾人、當分本木屋に有人

三拾人江戸より近日被遣筈、

差引殘面

四拾八人不足

外に

本木屋押番御番人者、御見合次第被差越度り、

足輕

合八拾四人

内四拾人、江戸より被遣筈、

四拾四人不足

七月十一日

1495 重年公御譜中

正文在文庫

明廿八日五時登城、參勤之御禮可被申上り、以上、

(卷)

「寶曆四年」

七月廿七日

西尾隱岐守

本多伯耆守

酒井左衛門尉

堀田相摸守

松平薩摩守殿

1496 家來二人

御目見被仰付り間、召連可被罷出外、

1497 重年公御譜中

今茲重年携令子島津善次郎久方在東武、越八月四日

以ニ重年適子^{アラハニ}也、公^{ウナシク}達^{ウナシク}之于松平右近將監武元^{ウナシク}武元領

焉、斯日離^(重)二門列^(重)、即改號^(重)三松平又三郎忠洪^(重)、乃授^(重)下刀

一腰^(重)、短^(重)長^(重)二尺^(重)・脇指^(重)一腰^(重)、相州住秋^(重)長^(重)、長^(重)一尺二寸^(重)二部^(重)半^(重)・黒熊^(重)鑓^(重)一對^(重)、一本^(重)正勝^(重)長^(重)三

四寸^(重)無銘^(重)長^(重)・長刀^(重)一振^(重)、島田^(重)住源^(重)・手^(重)鑓^(重)一本^(重)、藤州^(重)住馬^(重)一匹^(重)、上^(重)原^(重)毛^(重)八歲^(重)三

矣、

全上

扣正文在家老座

寫

先達の申上置外私直子嶋津善次郎事、當戌十歲罷成外、
弥以丈夫相成外付、此節召連出府仕外、嫡子仕、名及又
三郎と相改申候、此段御聞置可被下外、以上、

〔寶曆四年〕

八月四日

松平薩摩守

右二御付紙

承露外、

〔宋〕右御月番松平右近將監様江久世忠右衛門様二而被差出候、秋

元但馬守様江茂御留守居二而被差出候一

1499 重豪公御譜中

八月四日重年公馮三幕府士頼久世忠右衛門廣氏一呈三書於

用番老中武元一、告下以三善次郎一去歲十二月十五日元服于薩府、號兵

嗣之時、祀以善次郎、而今以兵庫到順久乃、先是重年公呈書於老中、請

江都一則恐疑非其人、故復稱善次郎為三嫡子一於三幕府上也、是日重年

公授三折紙一稱三松平又三郎忠洪一賜二刀一腰治工延壽、長脇刀

一腰治工相州住秋實、長三寸五分、一本無銘長四寸長刀一振

治工高田・手鎗一本治工齋州・住源義助馬一匹黒川原毛八歳三、一

全御譜中

正文在文庫

御實名

乙丑御年十

御本命金

御字忠

忠洪

歸納東

右恭考 忠御字屬火、洪字屬土、火生土土復生、御

本命金吉也、計兩字點畫以配八卦數則爲乾於法有天長

地久之讖而以爲大吉矣、而洪大也、歸納爲東東方之始

陽之動也、於天之道爲元於天之時爲春於人之性爲仁也、

夫以忠信之質能體生物之心大布濟衆之澤、則盛德大業

又何尚烏豈不天下之至善者乎哉、

寶曆四年甲戌七月吉日 臣山田氏有雄謹考、

全上

正文在文庫

松平又三郎

寶曆四戌

八月四日

全上

正文在文庫

忠洪

寶曆四戌

八月四日

右御實名考書ノ跡ニ左之通寄通相添

右之通大奉書二枚重、三ツ折ニいたし書調、同紙ニ包、

御實名と致銘書、外ニ假名付壹通相添、白木請察請之、

熨斗包相添御家老座ニ罷出、兵部殿ニ差上ノ事、

但急成儀ノ故、白木請察熨斗包自分ニ相調ノ儀難成、

其段宮之原宇右衛門(通傳)ニ申出、御進物藏より被相渡

外、

右戌七月廿七日

右之通山田喜三(有傳)右衛門日帳之内ニ相見得外、且又右日

帳之内ニ左之通相見得外、

寶曆四年戌八月八日

一兵部殿御用之由申來、喜三右衛門罷出外處、又三郎様

御實名御名御折紙二通兵部殿方御直ニ御渡、去ル四日

太守様方於 御前、兵部殿御取次を以

又三郎様ニ被進外御折紙ニ有外間、御記録所へ納置外

様被仰聞外、左外有喜三右衛門方先達有相考差上置外

御實名之御書付壹通、是又可納置由ニ有一所ニ被相下

外事、

右之通相見得外付、當座相糺外處、百二十八番之内

ニ 御實名御名御折紙貳通并考書壹通有之付、直

ニ 其本書を差越申外、此方へ老支無之様寫いたし置

外、右本書ハ其元ハ御覺悟可有之外、以上、

九月廿九日

兒玉祝人(實門)

(記録奉行)久傳
川上平右衛門殿

東郷淺之丞殿(美)

1504

重年、公御譜中

正文在文庫

御馬二疋被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹

言、

(朱)
「寶曆四年」

八月廿八日

武元判

松平薩摩守殿

(朱)
松平右近將監(在右)

1505

全上

御馬一疋被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹

言、

〔卷〕
「寶曆四年」 八月廿八日 涼朝判

松平薩摩守殿

涼朝

〔卷〕
〔存札裏〕
秋元但馬守

1506 継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然

者今度從

大納言様 姫宮様江御結納被進外段被承之、目出度被存
由得其意外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆四年」 九月二日

松平大隅守殿

西尾隱岐守
忠尚判

1507 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然

者今度從

大納言様 姫宮様江御結納被進外段被承之、目出度被存
由得其意外、紙面之趣及言上候、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆四年」 九月二日 秋元但馬守
涼朝判

松平大隅守殿

1508 継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、六月廿日東叡山 御靈前

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及

上聞外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆四年」 九月二日 西尾隱岐守
忠尚判

松平大隅守殿

1509 継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相同之外、益御安全御儀外間

可御心易ハ、隨テ干鯛一箱被獻之ハ、各申談遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐ク謹言、

(卷) 西尾隱岐守 忠尚判

松平大隅守殿

1510 全上

御札令披見ハ、

公方様 大納言様御機嫌被相同之ハ、益御安全御儀ハ間可御心易ハ、隨テ干鯛一箱被獻之ハ、遂披露ハ之處一段之御仕合ハ、恐ク謹言、

(卷) 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1511 繼豊公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲酒井左衛門尉可述ハ也、

(卷) 家重公 墨印
「寶曆四年」
九月七日

松平大隅守殿

1512 全上

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐ク謹言、

(卷) 秋元但馬守 涼朝判
「寶曆四年」
九月七日

松平大隅守殿

1513 重年公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲酒井左衛門尉可述ハ也、

(卷) 家重公 墨印
「寶曆四年」
九月七日

薩摩少將殿

1514 重年公御譜中

扣正文在家老座

御勅定與頭

倉橋武右衛門様 (原)

御勅定衆

勝谷次兵衛殿(屋之(豊)明)

三木伊左衛門殿(順)(有)

宮川小十郎殿(前之(信)(安)

菰田仁右衛門殿(幸七郎・某)

右者水行御普請御係りこゝ、追々江戸表御出立被成筈

外段、於御城御留守居に被仰聞候旨、先月廿七日飛

脚便江戸より被申越置外處、去ル九日笠松表に御着被

成候、右役々者此節重々こゝる被差越外、

御普請役

今井 勘助

鶴岡 幸助

渡邊傳之助

柑木左兵衛

猪又要右衛門

田村銀八郎

今泉又三郎

笹川雲四郎

和田 清助

橋原與左衛門

右之面々も此節重々こゝる追々出立有之筈之段、最初よ

り係り之御普請役内藤源八郎より於江戸御留守居方に

しらせ有之候由被申越、いまた御場所に着者無之外、

一吉田久左衛門様(佳)(國)にも先月廿五日笠松表に被成御着外、

御目付様方并御徒目付衆其外之面々も、追々御着可有

之と存外、本文致承知候、以上

右爲御存申越外、以上、

(朱)「寶曆四年」

九月十四日

義岡相馬殿

鎌田典膳殿

平田靱負

1515

重年公御譜中

正文在琉球國國司

寫

高奉行に

古銀百五拾壹貫目

右者當年進貢料之内琉球拜借銀三百貳貫目被相渡筈候

得共、古銀才覺不相調、其上御續方差支、第一御手傳

御普請料御見賦金太分之事こゝる旁差支候付、先當年

之儀者右外百五拾壹貫目相減、右之通相渡外條、急度

取仕立無滞積下候様可申渡外、

右之通申渡、琉球假屋守に表可申渡り、
〔寶曆四年〕九月
(鎌田政昌)
典膳

1516
全上

正文在琉球國國司

寫

琉 假屋守
在番親方に

古銀五拾壹貫目

右老當年進貢料銀之内百五拾壹貫目拜借之筋、先達の申渡置候得共、於唐詣調物前年役者より取組不置候得者、諸品急難調、歸帆時節後に相成り故、去年致渡唐外に貢使當年手當之次第委細達置り譯有之、銀高過分被相減りる者、渡唐役者可及難儀事表可有之旨、委曲申出趣有之り付る、當時御不如意之段表此間申渡り通、別の差支事り得共、無據筋相聞得り故、右之通相重、都合貳百貳貫目拜借申付り條、返上物糸・反物位直段等の儀随分入念致吟味相調、尤先きに諸品調方之調文、又老料銀員數相替儀表可有之り間、大概之見合を以取組致置り様渡唐役者に可申渡旨琉球に可申越り、

右申渡、首尾係に表如何可申渡り、
〔寶曆四年〕九月
典膳

1517
繼豊公御譜中

正文在文庫

今度

姫宮様御入興付る、御茶辨當被獻之り、右之趣各申談及上聞り、恐々謹言、

〔寶曆四年〕九月廿七日
堀田相摸守
正亮判

松平大隅守殿

1518
重年公御譜中

正文在文庫

今度

姫宮様御入興付る、御料紙・硯箱被獻之候、右之趣各申談及上聞候、恐々謹言、

〔寶曆四年〕九月廿七日
正亮判

松平薩摩守殿

正亮

(卷)
堀田相摸守
〔在右裏〕

重年公御譜中

正文在彌勒院

知行目錄

高貳百斛

隅州國分内村之内

同所同村之内

同所同村之内

同所見次村之内

同所内山田村之内

同所同村之内

同所同村之内

同所同村之内

同所同村之内

同所同村之内

同所同村之内

名寄帳在別册

右

故太守吉貴公其院御再建、爲正八幡社領被寄附之、享保

六年二月廿七日御寄附狀被成下畢、全令所務御祈禱無怠
慢可抽丹愰者也、其節地面不纏、今般支配就相定、仍如
件、

寶曆四年十月十八日

鎌田典膳

政昌判

義岡相馬

久中判

鳴津主殿

久憑判

正八幡宮別當

彌勒院

重年公御譜中

正文在文庫

重陽之

御内書可相渡外間、明日五半時

御城江家來可被差出候、以上、

(卷)
〔寶曆四年〕

十月廿日

酒井左衛門尉

松平薩摩守殿

重年公御譜中

扣正文在江戸家老座

寫

古銀之儀割合通用可致旨、去ル子年相觸_レ處、通用_レ不致、銀座に引替_二表不差出貯置_レ者有_レ之由、別_五畿内・北國・中國・四國・西國筋多分古銀有_レ之由相聞_レ、遠國之儀_考、引替後_レ慶長銀・古銀・灰吹銀貯置_レ表可有_レ之_レ間、右國_々銀座役人相廻_リ、五割増之積を以買入候筈_二間、慶長銀・古銀并灰吹銀不貯置、定法之代_リ銀請取之可引替_レ、尤銀座に差出引替_レ儀_考勝手次第たるへ_レ、但來_々子五月迄引替之儀、銀座に申込_レ分ハ、五割増_二の引替、同年六月より古銀_考潰銀_二相成、慶長銀・古銀拾貫目ヲ文字銀拾壹貫目_二買入_レ間、此旨可相心得_レ、

右之趣急度可相守者也、

(卷)
〔寶曆四年〕 戌十月

右之通可被相觸_レ、

重年公御譜中

扣正文在家老座

(定)

御手傳方御用金常式・急破并水行御普請御目論見増段_々有_レ之、來三月迄御手傳方人數_考被引取賦を以、都_レ之御用

金拾八萬四千貳百兩程_二の大躰可相濟哉と、別紙算用書之通金賦申付、八月九日京大坂御留守居に續方申渡置_レ處、御手傳方御用金さへ及不足、其上江戸極月迄御用金ハ一向手當不相見得_レ付、何様盡工面_レの_レも、御不足銀相續_レ様_考何分難調、其元御計_二先比申越通_レ、御手傳方御用金_考格別故、毎度續方致催促_レ、其元にも先達より段々申越通_レ、御普請も都_レ御取付有_レ之、最早爲相濟_レ所も段々有_レ之、大方年内御成就可有_レ之哉、其内難場之ヶ所、又_考比日増御普請被仰渡_レ場所_考、來二三月_二懸_レり御成就可有_レ之哉と相考_レ、右通増御普請被仰渡、其上御普請御用石も未貳萬坪餘寄方不相濟_レ處、當年_考例年_二替川_々渴水、石船通行相滯、洲浚等申付事_二の、直増旁付御物入相増、別紙正月迄十二萬兩續方申渡置_レ外、今一萬兩餘可相増哉と存_レ、右通段々御物入御銀差支_レ付、乍纔も先當月より諸人御賦銀渡方一往差止置_レ、其元_レ銀米其外產物、可成程上せ方有_レ之たる筈_レ、上方表_二の御借入金_レ之外、大分之御不足銀其許より都_レ被相續_レ儀、諸人も爲差迫由_レ得_考、別_レ大粧成筈_レ得共、御手傳方_考勿論、江戸御用金_考格別故、御國元之儀_考何様_二及困窮_レ共、此節之御用金は是非不相調_レの難叶筈故、

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又爲重陽之御祝儀、時服并御肴拜領之、難有由得其意外、

銀米其外之産物末々之者迄も御加勢被申渡、上方表出銀
之外者御國元續（卷）之無之得者難成外處、上方表寄銀、
又者御借入銀何程（卷）、其外者御國元より何程續方有之
譯委く爰元へ不相知り付、爰元詰算用役石原佐次右衛門
急（卷）之今日差立、於大坂旁申談其元は差越、上方表寄銀、
御借入等之次第をも可申出旨申合差越候條、京大坂（卷）
不足金不相調分へ、いづれ之筋（卷）も御國元へ何様差廻外
るも、御手傳方并江戸御用金不及御差支様、猶被申談（卷）
る可有之候、佐次右衛門其元御用相濟候者、早々可被差
返外、以上、

〔寶曆四年〕

十一月四日

平田鞆負

嶋津主殿殿

義岡相馬殿

鎌田典膳殿

全上

紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔寶曆四年〕

十一月七日

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將
又從

公方様爲重陽之御祝儀、時服并御肴拜領之、難有由得其
意外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

〔寶曆四年〕

十一月七日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

重年公御譜中

扣正文在文庫

知行目録

高拾六斛

隅州國分内山田村之内

同所同村之内

名寄帳在別冊

右依願貴寺引直于國分内山田村邊田、以寺地跡田開有之、出來高之内寛保元年十一月廿八日被寄附于其寺早、至後年無違失可有取納者也、今般支配就相定、仍如件、

寶曆四年十一月七日

鎌田典膳

政昌判

義岡相馬

久中判

嶋津主殿

久馮判

正國寺

重年公御譜中

扣正文在江戸家老座

貞享改曆以後、是迄貞享曆相用候處、違有之付の測量被仰付、今度於京都改曆 宣下、曆號定陳儀被遂行、新曆號寶曆甲戌曆と被相定候、依之來亥曆より新曆頒行之事候、

右之趣可被相觸候、

寫

堀田相摸守殿御渡り御書付寫壹通相達り、順廻、從留松

(朱) 大目付様御懸状并御書付寫壹通、只今松平陸奥守様衆より到來仕候付、

繼豐公御譜中

正文在文庫

(マ、) 本寄帳則有馬中務大輔様衆江順達仕、寫差上申候、
下肥前守方江可被相返之、以上、

(朱) 寶曆四年

十一月十四日

大目付

(朱) 十一月十四日

(朱) 赤松葛右衛門

松平陸奥守殿奉

(朱) 主筋様

松平薩摩守殿奉

以下略之

右留守居

全上

大納言様御婚禮就相濟り、爲御祝儀以使者如目錄被獻之、各申談遂披露り處一段之御仕合り、恐く謹言、

(朱) 寶曆四年

十二月二日

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

大納言様御婚禮就相濟り、爲御祝儀以使者如目錄被獻之、遂披露り處一段之御仕合り、恐く謹言、

(朱) 寶曆四年

十二月二日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

1531 重年公御譜中

閑院彈正尹直仁親王姫宮稱五 伉稱十 儷

大納言家治公、今茲六月二十三日御結納、十一月十一日

御入興、重年豫奉^二台許^一、獻^三料紙箱一箇于 姫宮、

繼豐亦獻^三茶辨當一荷^一矣、十二月朔日以^三御入興事畢^一故

家治公上使土岐伊豫守頼熙來^三于芝第^一、賜^二一種一荷^一、

姫宮亦以^三上使永井九右衛門^一賜^二同品^一也、加廂亦以各

賜^三同品于繼豐^一、即詣^三執政各第^一拜^三謝之^一、斯日御婚禮

也自是以往改姫、宮稱御籠中、於^三茲獻^一二種千匹于

家重公、同品于

家治公、二種五百匹于 御簾中^三奉^一以賀^二之^一、同五日以^三

大禮畢^一故于^三柳營^一有^三猿樂^一、諸侯伯應^レ徵候^二營中^一、

此日重年獻^三折一合于 幕府^一矣、

1532 正文在文庫

大納言様御婚禮就相濟候、爲御祝儀以使者如目錄被獻之

候、遂披露^レ處一段之御仕合^レ、恐^レ謹言、

(朱)「寶曆四年」

十二月二日

正亮判

松平薩摩守殿

1533 全上

大納言様御婚禮就相濟^レ、爲御祝儀以使者如目錄被獻之

^レ、遂披露^レ處一段之御仕合^レ、恐^レ謹言、

(朱)「寶曆四年」

十二月二日

涼朝判

松平薩摩守殿

1534 全上

今朝御折一合被獻^レ、遂披露^レ處一段之御仕合^レ、恐

^レ謹言、

(朱)「寶曆四年」

十二月五日

武元判

松平薩摩守殿

(朱)「在右裏」

松平右近將監

1635 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間
可御心易外、隨而鯛一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(卷) 〔寶曆四年〕 十二月十三日

松平右近將監
武元判

松平大隅守殿

全上

1536

御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間
可御心易外、隨而鯛一箱被獻之外、遂披露外處一段之御
仕合候、恐々謹言、

(卷) 〔寶曆四年〕 十二月十三日

秋元但馬守
涼朝判

松平大隅守殿

重年公御譜中

1537

寶曆四年十二月十一日

大樹家重公使三山岡五郎作(景之)番(景之)御使賜下放三俊鷹三所獲鶴一隻

也、即到三執政各第一拜三謝焉、

1538 全上

正文在文庫

今朝蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、遂披露外處一段之御
仕合外、恐々謹言、

(卷) 〔寶曆四年〕 十二月十三日

武元判

松平薩摩守殿

武元

松平右近將監

1539

全上

扣正文在江戸家老座

松平薩摩守

御簾中様江

白銀拾枚

右之通、向後參勤之節可被差上外、

(卷) 〔寶曆四年〕 十二月

(卷) 〔覺

1540

御書付壹通

但御簾中様に御參勤之節、御献上物之儀

堀田相摸守様御用人

岩瀧五兵衛

右より被仰達儀有之外間、可罷出旨御用人中より切紙到來仕、私罷出外處、右御書付被成御渡り、此段首尾申上外、以上、

十二月廿日

岩下佐次右衛門

(馬津久郷)
主鈴様

1541

全上

正文在文庫

今朝蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、遂披露り處一段之御仕合り、恐々謹言、

(朱)
「寶曆四年」

十二月十三日

涼朝判

松平薩摩守殿

涼朝

(朱)
「在右裏」

秋元但馬守

1542

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、十月十四日増上寺 御靈屋御參詣之儀被承之、恐悦旨尤り、紙面之趣各申談及上

聞り、恐々謹言、

(朱)

「寶曆四年」

十二月十五日

松平右近將監
武元判

松平大隅守殿

1543

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、十月廿四日東叡山

(家重吉郎)
深徳院様御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤り、紙面

趣各申談、及 上聞候、恐々謹言、

(朱)

「寶曆四年」

十二月廿三日

松平右近將監
武元判

松平大隅守殿

1544

繼豊公御譜中

正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲本多伯耆守可

全上

述外也、

〔朱〕
「寶曆四年」
十二月廿七日



松平大隅守殿

1545

全上

爲歲暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外
處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕
「寶曆四年」
十二月廿七日

秋元但馬守
涼朝判

松平大隅守殿

1546

重年公御譜中

正文在文庫

爲歲暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲本多伯耆守可
述外也、

十二月廿七日



薩摩少將殿

1548

重蒙公御譜中

正文在文庫

寫

爲歲暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外
處一段之御仕合候、恐々謹言、

十二月廿七日

秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

一元服・家督・繼目・養子成并分地初ゝ 御目見之節

一御役被仰付、進上物仕 御目見之節

一初ゝ地頭職被仰付、進上物仕 御目見之節

御一門・大身分・一所持・一所持格・寄合並以上并

嫡子、右者

太守様江御禮申上外節

又三郎様江及進上可仕外、

太守様江二種一荷進上仕外節者

又三郎様御方江者、元文二年被究置外通、二種一荷

代銀進上可仕候、

但進上物相納外程之儀者

又三郎様江進上不及外、

一御用人御役被仰付、進上物仕、御禮申上り節

一初め地頭職之御禮

右者 太守様に御禮申上り節

又三郎様に進上物可仕候、

一年頭江戸に御祝儀不申上、諸地頭より若御當地より

太守様に御太刀進上仕り節

又三郎様に進上物相納可申り、

一御一門・大身分・一所持・一所持格并大御目付以上者

年頭御太刀進上之儀、來年頭より

又三郎様に進上被仰付り、

一右之外、御太刀又若二種一荷包進上仕、初め之 御目

見仕り面々 又三郎様に進上物不及り、

右之通、向後 又三郎様に進上物被仰付り善り條、

此段致通達、首尾係に若如何例可申渡り、

(采)

「寶曆四年」十二月

(島津久柄)

主殿

全御譜中

長生殿裏春秋富不老門前日月遲
 君か代ハ千世にやちよにさゝれ石の
 いはほとなりて昔のむすまで
 寶曆五年正月元日

(島津重豪) 忠洪

(花押) Na.5

重豪公御譜中
正文在文庫

吉書

(表紙)

追 録	繼 豐 公	重 年 公	寶 曆 五 年	自 正 月
舊 記 雜 錄			至 六 月	
卷 百 九				

扣正文在家老座

保姫様

御歳御九才

御姫様御名文字

右之通ニ御座外、

右包紙ニ

(義岡久中)

此書付相馬殿へ御渡被成可被下候、御かつてんにて御さ候ま

ゝ御めてたく御とゞけ可被下候、めてたくかし、

(巻) 「寶曆五年」

上書

春井さまへ

封

荻原

全上

扣正文在家老座

(島津重豪)

又三郎との縁組之御事、先達の尾州様方御内々にて御か

ゝ様へ仰込有之外ニ付、毎々の御ゑんも有之、ことに平

生御しほらしく御とひまし、此間河さらへニ付ても御心

付られ、御國元にて御せわも仰付られりよし、尤御重ゑ

んの思召外御事と申、此度ゑんくミの御事度々仰進られ

外ニ付、右之趣を御かゝ様方御兄様へ御相談有之外所、

只今迄御しゆう儀無之りまゝ、此度ハ御斷もあそハした
きよし御尤之御事、しかしながらも尾州様思召ニハ、御
ゑんのうすく成り儀、ことの外御殘念かりりよしニりま
ゝ、折角の思召を御斷あそハしり事、いかはかり御かゝ
様こも御きのとくに思召り所ニ、又々 〔橋宗尹〕 刑部様も又三郎
とのゑんくミの事仰込有之り、御内證ハ

公方様之思召付さまにて御そは衆兩人ニ仰付られ、いま
た何方よりもとりくミ無之りハ、との御事、尤御本丸御
年寄衆松しまとのおき原へ御申入有之り、刑部様御そは
御用人之内ニ

公方様御そは衆おとくつとめ居申りよし聞及り、此御ゑ
ん御斷有之りとして、御ゑんつくの事ニりハ、さしてくる
しからすり事ニりハとも、御官位其外何事こよらす御内
ゑん御座りハ、同じ事なからわけよくとゞのひ可申と
そんし申り、尤こなた御家ハかくへつの御すしめニりハ
とも、とかく御すうきの御座り事ハ、末々迄又三郎との
御爲にハ被成申給り、たれへも申り、刑部様御高すくな
くりハ、御こんれいと申りても後々迄何事も御手かる
くりハんとそんしり、さやうニりハおなし事なからも
公方様御めい子様と申御すじめよく、又御こんれいと申

にても十年之餘も過りハねハ有ましくとそんしまいらせ
り、先く御やくそくハかりの御事にて、只今之内ハ相す
ミり半まゝ、此御ゑんハ御きわめりやうにいたし度思ま
いらせり、此たんとくと申入度存りハとも、主鈴こも壹
人にて何れか同やく之人着いたされりをまぢまいらせり
所ニ、相馬着いたされり間、幸之事と悦、手前存寄申入
り間、兩人之衆りやうけんにて、何とそく成へきすし
の事ニりハ、御とく様御兄様御國もとへ御しんるいさ
まかた仲間衆へもそうたんいたし、此御ゑんくミ御とり
くミりハ、よろしくそんしまいらせり、さなくりハ、
その事となく、御さわりこも成り半と存まいらせり、此
度の河さらへ御用さへ、何れもこまられりに、又此上所
く何かにさハリり事と出来り半かと計かたくり、萬事打
すて第一又三郎との御爲こもよろしくり半かと存まいら
せりニ付申入り間、兩人此わけとくと聞入られりやうに
と存り、とかく御しゆうひよく相すミりやうにたのミ入ま
いらせり、ちかき内ニおき原より御かゝ様御意り半と存
まいらせり、其せつよろしく御あいさつ御うけ申上られ
りやうにと存まいらせり、めて度かしく、

〔巻ノマ〕
「寶永五年正月」

重年公御譜中

和正文在家老座

(朱)御返答

一三四之手追御目論見共御普請所年内迄段々出來、

本文被中越懸逐一致承御候、以上

右四手之内、二之手御普請御場所老惣御成就有之、

舊臘廿三日、廿四日御役人様方御立合御清見被成、

被仰渡外付、拙者并御用人諏訪甚兵衛、御留守居山澤

(兼方)

小左衛門、御普請奉行川上彦九郎其外役々前以西對海

(伊勢國桑名郡)

地に差越、彼表詰御目付村田五右衛門、御用聞平田善

太夫其外二手御普請受込之小奉行・御步行・足輕ニ至

り、夫々請込之所々に差出置、右御受持之御目代大久

(忠應)

保荒之助様、御郡代青木次郎九郎様、御勘定衆菰田仁

(安)

右衛門殿并惣御普請御見廻倉橋武右衛門様・吉田久左

(桂)

衛門様其外二之手係り御徒目付・御小人目付・御普請

役・堤方役不殘被召列、去春定式・急破御普請并水行

御普請所御清見、無滯首尾克相濟頂上之御事、廿四

(尾張國)

日御清見後、於梶嶋と申御場所、荒之助様・次郎九郎

様・武右衛門様・久左様門様御同列ニ拙者被召呼外

付、甚兵衛・小左衛門召列罷出候處、二之手御普請文

相馬へ
主鈴

夫々出來、御互ニ御大慶被思召外由被仰聞、左外御

清見老爲相濟事外得共、江戸御目付山口民部様、御勘

定吟味役横山傳右衛門様御場所に被差越、御立合出來

柴御見分有之筈ニ江戸より御到來候間、左様可相心得

外、其内老御普請所之内埋洲等有之候ハ、さらへ致

外様被仰聞外付、委細致承知外旨御答爲申上置事、

一二之手出來柴御見分之御目附様、御勘定吟味役并御徒

目附山下忠次郎殿、御小人目付瀧又四郎・川村太四郎當

月六日江戸御出立被成筈之段御知せ有之外由申外、

左外得老今月廿日前後ニ老御見分可有之哉と存外、

一二之手御普請皆出來付老、西對海地出張御小屋引拂、

又老差置外人數も引取候様可仕哉と、小左衛門名元ニ

同書差出させ候處、荒之助様御承知、追々何分可被

仰渡外間、應其趣小奉行・御步行・足輕ニ到り、無御

用分ハ見合可差下外、御清見相濟外付老、御名元杭

木取除外儀いかゞ可仕哉と、御用聞善太夫ニ御徒目

附に得差圖させ候處、荒之助様御場所御引取之節、何

分可申達旨致承知外段申出候、

一御清見相濟外付老、堀田相摸守様・一色周防守様に
此節可及御届哉、江戸方御目附様・御勘定吟味役御差

越御見分之上可及御届哉、於江戸被得御内意可被致首尾旨申越外處、御再見相濟外節、御届有之筈申來候、

一壹・三・四之手御普請も年内天氣相續段々擧取、年内

老廿五日迄（美濃國海津郡伊勢國桑名郡）の廿六日より御休、當月老四日より御取

懸有之外、油嶋（美濃國海津郡伊勢國桑名郡）より松之木村迄、千九拾間之水分ケ

切又老中明キ、未決の之仰渡老無之候得共、當分之御

模様（美濃國海津郡伊勢國桑名郡）の老先中明キの老可有之哉と相考り、油嶋之

方老五百五拾間の老築留有之外、松之木村之方百五拾

間の老築留有之外處、御目論見相替り、又五拾間程

之築足有之筈被仰渡、是老老大分之石相重外、且又大

櫓川二百六拾五間之切又老洗堰、是又未相決外、江

戸（美濃國海津郡伊勢國桑名郡）の爲被伺置由外得共、未何分不被仰渡由外付、大櫓

川御普請所先御見合（美濃國海津郡伊勢國桑名郡）の、當分老未御取懸無之外、洗

堰之方（美濃國海津郡伊勢國桑名郡）に相決候得老、是老老過分之石相重筈外付、

石寄方折角催促申渡事外、石田・八神御普請所も半過

に相成外、右所々別の大柱之御場所の候得老、御成

就ハ三月に相懸可申哉、只今よりハ何分難申越外、

一二之手御普請出來榮御見分有之候老、右係之面々老引

取被仰渡筈之事外得老、前條に老申越外通無御用分老

可差下儀外、江戸に御馬廻・新番・御步行又老足輕及

不足外ハ、被差下人數之内より江戸に可差越旨先達

る及問合外處、足輕四十人程御不足外問差越候様申來

外付、手明に相成外内見合、爰元より直江戸に差越筈

外、外之人數老差越不及旨申來外間、見合次第差下筈

外、此段老爲御存外、

一三之手之内、太田新田出張小屋最寄御普請所出來、未

御清見老無之外得共、不用候間、右小屋家主に相返度

旨、三之手御係淺野左膳様（美濃國海津郡伊勢國桑名郡）に小左衛門名元（美濃國海津郡伊勢國桑名郡）の老舊臘廿

九日相伺せ外處、御徒目付を以申出外通、小屋引拂人

數元木屋に引取、其首尾可申上旨被仰渡外、依之年内

日迫外間、來早春小屋相返人數引取、其段可申上旨御

徒目付迄相達外處、引取之儀老勝手次第可致旨致承知

外段申出外付、今日右小屋家主へ相返、人數元木屋に

引取、其首尾左膳様・高木内膳様・青木次郎九郎様に

申上筈候、右引取外人數も無御用分ハ吟味之上御届申

上、追々差下外様可致外、

以上

（朱）
「寶曆五年」
二月三日
正月五日
（朱）
上
平田靱負

（朱）
下
嶋津主殿殿
鎌田典膳殿

繼豊公御譜中
正文在文庫

重年公御譜中
正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露外處一段之御
仕合外、恐々謹言、

〔宋〕
「寶曆五年」 正月七日 忠寄判

松平薩摩守殿 忠寄

〔宋〕
「在右裏」 酒井左衛門尉

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露外處一段之御
仕合外、恐々謹言、

〔宋〕
「寶曆五年」 正月七日 涼朝判

松平薩摩守殿 涼朝

〔宋〕
「在右裏」 秋元但馬守

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露外處一段之御
仕合外、恐々謹言、

〔宋〕
「寶曆五年」 正月七日 酒井左衛門尉 忠寄判

松平大隅守殿

全上

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露外處一段之御
仕合外、恐々謹言、

〔宋〕
「寶曆五年」 正月七日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

重年公御譜中
正文在文庫

吉書

一 神社佛閣修造興行事、

一 可專勸農事、

一 可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨、可有沙汰之狀如件、

寶曆五年正月十一日 重年御判

重年公御譜中

扣正文在江戸家老座

御簾中様江端午・重陽・歳暮并參勤之節、獻上物之儀被

(采) 御札 別紙封付之内備國御札之節獻上物者相除

仰渡置、年頭獻上物之儀者、伺之上先達而被仰渡、右之外

其外者伺之通可被察由候

大納言様江御祝儀獻上物等仕下節、向後

御簾中様江及獻上物仕度奉存下、依之別紙相副伺申下、

御差圖被成可被下下、以上、

(采)

「寶曆五年」正月十三日

(高津重年) 御名

(の1)

御簾中様江向後左之通獻上仕度品

在國之砌春之奉伺御機嫌下節

一一種千疋

在府之節夏初

一丸熨斗 一箱

一香餅 二香合

一壽帶香 二箱

一龍涎香 二袋

一長壽大官香 二把

暑氣

一砂糖漬 一器

一甘泡盛酒 一陶

七月御生見玉之御祝儀

一鹽鯛 一折

一御樽代五百疋

在國之砌秋之奉伺御機嫌下節

一御干肴 一種

在國之砌冬中奉窺御機嫌下節

一御干菓子 一箱

在國之節寒中

一縮緬 五卷

一七鳴鱈節 一箱

冬中

一櫻嶋密柑 二籠

一炙鮎 一箱

國許に到着歸國之御禮申上り節

一一種千疋

以上

正月

1560 御簾中様江同氏大隅守より歳暮・年頭獻上物之儀窺之上

被仰渡置外、右之外

暑氣中

大納言様江御祝儀獻上物等仕外節、向後

一 齋節 一箱

御簾中様江及獻上物爲仕度奉存外、依之別紙相添相伺申

御生身玉之御祝儀

外、御差圖被成可被下外、以上、

一 鹽鯛 一折

〔實曆五年〕 正月十三日

御名

一 御樽代 五百疋

國許江罷在外中秋之奉伺御機嫌外節

〔亥三月十五日〕

一 干鯛 一箱

一 右御伺書貳通、今日木多伯耆守様御留守居被召呼、御付

重陽

札を以被仰達外旨、御用人小坂仁左衛門を以御渡被成外、

一 白銀 三枚

御品書者御招及可有之外間、被留置外旨被仰聞外由ニ而、

寒中

御伺書貳通、赤松甚右衛門御差越外付、御答表方以御使者

一 鯛 一箱

被仰達外、右ニ付西御丸江御届、明十六日差出外様可仕旨

以上

甚右衛門申越外付、是ハ奥廿九丁目之三月十六日之場ニ記

正月

置、但主鈴承之

〔亥二月十三日〕

御簾中様江松平大隅守より向後獻上仕度品左之通

國許江罷在外中春之奉伺御機嫌外節

一一種五百疋

端午

一 白銀 三枚

右御伺書ニ通・御獻上品書ニ通、御用番本多伯耆守様御用人朝倉源大夫を以差上外處、伯耆守様御受取被置、追而御挨拶可被成旨、右同人ニ而被仰聞外旨、赤松甚右衛門申出外、尤右ニ付而者最初堀田相摸守様入御内見外處、弥被差出可宜旨被仰聞外付、右之通相認被差出外事

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被

獻之、遂披露_レ處一段之御仕合候、恐_レ謹言、

(采) 正月十八日

「寶曆五年」

正月十八日

西尾隱岐守

忠尚判

松平右近將監

武元判

本多伯耆守

正珍判

酒井左衛門尉

忠寄判

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被

獻之、遂披露_レ處一段之御仕合、恐_レ謹言、

(采) 正月十八日

「寶曆五年」

正月十八日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

正文在文庫

御札令披見_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、然

者舊臘

大納言様御婚禮相濟_レ段被承之、目出度被存由得其意_レ、

依之被差越使者_レ、紙面之趣各申談及 上聞_レ、恐_レ謹

言、

(采) 二月二日

「寶曆五年」

二月二日

西尾隱岐守

忠尚判

松平大隅守殿

御札令披見_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、然

者舊臘

大納言様御婚禮相濟_レ之段被承之、目出度被存由得其意

_レ、依之被差越使者_レ、紙面趣及言上_レ、恐_レ謹言、

(采) 二月二日

「寶曆五年」

二月二日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

正文在文庫

御札令披見外、如承改年之慶賀珍重外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相

濟と目出度被存由得其意外、隨而干鯛一箱・御樽一荷被

獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔卷〕

〔寶曆五年〕 二月六日

西尾隱岐守

忠尚判

松平大隅守殿

御札令披見外、如承改年之慶賀珍重外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相

濟と目出度被存由得其意外、隨而御樽肴被獻之外、遂披

露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔卷〕

〔寶曆五年〕 二月六日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然

者舊臘

大納言様御婚禮相濟外爲御祝儀、從

大納言様以 上使其方并同氏薩摩守御樽肴拜領之、從

御簾中様及拜領物有之、重疊難有由得其意外、依之爲御

禮被差越使者外、紙面趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔卷〕

〔寶曆五年〕 二月九日

西尾隱岐守

忠尚判

松平大隅守殿

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然

者舊臘

大納言様御婚禮相濟外爲御祝儀、從

大納言様以 上使其方并同氏薩摩守御樽肴拜領之、從

御簾中様及拜領物有之、重疊難有由得其意外、依之爲御

禮被差越使者外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

〔卷〕

〔寶曆五年〕 二月九日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

1570 重年公御譜中

正文在文庫

歳暮之

御内書可相渡外間、明日五半時 御城江家來可被差出外、

以上、

〔寶曆五年〕二月廿日 本多伯耆守

松平薩摩守殿

1571 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、將

又爲歳暮之御祝儀、時服并御肴拜領之、難有由得其意外、

紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔寶曆五年〕二月廿三日 西尾隱岐守 忠尚判

松平大隅守殿

1572 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、將

亦爲歳暮之御祝儀、從

公方様時服并御肴拜領之、難有由得其意外、紙面之趣及

言上外、恐々謹言、

〔寶曆五年〕二月廿三日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1573 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月十日東叡山 御靈前

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

〔寶曆五年〕三月十二日 本多伯耆守 正珍判

松平大隅守殿

1574 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將
又正月十二日

竹姫君様被爲 入、節、菊事

公方様は御目見、拜領物被 仰付、從

大納言様 御簾中様拜領物有之、重疊難有由得其意、

紙面之趣令承知、恐、謹言、

(朱) 一寶曆五年 三月十二日

秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

重年公御譜中

扣正文在江戸家老座

御簾中様は松平薩摩守・同氏大隅守より、年頭・歳暮
献上物之儀考、先達る申上り通御座り、其後年中其外
献上物之儀奉窺り處、別紙書附之通献上可仕旨、本多
伯耆守様より以御附紙被仰渡り、此段御届申上候、以
上、

三月十六日

御名内

赤松甚右衛門(副正)

御簾中様は

松平薩摩守

一干鯛 一箱

一白銀 五枚

右年頭

一一種 千疋

右在國之初春考奉御機嫌(同貳)ハ節

一丸熨斗 一箱

一香餅 二香合

一壽帶香 二箱

一龍涎香 二袋

一長壽大官香 二把

右在府之節夏初

一砂糖漬 一器

一甘泡盛酒 一陶

右暑氣

一塩鯛 一折

一御樽代 五百疋

右御生身玉之御祝儀

一御干肴 一種

右在國之初秋之奉伺御機嫌ハ節

右は相副別紙御献上物品書左之通

一御干菓子 一箱

右在國之砌冬中奉伺御機嫌ハ節

一縮緬 五卷

一七嶋鯉節 一箱

右在國之節寒中

一櫻島密柑 二籠

一炙鮎 一箱

右冬中

以上

(02)

御簾中様ハ

松平大隅守

一一種 五百疋

右在國之砌春之奉伺御機嫌ハ節

一白銀 三枚

右端午

一鯉節 一箱

右暑氣

一鹽鯛 一折

一御樽代 五百疋

右御生身玉之御祝儀

一千鯛 一箱

右在國之節秋之奉伺御機嫌ハ節

一白銀 三枚

右重陽

一鯛 一箱

右寒中

以上

(朱)
「亥三月十六日

右三通之書附、秋元但馬守ハ御用人加藤武兵衛ニ而差出ハ處、

いまた 御城江被成御座ハ間、御退出之節可申上由ニ而、右

御用人請取置ハ由、赤松甚右衛門ハ首尾申越、相馬承之、」

1576

繼豊公御譜中

正文在文庫

同氏大隅守儀、多年病氣付ハ、國元罷在緩々入湯仕、難有仕合奉存ハ、當夏參府仕ハ等候得共、今以同篇ニ而長途之旅行難仕候、可罷成儀ハハ、來夏迄罷在、養生爲仕度奉願ハ、何分ニ被成御差圖可被下候、以上、

(朱)
「寶曆五年」 四月七日

(重)
松平薩摩守

(朱)「張紙二面」

可爲願之通外、

重年公御譜中

扣正文在家老座

(朱)「御返答」

一之手并三・四之手御普請所、先比方天氣相續存之外

本文三ヶ条之趣致承知候、御普請惣御成就之段

抄取、一之手御場所先月廿七日限ニ御成就有之付、

兩州様入 御耳置候、以上

御受持之御役人様方御立合、翌廿八日より廿九日兩日

(久患)

ニ御内見相濟外、拙者并伊集院十藏其外御役々ニ表御

場所ニ相動外處、御手傳方役々段々出精ニ御普請丈

夫致出來、大慶被思召外段致承知候、三之手大檜川

切御普請并其外之御場所、先月廿八日限御成就有之外、

三之手之儀者定式・急破御普請所共ニ別ニ手廣御場所

ニ付故、先月廿四日方御内見御取懸ニ、毎日御役々

代ルニ御場所ニ相動外、三日中ニ表御内見可相濟ニ存

外、四之手油嶋御普請并其外之ヶ所々、先月廿七日

迄御成就有之、先月廿九日より御内見御取懸リ、去六

日迄相濟外、拙者并十藏其外御役々ニも差越相動外、

油嶋・松之木村之儀者、別ニ之難場ニ無滯御早行之

程無心元被思召外處、存之外ニ御普請抄取、早々御成

就ニ大慶ニ被思召外段、御頭様方より致承知外、先
以三手共ニ無滯惣御成就有之頂上之儀存候、

一壹之手并三・四之手御普請所出來榮御見分として、御

目附牧野織部様、御勘定吟味役細井九助様被仰渡、今

月七日江戸御出足被成管ニ此間被申越外、左外得者來

ル十五六日比爰元ハ御着可有之と相考候、御徒目付以

下ハ未相知由申來外、御普請所別ニ手廣事外得者、御

清見數日御掛被成管之事外、左外得者爰元御引拂、五

月中旬後ニも可有之哉と相考候、

一右通御普請惣御成就付者、御馬廻・新番・御歩行之

内出來榮御見分御場所ニ相動外人數見合置、其外御用

無之人數者相しらへ、追々差立外様可致候、

右申越外、

(朱)「寶曆五年」四月廿八日 (朱)「上」平田鞆負

(朱)「下」 鳴津主殿殿

鎌田典膳殿

1579 重年公御譜中

寶曆五年乙亥四月十一日

大樹家重公使三執政松平右近將監武元來ニ于芝第一、奉ニ歸

國之告、乃賜_二白銀百枚・紗綾三十卷、

大納言家治公亦使_二秋元但馬守涼朝・貺_二綿緬二十卷、因、

茲即日詣_二于執政各之第_一謝_レ之、同十五日登_レ營謁_二

家重公_一奉_レ謝_レ之、乃蒙_二懇篤_一 上意_一賜_二御馬一匹、又

登_二西城一謁_二

家治公_一奉_レ謝_レ焉、退而到_二櫻田第一、頃刻憩息之際以_二微

恙_一、故島津淡路守久柄代_二重年_一、詣_二執政各之第_一謝_レ焉、

是日也在府留守家老島津主鈴木久郷由_二先躰_一奉_レ拜_二謁_二

家重公_一、奉_二獻御太刀・馬代・紗綾二卷_一、獻_二上御太刀・

馬代于

家治公_一也、翌早十六日執政堀田相摸守正亮贈_二往賜之御

馬於芝第一、

1580

全上

正文在文庫

明日五半時登

城、御暇之御禮可被申上_レ、以上、

(悉) 西尾隱岐守

「寶曆五年」 四月十四日

松平右近將監
本多伯耆守

酒井左衛門尉

堀田相摸守

松平薩摩守殿

1581

全上

家來一人

御目見被_レ 仰付_レ間、召連可被罷出_レ、

(悉) 「寶曆五年」

1582

重年公御譜中

正文在文庫

寫

江戸居附士二男三男迄及御番入爲仰付事_レ得共、此節よ

り嫡子迄_二御番入被仰付候、二男以下ハ御番入被仰付間

敷_レ、其身爲物馴、一身格之御奉公且又他所_レ可罷出_レ

存_レ者、勝手次第可被仰付_レ、只今御番入被仰付置_レ者

其通可被仰付置候、二男以下藝能有_レ者、又ハ 思召を

以可被召出儀_レ格別_レ、

右此節江戸詰御國許_レ被差越_レ人數も被相減事_レ得

者、居附士二男以下迄及御番入被仰付_レハ、往々居

附士多人數ニ相成、猶以御國許方被差越ハ人数之差支
相成筈ハ間、以來右之通可被 仰付旨

御意候、

御取次

〔寶曆五年〕 四月

〔河野通吉〕
安之右衛門

主鈴ハ

1583

御國元より爲江戸詰被差越ハ人数も段々被相減事ハ處、
江戸居附士二男以下迄も御番入被仰付ハ者、往々居付
士多人數ニ相成、御國元方被差越ハ人数之支こも相成筈
ハ、二男以下別立等いたしハ難續願申出ハ者ハ、妻
賦をも被下儀ハ、依之二男以下者御番入不被仰付旨、別
紙之通被 仰出、居附之面々ハ右趣を以今月五日申渡、
以書舉申上ハ、左ハ仰出之趣者、爰元御記録奉行方こ
も書留置、以來居付・別立等之願申出ハ節ハ、仰出之趣
を以致吟味申出ハ様、口達ハ申聞置ハ、其元御記録所
ハ及書留置ハ様被申渡ハ可有之ハ、

仰出寫壹通并申渡之書付差越申ハ、以上、

〔本〕

〔寶曆五年〕 四月十六日

〔久郷〕
島津主鈴

〔久中〕
義岡相馬

〔久郷〕
鳴津主殿殿
〔政忠〕
鎌田典膳殿

1584

重年公御譜中
扣正文在家老座

來ル廿三日

1585

太守様御當地 御發駕之筈ハ處、少々御疝積氣被遊御座、
〔采〕本文違 貴國候、
此涯御旅行難被成ハ付 御發駕者被相延ハ、御日限者追
五月三日 御取次山田元右衛門
可被相究旨被仰出ハ、御心遣ニ及儀ハ者無御座ハ、
此段 隅州様御女中様方可被達 御聽ハ、御様躰者別紙
ニ委曲申越ハ、此旨急飛脚を以申越ハ、以上、

四月十八日

鳴津主鈴

義岡相馬

鳴津主殿殿
鎌田典膳殿

1586

太守様御持病者御疝積氣被成御座ハ段者、去年伊勢兵部
より被申越、各承知之通ニ候處、當春ニ罷成ハ得者、餘
〔昌和〕
り御快不被成御座ハ付、村田長庵様御藥用被遊ハ得共、
漸々御疲御見得被遊、御膳等々平日之通ニ者不被召上候

得共、御氣先差の御障表不被成御座付、去十五日御登城、御暇之御禮を及被仰上、弥來ル廿三日御發駕被遊管り處、昨朝より御足御腫氣少シ御見得被遊、御醫師共御伺申上、當分之御様躰なる者、長々之御疝積氣この御腫氣少シ込及被遊御座御事り得者、御道中被遊り儀ハ御障可有之旨一同申出り、折節武田長春院様外之儀ニ付、晝時御見舞能折柄之儀ハ故、御窺有之り、村田長庵様ニ者此間より御療治之事ハ故、御兩人この御窺之儀御頼被成り處、今日御兩人共御出御伺相濟り付、御發駕之儀いかゞ可被遊哉、御當地氣候惡鋪儀ハハ疝積氣之御病症このハ、長々爰元ハ被成御座り方ハ御發駕御旅行御國元ハ御着、御養生被遊り方却る宜筋ニ者有御座間敷哉之段、拙者共方御内談申上り處、御兩人ハ被仰聞り者、醫道之方この者御發駕之筋ニハ難被仰り得共、拙者共より申上り趣を以ハ御發駕被遊方ニ者可有御座哉、此段ハ何れ太守様思召之通ニ被遊筋可宜旨被仰り付、右之趣奉伺り處、一昨日方昨日者御小用之御通及宜、今日及只今迄之御様子この者御通シ及弥宜方御座り、御氣先差能被成御座御事ハ、然共廿三日御出立ニ得者、

御勤表段々有之り付、右通少々御直り口ニハ故、廿三日被相延り段被仰出候、左りる今月廿七八日、來月朔日比、爰元御發駕可被遊旨御内々御意承知仕り間、右之趣を以隅州様可被達御聽り、右之段被聞召御心遣被思召、御見舞之御使等被進程之御様躰この者無御座り間、右之段を及被申上りこの可有之り、尤御發駕御日限被仰出りハ、追々可申越り、以上、

四月十八日

嶋津主鎧

義岡相馬

嶋津主殿殿

鎌田典膳殿

1567

重年公御譜中

扣正文在文庫

(爲津忠雅)

同氏加賀守持病之眩暈・疝積久々不相勝り付奉願、去々西十二月隱居被仰付、難有仕合奉存り、今以右病氣眩と不仕、行歩及不自由罷在り、寒氣之節者別る相障難儀仕り、在所者寒氣及薄、保養ニ及相成、其上前々方日州(えびの市)白鳥之温泉汲寄せ入湯仕り得者、快覺り付、可相成儀御座り者、在所に差越暫養生爲仕度奉願り、以上、

(本)
「寶曆五年」 四月

鳴津淡路守(欠)

1588

鳴津加賀守事持病之眩暈疝積久々不相勝候付奉願、去々
酉十二月〆居被 仰付外處、今以右病氣寢と不仕、行步

不自由〆罷在、寒氣之節者、別〆相障難儀仕外、鳴津

淡路守在所者、寒氣〆薄保養〆相成、其上前々方日州

白鳥之温泉汲寄せ入湯仕外得者、快覺外付、在所〆差越

保養爲仕度淡路守奉願外、可罷成儀御座外者、願之通被

仰付被下度、於私〆奉願外、以上、

(米)
「寶曆五年」 四月廿五日

御名

1589

繼豐公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帳子單物到來歡覺候、委曲堀田相〆守可
述外也、

(米)
「寶曆五年」

五月二日



松平大隅守殿

1590

全上

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之外、遂披露外
之處一段之御仕合外、恐々謹言、

(米)
「寶曆五年」 五月二日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1591

重年公御譜中

正文在文庫

敬白 天罰靈社起請文之事

一先國王跡職我等〆被

仰付候、誠以筋目不相替此邦相續候儀、難有仕合辱奉

存候、此 御厚恩生涯忘却仕間敷事、

一琉球安泰之儀 貴國之惠不淺故と、誠以難致報謝奉存

外、縱親子兄弟〆忘忘此 御高恩、企逆意儀雖有之、

於我等者堅相守 貴國之御下知、毛頭別心御座有間敷

事、

一此靈社神文之表、子々孫々讓與之、到後々末代迄相守、

此旨之樣可申傳之候、縱雖爲嫡々之子孫、惡意之者有

之、國法之妨於罷成者、則遂披露可加刑罰候、聊緩疎

御座有間敷事、

右之旨若於僞申上者、

神文略

寶曆五年己亥五月九日

進上 太守様

中山王

尚穆判

1592

継豊公御譜中

扣正文在右筆所

一筆致啓上候、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦奉存外、然
者私儀病氣同篇ニ由今以相勝不申外付、來夏迄國許罷在
養生仕度旨、同氏薩摩守相伺外處、願之通被 仰渡外段
致承知、辱仕合奉存外、此旨爲可申上呈飛札外、恐惶、

(朱)

「寶曆五年」

堀田相摸守様

酒井左衛門尉様

本多伯耆守様

松平右近將監様

西尾隱岐守様

人、御中

大納言様御方

秋元但馬守様

人、御中

1593

重年公御譜中

重年嘗病ニ疝癰一頃日加病矣、雖ニ官醫村田長庵診レ脈薦レ
藥而未ニ以效驗一、武田長春院亦來與レ長庵共治レ病、故丁
期不能レ歸レ國矣、越今茲六月五日請ニ少間留滯爲ニ療養
于江府一、於ニ執政酒井左衛門尉忠寄一乃承ニ 台許ニ矣、
加旃 井上交泰院・森宗乙等亦尋來更轉ニ藥劑ニ盡ニ醫方ニ
也、同十一日病 連 漸 焉、於レ是親戚松平隱岐守定喬・
松平越中守定賢・阿部伊豫守正右・鳥居伊賀守忠孝・松
平河内守定多・柳生采女俊滿・水野肥前守忠見・島津淡
路守久柄等來居矣、

1594

扣正文在文庫

私儀國許之御暇被下候付、發足可仕處、持病之知積不
相勝、長途之旅行難仕候、依之暫致保養快外者、早速發
足可仕候、此段御届申上候、以上、

(朱)

「寶曆五亥」

五月十三日

御名

1595

継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

大納言様益御機嫌能被成御座、三月廿六日東叡山

(家重笑、梅原氏)
至心院様御靈前 御參詣之段被承之、恐悦旨尤^レ、紙面

之趣及言上^レ、恐^レ謹言、

(朱)
「寶曆五年」 五月廿三日

秋元但馬守
涼朝判

松平大隅守殿

重年公御譜中

扣正文在家老座

(朱)御返答

御目付牧野織部様、御勘定吟味役細井九助様其外別紙
本文御目より取申揚被致承知、御普請御成就にて御手匠方人敷引取被仰

御付^レ、先月十五日御着、翌十六日より一之手御普請
渡候由 兩州様達 御聽置候、以上

所御受持之御役人様方御立合、出來榮御見分有之、同
廿一日迄無御滯相濟、同廿三日石田出張^レ石野三次郎

様・高木新兵衛様御場所惣御見分、青木次郎九郎様・
(儀)倉橋武右衛門様・吉田久左衛門様其外御付^レ御出、御

差圖之上早速木屋引拂相濟、則日右出張詰人數差立、

首尾係り有之面^レハ本御小屋に引取せ^レ、左候^レ三次

郎様并御付^レ翌廿四日爰元被成御出立、新兵衛様にも

其以後御在所に御引取^レ面^レ、

一三之手御普請所、同廿四日より御見分御取懸^レ、去

十日迄相濟、翌十一日本御小屋御會所は、淺野左膳様・

高木内膳様并御見廻御三人其外御付^レ御出、三之手御

場所勤人數引取被仰渡^レ付、翌十二日小奉行・御步行

段^レ差立^レ、本御木屋矢來・櫓示杭等取除^レ儀^レ、四

之手迄御見分相濟、金廻出張引拂被仰渡^レ節、一所彼

方御懸^レ之御目代様方より取除可被仰渡^レ致承知、左

外^レ左膳様并御付^レ同十三日爰元御出立被成、内膳様

ニ及^レ其以後御在所に御引取^レ面^レ、且又三之手之内大

敷出張受込御普請所ハ、先達^レ御見分相濟^レ付、人數

引取^レ様仕度旨、去ル五日左膳様に相伺^レ處、翌六日

木屋引拂被仰渡、人數之儀^レ本御木屋に引取居^レ様被

仰渡^レ旨、御目付并早速難差立面^レ迄本御木屋に爲引

取^レ面、其外之人敷^レ翌七日差立、三之手御見分都^レ

相濟、去ル十一日人數引取被仰渡^レ上、右大敷^レ本御

木屋に引取居^レ面^レも前條申越^レ、十二日^レ者同立^レ差

下^レ、尤三之手之儀^レ、係^レ之小奉行・御步行多人數

に^レ、此内より手明^レ相成候面^レハ御沙汰なし^レ差下

外^レも差障無^レ之、追^レ差立遣^レたる事^レに^レ、此段^レ爲御

存申越^レ、

一三之手御見分相濟、織部様・九助様^レ者葉名町に御引

移^レ、去ル十三日より又^レ四之手御普請所御見分有^レ之、

去ル廿二日迄都る無御滞相濟、昨廿三日金廻出張(美濃國)に、

新見又四郎様・高木玄蕃様并御見廻御三人其外御付、御出、御差圖之上早速木屋引拂相濟、詰人數則日差立外、尤本木屋矢來・榜示杭之儀も引拂、御手傳方人數ハ、江戸御國元(元)に引取り儀、勝手次第可致旨被仰渡り付、矢來等引拂り、其段又四郎様(元)に御届爲申上り、且又本御木屋并金廻出張家作・地面共地主(元)に相返り段、次郎九郎様(元)に御届爲申上り、

一織部様・九助様より、一之手・三之手御場所御見分相濟外節、時々御普請結構(元)に致出來り段御挨拶致承知、四之手迄御仕廻(元)に付るハ、猶又いつれも出情故御普請丈夫致出來、御見分も無御滞相濟、一段之儀被思召り段、御丁寧御挨拶有之り、尤御受持之御役人様方より(元)も御見分迄首尾克相濟、御互(元)に大慶被(元)思召り段、御銘々致承知り、尤御見分所(元)に拙者(伊集院)・十藏替々相勤、其外御役々(元)にも同斷爲罷出事外、

一織部様・九助様御事、富士淺間に御見分所有之り付、此節御下り序(元)に御見分被成り様御奉書御到來(元)に付、被仰談儀有之、葉名(元)に御兩所御付々廿三日ハ御滞在被成管外、又四郎様(元)に今日爰元御出立被成、尤御付々(元)

も一所(元)に立被致り、武右衛門様・久左衛門様(元)に御立日限不相知り得共、是又近日御發足(元)に候半と存外、玄蕃様(元)に近日中御在所(元)に御引取、次郎九郎様(元)に松御役所(元)に御引取之管外、

一御手傳方人數江戸・御國元(元)に引取り儀、勝手次第可致旨被仰渡、先日御徒目付(元)も木屋引拂被仰渡候得者、旅宿同前(元)に故、御手傳方ハ三日滞(元)に有立有之り(元)も不苦段承り、拙者を初江戸(元)に差越り面々、早速爰元出立可致事(元)に得共、受負金都(元)に不相渡も有之、追々申受(元)に差越、其外惣引取(元)に付る者、元方仕廻方も不(元)相調り付、折角差急せ、明廿五日十藏出立有之、拙者(元)に廿六日罷立管外、尤御役々(元)に左右兩日(元)に立申渡、委細別紙(元)に申越通り、且又其元(元)に差下り面々今日も段々差立、明後廿六日迄不殘差立遣管外、

右之通御普請所首尾能御成就(元)に、出來榮御見分迄も無御滞相濟、御手傳方御引取被仰渡、先以頂上之儀奉存外、江戸(元)に表右之趣早々飛脚を以申上り、此段急飛脚を以申越外、以上、

(元)「實曆五年」(元)七月廿一日

五月廿四日

(元)平田頼負

(米)
伊集院十藏殿
島津主殿殿
鎌田典膳殿

重年公御譜中

扣正文在家老座

御手傳御普請

一二三之手御普請御成就二の、御見分迄

相濟外段者、先月廿七日飛脚便申越通外、四之手御普

請所先月廿二日迄不殘御見分相濟、惣御成就二の則日

木屋引拂迄被仰渡外付、去ル朔日堀田相摸守様に別紙

寫之通御届御名書二の一通、御留守居名書二の一通、

一色周防守様に委御留守居名書二の御届被仰出、相濟

外、

一右通御手傳御普請相濟、御届被仰出外付外者、近衛様・

御三家様并御一門様方御由緒之御方様に其外爲御知有

之外御方様に爲御知壹通り被仰達外、公義御役人様

方、京・大坂共此節者御普請相濟外御届迄之儀外故、

御しらせ無之外、前條相摸守様・周防守様二者御係り

之御事外付、御届外二以御使者一通り御禮爲御知被仰

達たる事二外、御手傳被仰出外節者、御在國二の御

隣國并長崎に者以御書爲御知有之外得共、右通御役人
様方へハ爲御知無之外故、此節者爲御知及間鋪儀と申
談外、

一御普請相濟御届被仰出外付外者

隅州様に 太守様より御吹聴被仰進、且又御祝儀表可

有之外得共、御先例脇二も御手傳之御方御普請被爲濟

候節者、御拜領物等有之事外付、此御方様二及無程御

拜領物等可被遊儀奉存外、左外得者其節御吹聴被仰進

御祝儀表申上方二可有御座と申談、此節者不申上外、

於其元二も御拜領物被遊外段申越外節、御祝儀有之外

様首尾可被致外、

一御手傳場所より御當地に被差越外人數、別紙之通御場

所段二出立、伊集院十藏儀も今日被致出府外、其外之

面二も昨日より到今日致參着外、右人數之内、川上彦

九郎・山元藤兵衛、本外方筆者木脇武左衛門・中村善

兵衛儀者 公儀御入用諸色代之儀二付、青木次郎九郎

様・吉田久左衛門様・倉橋武右衛門様より笠松御陳屋

に御用之儀、出立前晚被仰越、彼表に差越外付、御用

相濟次第致出立二可有之旨、昨日小田原より十藏被

申越外、且又輓負被相果外付、依願直御國元に差越外

面々有之、其段者別紙を以申越通外、此段者爲御存外、

右申越外條 隅州様被達 御聽、御女中様方へも可被申上外、先以御手傳首尾能被爲濟、恐悅御同意奉存外、別紙御届書寫三通、首尾書一通相添差越申外、以上、

(朱) 鳴津主殿
「寶曆五年」七月廿一日
六月六日 鳴津主殿
義岡相馬

(朱) 鳴津主殿殿
「下」
鎌田典膳殿

右別紙

濃州・勢州・尾州川々御普請御手傳被仰付置外場所不殘成就仕、先月廿二日迄見分相濟、小屋引拂、差出置外家來共追々引取外旨申越外、此段御届申上外、以上、

六月朔日 御名

川々御普請御手傳場所四之手御普請出來仕、先月廿二日迄、榮御見分相濟外旨彼表より申越外、此段申上外、

以上、

六月朔日 御名内
岩下佐次右衛門

川々御普請御手傳場所皆出來仕、四之手榮御見分先月廿二日迄相濟外付、小屋引拂、惣奉行其外係り申付置外役人共追々出府仕外旨、彼表より申越外、此段申上外、以上、

六月朔日 御名内
岩下佐次右衛門

1601

(朱) 「覺」
一御書付一通

但御手傳場所御見分相濟、小屋場御引拂ニ付御届
掘田相摸守様
御用人

春日井庄兵衛

右に持參仕差出申外處、御届之趣御承知被成外由、被仰聞外、

(朱) 一書付一通

但四ノ手榮御見分相濟外御届

右御用人様
御取次

磯谷與一右衛門

右同斷差出申外處、追ゐ可申上由この書付請取置申外、

〔朱〕
一一同一通

但四ノ手榮御見分相濟小屋人數等被引拂外御居

一色周防守様
御用人

野江平馬

右同斷差出申外處、御届之趣被成御承知外由被仰聞外、

右之通相勤外首尾申上外、以上、

六月朔日

岩下佐次右衛門

主鈴様

1602
重年公御譜中

私儀當四月國元江之御暇被 仰出外處、持病之疝積不相

勝發足延引仕外段、先月御用番松平右近將監殿に御届ケ

申達外、武田長春院藥服用仕外、今以草臥有之、長途之

〔朱〕「願之通可有御府候」

旅行難叶御座外、暑氣ニ表向申候間、可相成儀御座外ハ

、當九月迄致滞府、養生仕度奉願外、以上、

〔卷〕

「寶曆五年」

六月五日

御名

1603

○松平 隱岐守様(定) 御断松平越中守様(定)

○松平 河内守様(定) 御断阿部伊豫守様(定)

○鳥井 伊賀守様(忠) 御断水野肥前守様(忠)

○御断柳生 備前守様(後奉九) 御断柳生采女様(後)

○御断京極 甲斐守様(高) 御断小笠原縫殿助様(持)

○大久保基五左衛門様(高) 御断久世忠右衛門様(高)

○嶋津 淡路守様(久)

〔〇ハ朱ナリ〕

1604

寫

私事病氣段々保養仕外得共、草臥相増相勝不申外、此段申上外、以上、

〔卷〕

「寶曆五年」

御名

1605

覺

御届書壹通

但御病氣不被成御勝外付

御用番

酒井左衛門尉様

御用人

長澤半兵衛

右に持參仕、御届書差出外處、被成御受取外由、右半兵衛を以被仰聞外、右首尾申上候、以上、

六月十一日 山澤小左衛門(盛)

相馬様

全上

扣正文在家老座

太守様御容躰昨日申越外通夜中より不被遊御勝外付、別

紙之通御病氣不被成御勝、御届昨十一日御退出後、御用

番酒井左衛門様は被仰出、御届書御受取被成外、

右通之御容躰殊に長く之御事あり、俄に御變症共被成御

座りゝ者、御跡目之儀御一類様に御相談難被成儀外故、

前廣に得と被遂御内談度被 思召上、昨日別紙之御人數

様被仰入外處、朱星之御方々様被成御出外、左外御相

談之旨趣御直談難被遊御容躰故、相馬・主鈴より可申上

旨被仰付、右御方々様は 御意之趣申上外處、御内談之

旨趣何れも様思召寄無之、御同意被思召外段、御一同に

御返答外故、猶亦堀田相撲守様に松平隠岐守様御頼、則

日御越被成、御内談被仰進外處、得と被成御承知、未何

分之御返答ハ不被仰遣外、御治定之節、旨趣之儀者委曲

可申越外、然處今朝又々別紙之通御届可被仰出旨、相撲守様御差圖有之、左衛門尉様に被差出候處、是又御受取被成外、夜前より今朝に到、御容躰御同篇ながら猶以御草臥強、御脈御氣薄被成御座外故、御様躰書御食付差越不申外、右次第之御容躰何共氣之毒千萬奉存外、猶追々御左右可申上外、別紙三通、御留守居首尾書二通相添、

此段申越外條 隅州様被達 御聽、御女中様方に可被申上外、以上、

「實曆五年」六月十二日 伊集院十藏

鳴津主鈴

義岡相馬

鳴津主殿殿

鎌田典膳殿

全上

正文在文庫

御用之儀外間、明日五半時其方爲名代一類中一人登城外様可被致外、以上、

「實曆五年」六月十二日 西尾隠岐守

1611

御書付 壹通 覺

但御病氣到今朝不被遊御勝外御届

御用番

酒井左衛門尉様

1610

家重公使松平紀伊守信岑御奏者衆尋問重年之病一、蒙二御懇旨一、島津淡路守久柄代三重年一勤事、

寫

私病氣段々養生仕外得共、草臥相増、昨晚御届申上外通到今朝相勝不申外、此段申上外、以上、

〔實曆五年〕

六月十二日

御名

1609

全御譜中

同年六月十二日

松平薩摩守殿

松平右近將監

酒井左衛門尉

堀田相摸守

1613 1612

重年公御譜中

扣正文在家老座

〔御返答〕

川々御手傳御普請相濟、御場所に被差出置外御役々不殘御當地に到着二、去ル十一日別紙之通御届書堀田

相摸守様は御留守居致持參、御用人を以被差出外處、

御承知被成外旨被仰聞、然處昨十二日御老中様御連名

二の御用之儀外間、明日五半時爲御名代御類中一人御

登 城外様との御奉書御到來二、御名代松平河内守

様今日御登 城被成外處、四時於御白書院御縁類、御

老中様御列座、大御目附様御詰、酒井左衛門尉様より

濃州・勢州・尾州川々御普請御手傳御勤被成外付、時

服時服五十拜領被仰付外旨被仰渡外、御引進之御目付

稻生下野守様二あり、左あり直二爲御禮、御老中様方

河内守様御廻勤、若御年寄様方江老十藏御使者、御

御用人

長澤半兵衛

右之通私相勤外首尾申上外、以上、

〔實曆五年〕

六月十二日

岩下佐次右衛門

相馬様

側衆に老物頭御使者の御禮被仰達り、右通御名代之節者、西御丸に老御登、城無之り故、此節及御登、城無之り、太守様御内證より之御禮ハ、則日

公方様 大納言様に御銘々御文を以被仰上、御簾中様之御禮者

大納言様御方御文之内に被相込

御守殿御差圖之上被仰上、相濟り、

一右に付 隅州様表向御勤之儀、先例相調

公方様 大納言様に老以御飛札御禮被仰上儀奉存り

間、御連署御格書可被差越奉存り、御内證御勤之儀先

例相しころへ（志）押札
本文御書御文章之儀迫而佐、木様五御尋
申上、御案文差越候様可致候 御守殿に相伺り處 公方様 大納言様に

御銘々御文を以御禮被仰上、御簾中様に御禮者

大納言様御方御文之内被相込可被仰上旨、御差圖有之

り間、御禮之御文貳通、是又可被差越儀奉存り、

菊姫様より之御禮者、御手傳被 仰出り節之通 御守

殿に御願可被仰上哉之旨奉伺り處、其通御禮可被仰上

由御差圖有之り、御守殿より被仰上御勤相濟り、

一右通御拜領物被遊り付、京都諸司代・大坂御城代・長

崎御在勤御奉行にハ、御手傳被 仰出り節之通、以御

書可被仰進儀り得共、御病中故、諸司代・御城代に老

京大坂御留守居御使者を以御禮被仰進、長崎御奉行に

老御附人御使者の可被仰進儀り故、京大坂御留守居

に御使者勤之儀、今日便御使番より申越させり、長崎

御奉行に被仰進り儀に付る者、御使番より其元同役へ

今日便申越させり間可申出り條、御附人御使者の可被

仰進り様被致首尾の可有之り、

一右に付御隣國之御大名様に爰元の早晩之通、通達を

以爲御知有之り得共、猶又於其許御隣國御しらせ之儀、

右躰先例を以爲御知有之り儀共被申談、被致首尾の可

可有之り、尤御三家様并御一門様其外爲御知有之り御

方様に爲御知被仰進り、

一近衛様にハ右之段以御書爲御知可被仰進儀にり得共、

前條同斷に付、御留守居御使者の爲御知被仰進、其

外之御方様へも爲御知之御使者相勤り様、今日便京都

御留守居に御使番より爲申越り、

一御太刀・金馬代 壹枚

一縮緬 三拾卷

一二種 千疋

御係御老中

堀田相摸守様

一御太刀・金馬代 壹枚宛

御老 中

酒井左衛門尉様

本多伯耆守様

松平右近將監様

西御丸右同

西尾隱岐守様

秋元但馬守様

一二種 千疋宛

若御年寄

板倉佐渡守様(勝 遊)

小出信濃守様(美 智)

松平宮内少輔様(忠 恒)

西御丸右同

大岡出雲守様(忠 光)

戸田淡路守様(氏 磨)

酒井石見守様(忠 休)

一御太刀・金馬代

一縮緬 貳拾卷

一白銀 百枚

御係御勤定奉行

一色周防守様

右老川々御普請御手傳御仕廻、御拜領物被成り付、御

手傳御勤之御並様方御聞合、右之通御使者を以被進り、

一右御拜領物被遊り付る老

太守様より 隅州様は御吹聴可被仰進り得共、今日ハ

飛脚便故不被仰進り、 姫君様は

隅州様より御承知之上、御吹聴御禮可被仰進儀奉存り、

一右ニ付 姫君様より 隅州様は石川傳太郎殿御使ニ

御歡被仰進り間、被申上御挨拶可被仰進儀奉存り、

一右ニ付爰元詰御役人、今日 御三殿様へ御祝儀、謁御

家老申上、諸士ハ御帳ニ相付御祝儀申上り、於其元御

祝儀之儀、右躰御拜領物被遊り節之先例を以被申談ニ

可可有之り、 隅州様御女中様かたは我々共より御祝

儀、今日ハ飛脚便故、追り申上り様可致り、此段老爲

御存り、

右申越り條 隅州様被達 御聽、御女中様かたはも可

被申上り、先以御手傳首尾能被爲濟、御拜領物被遊、

恐悦御同意奉存り、 隅州様御勤之御書御文被差越り

ハ、日積を以差出可申り、御奉書寫壹通・御届書寫

壹通差越申り、以上、

〔寶曆五年〕

六月十三日

伊集院十藏

〔七月十二日〕

嶋津主 鈴

〔上〕

義岡相馬

〔下〕 嶋津主殿

鎌田典膳殿

重年公御譜中

扣正文在家老座

(朱)御返答

太守様御病氣不被成御勝外付、右之御届被 仰出外段
本文別紙相添被申越題一、致承知 先月廿八日 兩州様達 御勤
 者、昨日申越通外處、御容跡猶々御草臥御増御大切ニ
御女中様方へも申上候、被差越候別紙留置、此段及御答候、以上一
 外故、今日御用番酒井左衛門尉様に御退出後、別紙之
 通御大切之御届被仰出、御届書御請取被成外、

右通段々御勝不被成外付、一昨十一日御一類様被仰入
 御出被成外、御人數書者昨日差越外、其節別紙之通御
 一類様に御相談被成外處、何れも様思召寄及無御座、
 御同意被思召外段御一同ニ御返答有之、堀田相摸守様
 には兼而何角之御内談も被仰進儀ニ外故、松平隠岐守
 様御頼、則日相摸守様に御越、別紙御書付御持參、得
 と御内談被成外處、右御書付者被留置外付、昨日隠岐
 守様又々相摸守様に御越御承知被成外ハ、御嫡子之御
 届被仰出外節、御治定及爲有之筈外得ハ、右御書付御
 用番様に被差出外而及、此通之御書付者御受取有之間
 鋪事ニ外間、被差出外儀者御無用被成可宜外、御書付
 之趣ハ委細被聞召置外條、又三郎様に直ニ御跡式御
 願有之筋ニ思召寄之旨隠岐守様より承知仕、其段申上
 置外、然處御大切之御届及被仰出外付る者、又々今日

別紙之御人數様被仰入、相摸守様思召之譯被仰達

又三郎様に御跡式之儀、又外御相談之上別紙之通御書
 付、今晚嶋津談路守殿を以御用番左衛門尉様に被差出
 外處ニ御受取被成外、尤 御守殿に者我々三人より於
 新御書院荻原殿・岡田殿を以申上外、

但昨日申越外御内談之旨趣ハ、右次第之御事ニ外、
 一右御跡式御書付被差出外付る者、別紙三通一結之御書
 付御用御頼 小笠原縫殿助様を以談路守殿一所ニ被差
 出、是又御受取被成外、

一右通御病氣御大切之御届被仰出外付る者、於爰元兼而
 御通融之御方々様に者右之爲御知有之外、於其元御隣
 國長崎に右躰之節御知せ有之儀ニ外ハ、先例を以可
 被致首尾外、御跡式御書付被差出外儀者、爲御知無之
 外、此段者爲御存外、

右之通御左右爲可申上、極々急飛脚差立外條、此段
 隅州様被達 御聽、御女中様方に可被申上外、御病
 氣段々被差重、御大切之御容跡何共氣之毒千萬奉存
 外、別紙三通并一結御留守居首尾書一通相添、此旨
 申越外、以上、

〔卷〕
「寶曆五年」六月十三日

伊集院十藏

〔卷〕
「七月十二日」

〔上〕
嶋津主鈴

義岡相馬

〔卷〕
〔下〕
嶋津主殿殿

鎌田典膳殿

(の3)

松平右近將監殿
西尾障岐守殿

御医師

〔信〕
武田長春院

〔方〕
井上交泰院

〔目〕
村田長庵

〔春〕
森宗乙

〔君〕
望月三英

右四人藥服用仕候、

右老容躰爲見申外、

〔卷〕
「寶曆五年」六月十三日

御名

相詰罷在候一類共

松平障岐守

松平越中守

阿部伊豫守

鳥居伊賀守

松平河内守

柳生采女

(の1) 1616

右ニ相添別紙

寫

私病氣段々差重、大切之容躰罷成り、此段申上り、以上、

六月十三日

御名

(の2)

寫

私儀病氣差重大切罷成候、於急變御座り共、私嫡子松平又三郎當年拾壹歳罷成り此者、跡式無相違被下置り様奉願り、以上、

寶曆五亥

六月十三日

手振印判相用申候

松平薩摩守

堀田相摸守殿

酒井左衛門尉殿

本多伯耆守殿

(の4)

(の5)

容躰書

水野肥前守
鳴津淡路守

私儀四月中旬比より持病之疝積差發、村田長庵藥致服用、其後武田長春院藥相轉り、然處到頃日不相勝より井上交泰院藥致服用候得共、草臥相増、今晝より森宗乙藥致服用り得共、段々大切罷成り、以上、

^(朱)
「寶曆五年」
六月十三日
御名

(の6)

覺

御届書 壹通

但御病氣御大切付

御用番

酒井左衛門尉様

御用人

關 茂太夫

右に持參仕差上申り處、被成御請取り由、右茂太夫を以被仰聞り、

右私相勤申り、此段首尾申上り、以上、

^(朱)
「寶曆五年」
六月十三日
山澤小左衛門

(の7)

寫

相馬様

私持病之疝積差發、滯府之願をも申上、段々養生仕り得共、快無之、漸々草臥相増相勝不申り、今躰に急變症出可申儀、難計御座り、若大切にも罷成りハ、嫡子又三郎に家督無相違被下置り様相願申答御座り得共、大國をも被下置、其上琉球國迄は領地仕儀御座り處、又三郎事當拾壹歳罷成り、拾七歳以下に若不應之儀も到來仕りぬ者、家中之者共安氣不仕り、依之國元へ罷在り實弟^(久松)鳴津全、當亥二拾四歳罷成り間、此者に相續被 仰付、又三郎儀者右左養子相願り様致度存り、琉球國之儀者、吳國に衣致通融儀御座り故、仕置等に付る衣心遣之儀御座り、一類共に衣申談り、病氣大切にも罷成り者、其節右願書差出可申り哉、兼而御懇意被仰聞儀御座り間、寔之御内々、此及御相談り、何とぞ御心底之程被仰聞被下度存り、以上、

^(朱)
「寶曆五年」
六月
松平薩摩守

1617 継豊公御譜中

1619

繼豊公御譜中

寶曆五年乙亥四月十一日

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又其方病氣同篇ニ有今以不相勝外付、來夏迄罷在彼致養

生度段、同氏薩摩守相願外處、願之通被 仰出、難有由

得其意外、紙面之趣各一覽之事外、恐々謹言、

〔卷寶曆五年〕

六月十三日

酒井左衛門尉 忠寄判

松平大隅守殿

1618

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

亦其方儀病氣同篇ニ有今以不相勝外付、來夏迄國許罷在、

養生被致度段同氏薩摩守相願外處、願之通被 仰出、難

有由得其意外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

〔卷寶曆五年〕

六月十三日

秋田但馬守

〔元涼朝判

松平大隅守殿

1662

扣正文在家老座

〔卷御返答

太守様御病氣御大切之御届并御跡目御願之御書付、御用

〔元御返答 本文被申候趣致承知、先月廿九日 隅州様達 御聽、御女中様方江申上置

全上

1620

重年公御譜中

寶曆五年六月十五日

家重公再訊ニ重年之病、使阿部飛驒守正因御奏來ニ于芝第一

蒙ニ懇篤 上旨、乃賜ニ鮮干鱸一箱、

家治公亦 御懇旨ニ也、島津淡路守久柄代ニ重年ニ奉ニ 恩

旨、松平越中守定賢亦詣ニ執政各位之第一、爲ニ重年ニ謝

恩矣、

竟六月十六日逝ニ去于芝邸、爲ニ此故

家重公及

儲君家治公吊ニ之於繼豊、即執政所ニ投奉書左載之、

(02)

(01)

番様に被差出外段者一昨十三日申越通ニ外、段々御養生
候被差越候別紙三通、此方留置候、以上
表被盡御事外得共、長々之御事ニ増日御草臥、至極御
大切被成御座外、然處今日以 上使御肴御拜領付、

上使之御方は別紙三通之御書付、小笠原縫殿助様より被
差出外、松平隠岐守様ニ表御出外得共、先達御暇御給
之御事故、御遠慮ニ御名前前御書出無之外、右次第之御
容躰氣之毒至極奉存外、此段御左右申上外間 隅州様被
達 御聽、御女中様方には可被申上外、以上、

〔朱〕
「寶曆五年」六月十五日

〔朱〕
「七月十二日」

伊集院十藏

〔朱〕
「上」 嶋津主鈴

義岡相馬

〔朱〕
「下」 嶋津主殿殿

鎌田典膳殿

容躰書

私病氣差重、先達申上外通至極大切罷成外、以上、

〔朱〕
「寶曆五年」

六月十五日

御名

御医師

(03)

右四人藥服用仕外、
武田長春院
井上交泰院
村田長庵
森 宗乙

〔朱〕
「寶曆五年」六月十五日

望月三英
御名

相詰罷在候一類共

松平越中守
松平河内守
柳生采女
水野肥前守
嶋津淡路守

〔朱〕
「寶曆五年」六月十五日

御名

1623

全御譜中

重年之病大 ハナハタ 革矣 ヤカナリ、終六月十六日 未 刻、逝去于江府芝

第一、諡二圓徳院殿覺滿良義大居士一也、暨于同月二十九日之夜一 訃達ニ薩府一、

重年公御諸中

扣正文在家老座

（朱）一御返答

太守様御病氣極々御大切之段者、昨十五日申越道外處、

（朱）一御返答

御容躰被爲差重、御療養被盡外得共不被爲叶、今日未

ル五日急脚を以中越渡候、被差越候別紙此方立留置候、本文則台書、

刻被遊御逝去、姫君様 又三郎様 菊姫様別る御愁

（海傍）二手ニ被差越候付、一通り者此方立留置候、此段及御返答候、以上

賜被 思召上外得共、於御機嫌何ぞ御障不被遊御座外、

（ハナ）

御逝之御届、御用番酒井左衛門尉様は別紙之通嶋津淡

（ハナ）

路守殿を以被 仰出、御届書御受取被成外、且又 姫

（ハナ）

君様ニ奉御忌十日、御服二十日御請被成外御届有之外

（ハナ）

段、石川傳太郎殿より致承知外、

（ハナ）

隅州様 又三郎様 菊姫様御忌服之御届、則日別紙之

（ハナ）

通、是又左衛門尉様は被差出外處、御受取被成外、

（ハナ）

菊姫様御忌服之儀者 御守殿御係小出信濃守様は及御

（ハナ）

届別紙之通被差出外、此段

（ハナ）

隅州様被達 御聽、御女中様方へ可被申上外、

（ハナ）

一御逝去之御弘目、且又 又三郎様に御跡目御願書、左

（ハナ）

衛門尉様に先達る被差出、被受取置外段、爰元之儀今

日御近習役以上者、於御家老座口達ニ申聞、諸御役人諸士者、右同斷、於御用人座御用人より口達ニ承知爲仕外、其元之儀先例之通可被致首尾外、

一右ニ付 隅州様 又三郎様に詰中之諸御役人、今日謁

御家老奉伺御機嫌、諸士之儀者今明日帳相付、奉窺御

機嫌外様申渡外、

一右ニ付爰元御屋敷中悼之儀共先例之通申渡外、其元之

儀是又先例を以可被致首尾外、

一右ニ付於爰元爲御知可有御座御方様は者、爲御知申上、

京大坂御役場御届并爲御知慎等之儀、今日京大坂御留

守居に申越外、於其元長崎に御届、御隣國爲御知等之

儀、先例を以可被致首尾外、

一隅州様其外様は伺御機嫌等之儀者、追可申上外、

右之通極々急飛脚二人ツ、申付、海陸二手同案を以

此段申越外、以上、

（朱）

〔實曆五年〕六月十六日 伊集院十藏

（朱）

〔七月十二日〕 嶋津主鈴

（朱）

〔上〕 義岡相馬

（朱）

嶋津主殿殿

（朱）

録田典膳殿

（朱）

録田典膳殿

（朱）

録田典膳殿

（朱）

録田典膳殿

（朱）

録田典膳殿

（朱）

録田典膳殿

（朱）

録田典膳殿

右ニ相付別紙

(01) 松平薩摩守病氣養生不相叶、今十六日未刻致死去、此

段御届申上り、以上、

(奉) 「寶曆五年」六月十六日 嶋津淡路守(欠)

(02) 同氏薩摩守病氣養生不相叶、今十六日致死去、

忌五十日 六月十六日より
八月六日迄

服十三日 亥六月十六日より
子六月迄

右者私忌服御届仕り、以上、

(奉) 「寶曆五年」六月十六日 松平又三郎

(03) 松平薩摩守病氣養生不相叶、今日死去仕り、忌服覺

忌十日 六月十六日より
同 廿五日迄

服三十日 六月十六日より
七月十五日迄

實子ニあり得共、故薩摩守養子罷成り付、嫡孫之續ニ

御座り、

松平大隅守

忌三日 六月十六日より
同 十八日迄

服七日 六月十六日より
同 廿二日迄

實兄ニあり得共、故薩摩守養子罷成り付、甥之續ニ御座り、

菊

右之通忌服相請申り、以上、

(奉) 「寶曆五年」六月十六日 松平又三郎内 赤松甚右衛門(前)

(奉) 「右御用番様江御届」

(04) 松平薩摩守病氣養生不相叶、今日死去仕り、忌服覺

忌三日 六月十六日より
同 十八日迄

服七日 六月十六日より
同 廿二日迄

實兄ニあり得共、故薩摩守養子罷成り付、甥之續ニ御

座り、

菊

右之通忌服相請申り、以上、

(奉) 「寶曆五年」六月十六日 松平又三郎内

赤松甚右衛門

1627

重年公御譜中

寶曆五年六月十九日

家重公使御奏者并上河内守正賢來于芝第一、哀惜重年終焉、賜香鏡銀五十枚、

家治公亦哀悼之旨矣、島津淡路守久柄代嗣嫡忠洪奉

恩旨勤事、

全上

1628

扣正文在文庫

亡父薩摩守遺骸之儀、先祖之墓所有之外間、國元は差越

申度御座外、此段御差圖被成可被下外、以上、

〔寶曆五年〕六月十九日

松平又三郎

1629

繼豊公御譜中

正文在文庫

同氏薩摩守卒去之段及上聞外處、可爲愁傷と被思召

外、此由可相達旨依

御意如此外、恐々謹言、

1631

重年公御譜中

扣正文在家老座

寫

〔寶曆五年〕六月廿日

西尾隱岐守 忠尚判

松平右近將監 武元判

本多伯耆守 正珍判

酒井左衛門尉 忠寄判

堀田相摸守 正亮判

松平大隅守殿

1630

全上

同氏薩摩守卒去之段及言上外處、可爲愁傷と被思召外、

此由可相達旨、依

御諒如此外、恐々謹言、

〔寶曆五年〕六月廿日

秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

松平薩摩守就病死、遺骸棺ニ入、從江戸薩摩國鹿兒嶋菩提所福昌寺迄差遣申外、箱根・今切兩御關所無相違罷通外様、御手判可被下置外、若此遺骸ニ付、以來出入之儀出來仕外ハ、私申披可仕外、爲後日證文差上申外、仍如件、

松平又三郎内

寶曆五乙亥年六月廿日

岩下佐次右衛門判印

酒井越中守様

河野豊前守様

戸田近江守様

市川出雲守様

全上

扣正文在家老座

〔卷〕箱根・今切銘、御書付二通

寫

松平薩摩守殿就病死、遺骸棺ニ入、從江戸薩摩國鹿兒嶋菩提所福昌寺迄箱根今切關所無相違可被通外、松平又三郎殿内、岩下佐次右衛門斷付如此外、以上、

寶曆五年亥六月廿一日

越中印

出雲印

箱根人改中

近江印
豐前印

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見候、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌被相同之外、益御安全御儀外之間可御心易外、隨而鏗節一箱被獻之候、各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔卷〕寶曆五年 六月廿七日

酒井左衛門尉
忠寄判

松平大隅守殿

全上

御札令披見外、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌被相同之外、益御安全御儀外間可御心易外、隨而鏗節一箱被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔卷〕寶曆五年 六月廿七日

秋元但馬守
涼朝判

松平大隅守殿

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿日東叡山 御靈前

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

(奉)

「寶曆五年」六月廿九日

酒井左衛門尉

忠寄判

松平大隅守殿

(表紙)

<p>追 舊 記 雜 錄</p> <p>卷 百 十</p>	<p>繼 豐 公</p> <p>寶 曆 五 年</p> <p>自 七 月 至 十 月</p>
---	--

1636 繼豐公御譜中

嚮重年自知三病不起、上書請使嫡子又三郎忠洪襲封、

台命未至、因繼豐下令於三州如左、

1637 全上

正文在文庫

薩摩守殿被致卒去、跡職又三郎殿被申出置、未被仰出、此時節外條、國中靜謐之儀專可心掛旨末迄及可申渡外、

(卷)
「寶曆五年」七月

1638

全上

正文在文庫

(島津重年)

薩摩守殿被致卒去、跡職又三郎殿被申出置、未被

仰出、此時節外條、家老其外諸役人猶以入念可相動外、

(卷)
「寶曆五年」七月

1639

全上

正文在文庫

隅州様仰出謹承知有之、奉行頭人より支配下不洩様申渡可有之候、

七月

(島津久忠)

主殿

(鎌田政貞)
典膳

右三浦白木御文書五番箱入トアリ 十九

明和元年申十一月十二日左京殿より御渡御文書箱正納置、

郡山次郎左衛門トアリ

1640

繼豐公御譜中

同年七月二十七日應教島津淡路守久柄爲忠洪至三執政

〔西尾隱岐守忠尚亭〕、則執政列居忠尚傳^(一)。台命曰、重年之遺全賜^(二)之於忠洪^(三)、爲^(四)其幼^(五)故四封之內及琉球國之政務、繼豐宜^(六)加意如^(七)先規^(八)行^(九)之也、而所^(十)賜^(十一)繼豐^(十二)奉書、八月二十二日到^(十三)來于薩府^(十四)、翌日以^(十五)禰^(十六)寢孫左衛門清香^(十七)爲^(十八)使節^(十九)、驅^(二十)之于江都^(二十一)奉^(二十二)謝焉、

1641 正文在文庫

今度同氏薩摩守願之通遺領無相違、嫡子又三郎被^(一)仰付^(二)外、然處又三郎事依爲幼少、領分并琉球國仕置等之儀、諸事先格相違無之樣、其方心を附取計^(三)外樣可仕旨上意^(四)外、可被存其趣^(五)外、恐^(六)謹言、

〔實曆五年〕七月廿七日

西尾隱岐守 忠尚判

松平右近將監 武元判

堀田相摸守 正亮判

松平大隅守殿

右ノ上包ニ左ノ如シ

堀田和換守

松平大隅守殿

松平右近將監

西尾隱岐守

右ノ外箱ノ上蓋ニ左ノ如シ

1642 重豪公御譜中

正文在文庫

又三郎様御相續被仰出、御幼年ニ付御領分并琉球國御仕置、御心を被附、御取計^(一)外樣ニと之事、
隅州^(二)江之御奉書、^(三)〔上〕

御用之儀^(一)外間、明廿七日九時前隱岐守宅^(二)其方爲名代、一類中一人可被差越^(三)外、以上、

〔實曆五年〕七月廿六日

西尾隱岐守

松平右近將監

酒井左衛門尉

堀田相摸守

松平又三郎殿

1643 重豪公御譜中

寶曆五年乙亥秋七月二十七日、應^(一)老中奉書^(二)、使^(三)支族島津淡路守久柄代^(四)忠洪^(五)、與^(六)御先手小笠原縫殿助持廣^(七)、^(八)頼用^(九)詣^(十)用番老中西尾隱岐守忠尚^(十一)之第^(十二)上、則堀田相摸守正亮^(十三)・松平右近將監武元^(十四)及忠尚^(十五)列居、大目附能勢因幡守頼次亦在^(十六)席、於^(十七)是忠尚進^(十八)席傳^(十九)、台命曰、亡父重年之遺領全賜^(二十)之於忠洪^(二十一)、然猶^(二十二)以^(二十三)幼弱^(二十四)、領國及琉球國之政務宜^(二十五)繼

豐加レ意如二先規一行レ之、更書其言於片楮一以授二久柄、久柄退而來二芝邸一、傳二台命於忠洪一、直詣二老中一。若年寄各位之第一、爲二忠洪一奉レ謝二恩篤之辱一、

全上

正文在右筆所

又三郎事依爲幼少、領分并琉球國仕置等之儀、諸事先格相違無之様大隅守心を附、取計外様可仕由上意外間、可被存其趣旨以奉書大隅守に相違候事、

全上

扣正文在右筆所

私儀、今日亡父薩摩守遺領無相違被下置、難有奉存外、且又私幼少ニ付而仕置等之儀、諸事先格相違無之様心を附外様、同氏大隅守に御奉書を以被仰渡外段承知仕、重疊難有次第奉存外、右之御禮、名代嶋津淡路守を以申上外、以上、

(朱)「申淨候、以上」

(朱)「寶曆五年」

七月廿七日

(鳥井飛騨) 松平又三郎

(朱)「近以野岫大信公御傳」

寶曆五年乙亥七月廿七日、閣老承旨會于西尾隱岐守忠尚第、徵旁族久柄島津後、以命世子襲封爵、是爲大信公、八月十五日久柄爲 公造朝獻 大家家重 御太刀一腰・御刀一腰世光・縮緬廿卷・白銀百枚・御馬二疋、儲君家治 御太刀一腰・御刀一腰正家・白銀百枚・御馬一疋、御簾中白銀十枚・縮緬十卷進見 兩公於白書院、以謝襲封恩、時不親朝以尚幼故也、九月九日島津圖書久亮爲御家老、樺山左京久智・鎌田隼人爲大目附、凡幼主享封必遣使伴監其國例也、於是二十二日命 公諭告遣御使番京極兵部高主、

全御譜中

扣正文在右筆所

私儀、亡父薩摩守遺領無相違被 仰付外處、幼少付而領分并琉球國仕置等之儀、諸事先格相違無之様心を附、取計外様可仕由上意之旨同氏大隅守に以御奉書被仰渡外、右之段於國許大隅守承知仕外上、御禮之儀如何相勤可申外哉、被成御

五口高橋縫殿種、爲御家老、十二月二十八日免大目附小笠原郷左衛門終終(種心)自百苟、(身力)

大隅守承知仕外上、御禮之儀如何相勤可申外哉、被成御

差圖可被下候、以上、

〔寶曆五年〕七月
(鳥津忠洪のち重孝)
松平又三郎

〔右之通被相認、堀田相摸守様江水野肥前守様より御内談可被成由ニ而、肥前守様御直相摸守様御方江被成御持參、右御書附被扣置、御口達を以右之御動向之儀、御内、御尋被成下處、右ニ付而者被相伺ニ不及、使札を以被相勤下様可被成旨御承知故、右之御書付ハ御内見ニも不被入由、岩下佐次右衛門致承知外、〕

全上

扣正文在家老座

又三郎様御幼年被遊御座下得者、御政務等之儀、且御十七より内之御事有之、旁付
本文達、御聽候、別紙張紙之通、御中途より相馬殿被申越候付、猶又者之節相尋候処、張紙之旨趣相替無之段承候付、張紙之趣者達、御聽置候、

隅州様御隠居御病身なから御用筋之儀共被聞召候様、右之趣を以、又三郎様方御願被成度上之儀、御願又者御内
願被守様五及御挨拶候者、不相違様可被致首尾候、御幼年之儀御持者、以後御跡目御心遣不被遊筋之儀ニ付而者、御内意を以申越候、以上、

意被仰上様者有御座間敷哉、堀田相摸守様ハ御内意之儀、相馬殿申談趣有之、達、御聽水野肥前守様ハ主鈴致參上、
(鳥津久徳)

右之次第得と申上外處、委細被聞召通相摸守様ハ右之旨趣被仰込置外處、去ル廿一日相摸守様より肥前守様ハ右
(糸)江戸より之返答

本文朱書之趣致承知候、 隅被守様江之御挨拶相済候段先便申越候、御

之儀ニ付る者

御上より思召有之外間、御願又者御内意等者御差扣被成下様と被成御承知外旨、翌廿二日肥前守様方承知仕、其
内用之儀ニ付而者、別紙を以申越候、以上、
伊達殿御部
十二月廿一日
鳥津主鈴

段申上置外、然處今日別紙御問合申越外通被仰渡り、依之肥前守様ハ主鈴致參上、御相應ニ申上置外、相馬殿
鳥津主殿殿
義岡相馬殿

ハ別紙を以今日便申越外、此段申越外、以上、
鎌田典膳殿

〔寶曆五年〕七月廿七日
伊集院十藏
(久恵)
鳥津主鈴
(久恵)

鳥津主殿殿
(久恵)
鎌田典膳殿
(致昌)

全上

扣正文在家老座

又三郎様御幼年被遊御座下得者、御政務等之儀、且御十七より内之御事有之、旁付
隅州様御隠居御病身なから御用筋之儀共被聞召外様、右之趣を以

又三郎様より御願被成度上之儀、御願又者御内意被仰上様者有御座間敷哉、堀田相摸守様ハ御内意之儀、先頃
申談趣達、御聽、水野肥前守様ハ主鈴致參上、右之次第

申談趣達、御聽、水野肥前守様ハ主鈴致參上、右之次第

右ニ押紙

得と申上外處、委細被聞召通相摸守様ハ右之旨趣被仰込置外處、去ル廿一日相摸守様ハ肥前守様ハ右之儀ニ付テ御上より思召有之外間、御願又者御内意等者御差扣被成外様と被成御承知外旨、翌廿二日肥前守様ハ承知仕、其段申上置外、然處今日別紙御問合申越外通被仰渡外、依之肥前守様ハ者主鈴致參上、御相應申上置外、御國元ハ者別紙を以今日便申越外、此段申越外、以上、

〔實曆五年〕

七月廿七日

伊集院十藏

義岡相馬殿

嶋津主鈴

本文隅州様御用被 聞召外儀共御遺言書之節、御一類様方御相談之上、島津〔久松〕全殿ハ御相續、又三郎様ニ者全殿御養子と御申之筈ニ者、松平〔定馬〕隱岐守様を以相摸守様ハ御内談之節、全殿御相續と申儀者

又三郎様御幼年故無是非思召之事外、直ニ 又三郎様御家督被 仰出外様有之、幼年之儀共如何様之儀有之外共、以後御跡目心遣仕間鋪旨被仰出外様仕度外、又者

又三郎様御相續ニ者乍御隱居

隅州様御政務被 聞召上外様ニ者菟角何れと別ニ仰出無之候得者、家中之者共ニ者安心不仕旨隱岐守様ハ拙者より得と申上、相摸守様ハ御越爲有之事外、又三郎様御家督之節、若何之御沙汰及無之外ハ、

隅州様ハ御用向御頼之儀御届被 仰出外様ニ可有之事外旨、最初主鈴殿ニ者御相談申、隱岐守様ハ申上外次第及爲申達置敷と覺罷居外、乍然最初隱岐守様を以被仰達外儀相達兼外筋及有之、本文肥前守様を以御内意被仰込外儀ニ者及候哉、江戸ニ者申談置外と者相違之様ニ被存外付、隅州様御奉書御承知之上、乍御内々相摸守様ハ段々御世話之御禮共被仰進事外ハ、隱岐守様ニ者御挨拶可有御座哉と奉存外、本文問合之筋ニ其元ハ及被申越外者、隱岐守様御世話之處違不申外付、右之趣を以被達御聽、御首尾有之、江戸ハ及其元より御返答有之度外、以上、

〔實曆五年〕

八月九日

義岡相馬

嶋津主殿殿

鎌田典膳殿

重豪公御譜中

扣正文在家老座

太守様御家督被

仰出、御幼少付

隅州様ハ御仕置等之儀、諸事御先格無御相違御心を被附、

御取計ハ様被 仰渡、難有被 思召、 隅州様御病中

御苦勞之御事ハ得共、萬端御差圖被遊被進ハ様御頼被

思召候、此段私共より可申上旨被仰付ハ間、各より可被

達 貴聞外、以上、

〔寶曆五年〕七月廿九日

〔八月廿五日〕

伊集院十藏

島津主鈴

島津主殿殿

鎌田典膳殿

1655 重年公御譜中

扣正文在家老座

嶋津主殿

鎌田典膳

圓徳院様御鬢髮、高野

御登山之儀、於江戸尾張様・水戸様・松平加賀守様・松

平陸奥守様・細川越中守様御方承合ハ處、加賀守様御方

老、萬治年中之比迄老御石塔迄被相建、御鬢髮等御登山

之儀不相知、其以後老相止ハ由、陸奥守様御方も御鬢髮

御登山無之、御石塔迄を被相立、其外様老御登山無之、

御石塔も不被相建由ニハ、此御方之儀老

龍伯様以來 御代々

慈徳院様迄

御登山爲被遊儀御座ハ得共 龍伯様以前之

御先祖様方老 御登山被遊ハ儀相知不申ハ、此節之儀如

何可有御座哉、奉伺ハ、以上、

〔寶曆五年〕八月

全上

正文在文庫

御近代老 御鬢髮高野

御登山爲被遊儀ハ得共 隅州様思召有之

圓徳院様御鬢髮老 御登山ニ不及旨被 仰出ハ間、此段

可書留置ハ、

〔寶曆五年〕八月

主殿

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

1656

〔寶曆五年〕八月

〔八月廿二日〕

山田元右衛門

山田元右衛門

1657

正文在文庫

御近代老 御鬢髮高野

御登山爲被遊儀ハ得共 隅州様思召有之

圓徳院様御鬢髮老 御登山ニ不及旨被 仰出ハ間、此段

可書留置ハ、

〔寶曆五年〕八月

主殿

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

家督之御禮申上_レ下_レ節、家來九人

御目見被_レ仰付_レ下_レ先例御座_レ得共、此節_ニ以名代御禮申上_レ付_レ付_レ、家來_ニ御目見不奉願_レ、私初_ル御目見相願_レ下_レ節、家來共_ニ御目見之儀可奉願_レ、此段被聞召置可被_レ下_レ候、以上、

八月七日

松平又三郎

1659

全上

同年八月七日降_レ命曰、家老及百執事夫宜_ニ依_レ舊奉事_一也、不_レ及_レ復改_申其誓詞、

1660

全上

扣正文在右筆所

今度我等_ニ家督被_レ仰付_レ付_レ、家老其外諸役人此内之_ニ通可相勤_レ下_レ、
隅州様御方勤_レ下_レ者_ニ只今之通可相勤_レ下_レ、

右之通家老中令承知、諸役人_ニ老家老より直申渡、於_レ國許_ニ以此旨可申渡候、

(朱)

「實曆五年」 亥八月

(朱) 「右仰出亥八月七日御弘メニ付、前以古案書拔、御家老衆_江差

上置_レ、被達_ニ貴聞、御近習役方_江書拔被扣置、御弘メ前日

書調之儀、御近習役_ハ直御右筆_江被相逢_下而_レ下書被渡_下付、
右之通書調、御近習役_ハ追水善_江左衛門_江差出_下、左_下而_レ於御前
御家老衆_江御直_ニ被仰出、右仰出之御書付御持_下り、御側廻_・
中通之諸役人_江者、大御書院三之間、表方諸御役人_ニ者表御
書院三之間_ニ而_レ御家老衆御出席_ニ而、兩度_ニ御右筆讀之、其
外詰中之諸士_江者、右_ニ仰出之寫御家老座調_ニ而、表方御馬
廻新番之内より讀之、於新座御用人出席_ニ而_レ御弘メ也、鹿兒
島與頭宅_ニ被準_下由_ニ候、」

外詰中之諸士_江者、右_ニ仰出之寫御家老座調_ニ而、表方御馬
廻新番之内より讀之、於新座御用人出席_ニ而_レ御弘メ也、鹿兒
島與頭宅_ニ被準_下由_ニ候、」

外詰中之諸士_江者、右_ニ仰出之寫御家老座調_ニ而、表方御馬
廻新番之内より讀之、於新座御用人出席_ニ而_レ御弘メ也、鹿兒
島與頭宅_ニ被準_下由_ニ候、」

1661

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見_下、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、將
又爲端午之御祝儀、時服并御肴拜領之、難有由得其意_下、
紙面之趣各申談及_上聞_下、恐_レ謹言、

(朱)

「實曆五年」 八月九日

松平大隅守殿

堀田相摸守

正亮判

1662

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又從

公方様爲端午之御祝儀、時服并御肴拜領之、難有由得其
意外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

(朱)

「寶曆五年」

八月九日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

1663

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、五月八日東叡山 御靈前
御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

(朱)

「寶曆五年」

八月九日

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

1664

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月晦日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

(朱)

「寶曆五年」

八月九日

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

1665

繼豊公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段
之御仕合外、恐々謹言、

(朱)

「寶曆五年」

八月十一日

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

1666

全上

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段
之御仕合外、恐々謹言、

(朱)

「寶曆五年」

八月十一日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

1667

繼豊公御譜中

頃年濃・尾・勢三州河決堤壞、居民苦_二水災_一久矣、重年承_二台命_一遣_二國大夫諸有司_一、大興_二入徒_一作治、期年廼成水道浚利、居民得_レ免_二水災_一也、於是賜_二時服五十領_一褒_二賞其功_一、國大夫諸有司亦賞賜有_レ品、重年爲_二疾病_一松平河内守定多登_レ城爲_二重年_一拜_二戴_一之、執政酒井左衛門尉忠寄傳_二台命_一矣、繼豐遙聞_レ之呈_二書翰_一奉_レ謝_レ之、則執政投_二奉書_一答_レ焉、

1668

全上

正文在文庫

御札令披見_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、將又六月十三日同氏薩摩守爲名代、松平河内守登_レ城、今度川_レ御普請御手傳相勤_レ付、時服拜領難有由得其意_レ、紙面之趣各一覽之事_レ、恐_レ謹言、

(朱)

「寶曆五年」八月十一日

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

1669

全上

御札令披見_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、將又六月十三日同氏薩摩守爲名代、松平河内守登_レ城、今度川_レ御普請御手傳相勤_レ付、時服拜領之、難有由得其意_レ、紙面之趣令承知_レ、恐_レ謹言、

1670

全上

御札令披見_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、將又同氏薩摩守病氣之節、爲

御尋、以_レ上使御懇之蒙

上意、從

大納言様表

御詫之趣被承之、難有由得其意_レ、紙面之趣各申談及上聞_レ、恐_レ謹言、

(朱)

「寶永五年」八月十一日

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又同氏薩摩守病氣之節、爲 御尋、以 上使御懇之蒙

上意、從

大納言様及 御詫之趣被承之、難有由得其意外、紙面之

趣及言上外、恐く謹言、

〔實曆五年〕

八月十一日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

一筆啓上仕候、

貴公様益御機嫌能被遊御座、恐悦奉存外、然者私儀先月

廿七日家督無相違被 仰出、難有奉存外、將又私幼少付

刃領分并琉球國仕置等之儀、諸事先格相違無之様被附御

心、御取計御座外様 上意之旨 御奉書を以被仰渡、重

疊難有仕合奉存外、此段爲可申上如斯御座候、恐惶謹言、

八月十三日

〔島津重豪〕
松平又三郎

進上隅州様

全上

扣正文在家老座

〔宋〕御返答

御家督御相續被 仰出外付、御家老其外諸御役人 隅

州様御方勤之面々及、此内之通可相勤旨以御書附被仰

出、去ル七日私共并嶋津將監御座之間に被 召出、

御先代之通可相勤旨 御意承知仕、御請御禮申上外、

各ニ及御先代之通可相勤旨被 仰出外間、可被奉承知

外、右仰出御書附差越外條

隅州様被備 御覽、各拜見可被仕外、各名代拙者共承

知仕外、御請御禮被申上ニ可可有之外、

一 諸御役人ニ是同日 仰出之趣、於席々口達ニ申聞、

御右筆讀之拜聞仕、いづれも御禮申出、首尾書を以申

上外、於其許及諸御役人ニ先例之通被申渡ニ可可有之

外、京大坂に是今日便申越外、

一 春井・山野儀此内之通相勤、春井事者御城使之儀及此

内之通相勤外様被仰付、其段申渡御請申出候、

右申越外間 隅州様被達

御聽 御女中様方に被申上儀者可被申上候、以上、

〔實曆五年〕

八月十三日

〔宋〕
伊集院十藏

〔宋〕
一月十六日

〔宋〕
島津主鈴

島津主殿殿

義岡相馬殿

鎌田典膳殿

全上

扣正文在家老座

(朱) 御返答

御家督付、御袖判之儀 御先代者御家督被 仰出、其涯

於 御座之間御家老中拜見被仰付、諸御役人諸士之及御

弘メ有之外處、此節之儀者 隅州様 御仕置等之儀被仰

渡趣付可者、別紙之通被 仰出筋ニ及可有御座外哉、御

幼少外得共、御袖判之儀者格別ニ外得者、御書判可被遊

哉、亦者御印判ニ及可被遊哉、被相窺 御意之趣被申

越外者、其節達 貴間外様可仕と申談外、

淨國院様御家督之節者、翌年御袖判被仰出外筋書留相見

得外、此段爲御納得候、以上、

(朱) 「寶曆五年」

八月十三日

(朱) 「九月廿八日」

(朱) 上

伊集院十藏

島津主幹

島津主殿殿

義岡相馬殿

鎌田典膳殿

全上

正文在文庫

明十五日家督之御禮被 仰付外間、名代一人五時 御城

江罷出外様可被致外、以上、

(朱) 「寶曆五年」

八月十四日

西尾隱岐守

松平右近將監

本多伯耆守

酒井左衛門尉

堀田相摸守

松平又三郎殿

重豪公御譜中

同年八月十五日應 老中奉書、使下支族島津淡路守久柄

代三忠洪一登 營上、獻 御太刀一腰・御刀一腰 長式尺三寸二分

代金二十 有格 縮緬二十卷・白銀百枚・御馬二匹 共裸背、一黒黒鹿毛

寸隅州末吉野牧 于

大樹家重公、御太刀一腰・御刀一腰 治工原正家、長式尺三・白

銀百枚・御馬一匹 裸背、月毛七歳四子 寸隅州福山野牧

儲君家治公、白銀十枚・縮緬十卷 紅五卷于 白五卷于

御簾中 家治公好匹、関院御 而於 白書院一拜二謁 正尹直仁親于姫宮

1680

絳豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又同氏薩摩守病氣之節、爲 御尋以 上使御着拜領之、從

1679

全御譜中

扣正文在右筆所

私儀今日家督之御禮幼少故、以名代申上外處

御目見被 仰付、難有仕合奉存候、右御禮名代島津淡路

守を以申上候、以上、

〔本〕「寶曆五年」 八月十五日

松平又三郎

兩公二代一・絹帛二拜二詔一命一也、必由二先嗣一家島九人陪從者奉レ職二御太刀・馬一故豫有レ所レ請今、奉レ禮二謝襲封之儀一、鳥居伊賀守忠孝奏二達不レ及二此一矣、
之、既而登二西城一、於二大廣間一謁二奏者衆朽木土佐守玄綱一、又奉レ謝レ之既退去、直詣二老中各位之第一、申謝而各贈二白銀三枚于 本營之老女、白銀二枚于表使女、其他贈二太刀・馬代・絹帛・酒肴等於老中及一有司親戚知己、有レ差、皆如二先例一焉、

1681

今上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又同氏薩摩守病氣之節、爲 御尋以 上使御懇之蒙 上

意、御着拜領、從

大納言様及 御誼之趣被承之、難有由得其意外、紙面之

通及言上外、恐々謹言、

〔本〕「寶曆五年」 八月十五日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

1682

〔本〕「雜抄」

每朔之御條書

掟

一公義之御政務堅固相守之、段々被 仰出御條目之趣、

大納言様表 御誼之趣難有由得其意外、紙面之通各申談及 上聞外、恐々謹言、
〔本〕「寶曆五年」 八月十五日 堀田相摸守 正亮判

松平大隅守殿

謹む可奉得其意事、

一 幾里志丹宗門之義、御太禁之條、領内稠敷所令制禁也、
弥以相守此旨、自然隱居者於有之者、見立聞立可申出
之、公義御褒美之上自分之褒美急度可申付之事、

附 一向宗之儀子細有之、當家代々令禁止之早、若違
犯之族有之者、不依貴賤宗門改人其外支配頭へ可
申出之事、

一 當家累代第一相守 公義之御政法并參勤交替無懈怠相
勤之、且復國家之仕置無緩練就申付之、首尾能所令連
續也、國中_レ之者共存此旨、勵忠義奉公方無吳儀可相勤
之、

附 親子兄弟之睦、朋友之交、正禮法不紊風俗、就中
若者共學文武藝俄修煉難成事_レ間、別_レ心掛可相
嗜之、其身勤正敷、行跡能者_ハ、奉公之品能可召
仕之、連々俄儘に生立、不似合月代・衣類等、吳
様之爲躰_ニの大勢列立、或路次門頭に寄屯、非法
之狼藉等を働、仕置之妨に成義甚以不可然、稠敷
令制禁之事、

一 武具馬具等分限相應に可調之、見分迄を存、或吳様、
或結構成道具調間敷_レ、龜相に有之_レ共不事欠義を專

相者可致所持、左様成無心掛、領過分之知行、忘數代
之恩顧、耽身之安樂、或妻子以下之衣類を飾、或_ハ愛
酒宴遊興、内證之驕に身上令衰微之輩_者不勤之至也、
尤雖爲小身應分限可致其心得、何之子細も不相知、本
身躰令逼迫、奉公難勤者_ハ可及竅議之間、常々可用儉
約、次_ニハ一身之以才覺領地をも難致所持、何之勤も
不致、本マ、(怒カ)姿_ニ誇利欲、專自己之輩_ハ爲國家之費之條、能
可守仕置之趣儀可爲肝要事、

附 誦事奉公方申付刻、或輕義を申立、或_ハ構虛病、
於令難澁_者可爲曲事事、

一家老中_方申付儀致違背間敷_レ、其外奉行・頭人申付趣
支配中之者無吳義可相勤之、惣_レ下役之者_ハ其分相立
_レ様相心得、禮儀正敷、頭人_方_者對下役不致無禮_丁啻
_ニ相交、役所之風俗無作法無之様可相嗜事、

一 不依何色黨をむす_レ、類を引、或鼠肩或致連判、其所
之妨に可成程の事を相企義一切令禁止早、若違犯之族
有之_者可行嚴科、口事沙汰之義於與中可相濟之、自然
與中之扱於不致承引_者可遂披露、決斷之上非義相究_レ
ハ、可爲重罪事、

一 喧嘩口論堅令停止也、萬一不意之儀_ニて及諍論_レとも

隨分致堪忍、短慮之働無之樣致覺悟、道理於有之者可
遂披露、理不盡に事を破るにおひてハ沙汰之上加成敗、
没収所帶、勿論雙方荷擔之人者不論理非、本人可爲同
罪事、

一隱居願之儀、或ハ病者、或老躰之外申出間敷事、

一於亂氣之者、親類共入念可申付之、令油斷惡事を仕出

外ハ、親類中可爲越度事、

一不限地頭所并一之地、法外之仕置非分之課役等於申

付者、可及沙汰、且又農民之仕置題目之事外條、飢寒

之くるしミなきやうに救之、耕作之時節を不違、年貢

取納等之義無油斷樣其支配人出精可申付之事、

一諸所境目之義、常々申付置外條、別入念萬一隣國騷

動之義於有之者、實否共早速鹿兒嶋へ可令言上、

附 境目他方へ入交外所者、他領人之縁與又ハ別の致

入魂儀堅令禁止事、

右條々堅固可相守之、此外加判形申渡置外條目之趣致

忘却間敷外、就中留守中之義、不依大身小身領國靜謐

之義專可心掛外、若違犯之族於有之者、可及沙汰者也、

仍如件、

右之通從 御先代被 仰出外、到當代弥不致忘却堅固

可相守之者也、

寶曆五年八月十五日

1683

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、同氏薩摩守卒去付外 上意之趣奉書相達

難有由得其意外、紙面之趣及言上候、恐々謹言、

(卷) 寶曆五年 八月十九日 秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

1684

重豪公御譜中

同年八月十九日進 皇縮緬二十卷・二種一荷子 竹姫君、

贈 縮緬三卷・二種三百匹于菊姫、同日菊姫亦見 贈 二

種五百匹、二十五日贈 縮緬三卷・二種五百匹于阿部伊

勢守正契之室 歿於 諸代、皆賀 承統之儀 也矣、

1685

重年公御譜中

嚮忠洪欲 販 葬重年遺骸於本國玉龍山福昌寺、懇之

于 幕府、乃承 免許 矣、於 茲今年六月二十五日 刻西

維寶曆五乙亥歲夏

靈綱出於芝第入于大圓寺、昇二十六日刻發發大圓

寺赴國、大圓寺海卯和尚・戒翁寺融道和尚、家老義

岡相馬久中、側用人二階堂林左衛門行通・河野安之右

衛門通古其外近侍步行士數十人護靈棺供奉焉、即歷

東海道・美濃路兩驛、七月十一日到城州伏見、一日

滯棺、同十三日去伏見沿流泊攝州大坂、而滯棺兩

日矣、同十六日發於大坂、經山陽道、八月四日着

長州赤間關、直航豐州大里過九州路、同月十四日

到着封內出水專修寺、昇十五日止宿阿久根蓮華寺、

同十六日至隈之城稱名寺、同十七日入伊集院雪窓

院、厥昇十八日夜戌時到着魔府福昌寺、即安遺體于

御所之間、同十九日夜入棺、

○同月二十一日夜安棺于客殿展法筵、起龜者南林寺

疎山和尚、鎖龜者妙谷寺教州和尚、奠茶者興國寺大龍

和尚、奠湯者皇德寺光易和尚起龜・鎖龜・奠茶・奠湯等皆當載于

文于福昌寺、即寺僧報曰、雖屬考之乎佛無風之乎、體倍而不獲焉、今中關此事僧

尺亡而其徒存者無有傳焉稿者也、是以無復察之何、仍不得以載于茲、自是下葬場

之備及下炬、維那者元枝書記役之、大眾讀經畢而烏津備中

貴儔代忠洪忠洪在江府、故及于此、奉獻祭文刑之代辭、祭文也、

皇考國德院殿故從四位下左近衛少將薩隅日三國主兼領

琉球國、源公覺滿良義大居士寢疾于東武芝邸、湯藥無

驗終以六月十六日戌午奄然棄世於邸正寢寢繼明之曜徂

嗣德之芳、於是奉還靈輅於本國、同月二十六日發江

府、秋八月二十一日壬戌奉葬于府下玉龍山、隨梵儀設

闍維、嗣子源朝臣宋爲津重孝「忠共」方今在東武、水遠山香不得從

靈輅而歸國、况復不能執紼所以慟哭不堪也、故命族臣

宋「貴儔」恭陳山海微供、敢昭告于皇考源公之靈、其辭曰、

嗚呼哀哉

嗣業累代 國治民康

量容海嶽 氣衝天蒼

刑無不省 賞無不章

圓流內襲 德音外彰

磨文星斗 輝光秋霜

上天鐘美 五百歲昌

嗚呼哀哉

寬度居意 温恭成常

樂朝聞道 好夕不違

專榮吐握 治具最振

必宜惻隱 仁義兩行

豈知三國 自冠列將
千古永扇 斯以無疆

嗚呼哀哉

炎暑屢至 天放地荒

今茲何歲 值此不□

撫愛之厚 恍如侍傍

考慕之薄 肅非可忘

仰天哀絕 陟岵悲傷

感千蒼梧 想彼甘棠

嗚呼哀哉

關路崎嶇 滄海渺茫

瞻望不及 涕泗已滂

肝腸碎斷 遺恨深長

月滿虛館 風拂空房

遙陳俎豆 爰以燒香

神其叵測 冀垂鑒光

嗚呼哀哉

尚饗

○同日夜時亥靈棺出於客殿、而營土葬之禮、葬馬二匹也、其一匹者梶原助右衛門景隆・梶原平兵衛景俱、一

匹者梶原清左衛門景珍補生・梶原傳内景用率之、燈籠

者木藤次右衛門範常・木藤休之進成興・木藤彦左衛門

成昌・木藤四郎兵衛貞高、幢者中村左十郎種昌貞高・種昌少也故

不及・中村勘右衛門友隣・中村孫右衛門住賢中良・中村

龍存坊兼福、香爐者香合長野筑右衛門祐精、茶碗者長

野半助祐衛指宿、湯椀者長野市右衛門祐昇末吉、花瓶者

長野三左衛門祐里彌生、燭臺者長野覺左衛門祐名高岡、

下炬松明者長野作右衛門祐壽小根、茶湯提子者長野幸左

衛門祐隆清水持之各雉髮也、島津備中貴儔持神主二列

于棺前、髮髮者河野安之右衛門通古・木脇伊左衛門祐

純守者脫之、棺前轆、新納四郎久侶旧規作多顯家役、瑪、雖、然、是、今、夫、久、學、之、族、中、無、同、列、之、家、故、令、久、侶、是、非、為、久、侶、之、家、例、後轆者北郷權五郎久富是亦、先規

從罪事、以故久龍依願使二族久富代瑪、昇、之、、本田六右衛門親次

不及確髮者持二大刀、伊地知長左衛門季方持刀、伊地知

彦四郎季馮持二脇刀季方小納戶役・季馮、小納戶役並共種髮、猿渡新右衛門實賢

種髮種髮・寶蓋、是舉依ミナ舊式ミナ所關之者也、其餘貴族近

侍之輩屬從矣、代島津淡路守久柄・同氏加賀守忠雅所

以來吊使二人亦置諸吏之列、於是安棺于葬場、奠

湯者常珠寺獻山和尚、奠茶者永興寺義勇和尚各唱二法

語、導師福昌寺素禪和尚唱二下炬文、乃土葬矣、曹洞・

天台・眞言・時來・法華・淨土・山伏之諸宗各敬列而勤諷經、且薩隅日三州之士及自琉球國在番于薩府之者亦拜伏葬場、既而自同月二十五日至同二十九日、修中陰梵儀、吊祭若法式、忠洪之代參島津出雲久定勤燒香（初日後、三日也）、同二十六日懺法、二十七日之夜頓寫、忠洪之名代島津圖書久亮續其硯水、而盲僧道島檢校・荒川勾當陪法筵語平家也、中陰中一族家臣獻祭文、舉于左方、

○松平大膳大夫重就（長州萩城主）之代香使者番頭大和登者來薩府、故八月二十六日於福昌寺中陰之法筵、使者爲重就燒香、

○重年逝去而後、于江府芝大圓寺亦修中陰梵儀三日（自七月四日、至同四日）、七月十二日藏遺髮于大圓寺廟所也、然而每當五七日或七々日・百箇日等之忌辰也亦以營法事、

全御譜中

（米）「島津周防忠紀獻之」

維時寶曆五年龍次胤蒙大淵獻夏、吾

邦君圓德院殿故從四位下左近衛少將薩隅日三國主兼領

琉球國源公覺滿良義大居士、不圖嬰微疾起居不安、醫藥無驗、嗚呼時乎命乎、卒以六月十六日戌午（本マ、遊于東都芝邸矣、於是奉還靈柩於薩府、八月二十一日壬戌）依法儀而奉掩葬於福昌禪刹也、今臨中陰之日、族臣源（米）「忠紀」不堪哀戚之至、命食邑之梵侶、寅具潤毛石髮之奠、奉祭于以文尊靈位下、其詞曰、

嗚呼哀哉

尊貴豪富 英氣動乾

威雄所振 庶民盡扇

心融默識 觸處洞然

試祖師意 參如來禪

治國爲政 無黨無偏

賞如春雨 刑似秋天

妙中之妙 玄中之玄

遐夷貢獻 招士招賢

嗚呼哀哉

湯藥無益 何期百年

乘忍辱筏 艤般若舩

瞻望未逮 早謝幻緣

春者不拍 農夫轅田

夢夜之別

愁淚潑浚

非石非席

吾心轉顛

林猿失梢

池魚離淵

此生此後

誰亦哀憐

嗚呼哀哉

分身自在

顯實開權

知見解脫

左旋右旋

樂土樂土

這邊那邊

一招一掇

不涉言宣

一褒一貶

大用現前

香雲鬢鬢

圍繞覺筵

仙骨道骨

徹底串穿

敢致奠儀

伏希監卹

嗚呼哀哉

尚饗

〔島津出雲久定獻之〕

維寶曆五龍次乙亥夏、吾

邦君圓德院殿故中大夫羽林次將薩隅日三國主兼領琉球

國源公覺滿良義大居士、不圖罹沈痾、醫藥無驗矣、嗚

呼天平哉命乎哉、終以林鐘十有六日戊午逝于江都芝

邸、而貴櫬還本州、仲秋二十有一日壬戌奉殯葬福昌禪

刹、越族臣藤原〔宋〕久定不勝哀戚之至、今丁中陰之日、

倡食邑之梵侶、恭陳蠶簋之薄奠、敬奉祭尊靈前、昭

告以文其詞曰、

嗚呼哀哉 吾

賢邦君

邈矣〔祖〕

清和建基

系根自是

世著鼎彝

台下樹位

鎮國撫夷

兼領異域

敷與仁慈

君以明懿

繼此洪禧

武威龍起

雄風虎馳

寬度不猛

馨德自隨

至治之極

垂拱無爲

嗚呼哀哉

保祐未融

勲業將隨

玄首不華

梁木實痿

降年短折

永道此罹

生也死也

壽夭難私

非去可掩

知往難追

仰見蒼穹

俯膺相思

夜月露泣

稿林霜悲

憂心戚戚

日居月居

嗚呼哀哉

仙駕遷跡

香無路窺

金門深鎖

朱簾空垂

素幔徐風

瑟動凄其

食不得甘

席胡爲綵

望彼連岡

薄言慕之

水洒蘋繁

山採菌芝

祇滴丹悃

憑祭梵儀

冀神復光

昭吾誠葵

嗚呼哀哉

尚饗

(宋) 一島津圖書久亮獻之一

維時寶曆五年龍舍廡蒙大淵獻梅天之始、吾

邦君圓德院殿故從四位下左近衛少將薩隅日三國主兼領

琉球國源公覺滿良義大居士、不圖罹微疾病日漸、醫術

禱爾兩無驗、終以六月十六日戌午奄然逝于江都芝邸、

而尊櫬還薩府、八月二十一日壬戌隨梵儀奉殯葬福昌

禪刹、越臨中陰之日、世臣藤原「久亮」不勝哀慟之衷、

聊命食邑之苾芻、虔備山蔬巖茗之菲兼伊蒲之淨膳敬致

祭於

尊靈寶位下、告之以文、其辭曰、

嗚呼哀哉

至哉賢君

氣吞雲夢

令聞夙起

寬仁春融

黎民懷德

群臣盡忠

射御縱施

文兼質豐

勇不慕帛

威似臥籠

千里謀略

在掌握中

臨事無畏

希世英雄

君子宅仁

障百川東

嗚呼哀哉

愛吐握業

爲人知籠

一朝罹恙

日月繫重

御三世醫

速雙暨攻

著參没能

禱祀失功

見艸寂寂

吾心忡忡

命期百歲

逝水那忽

1691

恨嘗藥薄
招魂難裁
向何天訟
空自朦朧

嗚呼哀哉

造化縱變
疑道不公

未滿壯歲
胡爲告凶

朝槿花落
徒觀陳蹤

恍惚如在
風拂靈宮

一夕千古
奈物無庸

言猶難盡
情豈可窮

爰採蘋蘩
恭備微供

祭奠雖薄
鑑臣寸衷

嗚呼哀哉

尚饗

^(卷)
「島津主殿久馮獻之」

維寶曆五年龍集乙亥夏林鐘、吾

邦君圓德院殿故從四位下左近衛少將薩隅日三國主兼領

琉球國源公覺滿良義大居士、在

幕府下權沈痾病醫巫禱藥其術無驗、同月十有六日戊午

奄然易質於芝邸之寢室、訃音到時哭泣何窮、越秋八月

廿一日奉歸葬薩府之福昌禪寺矣、今臨中陰之日、世臣

藤原(卷)「久馮」不勝追慕悲嘆之情、命采邑之梵侶嚴備沼沚
蘋蘩之菲薄、以奉致祭於

尊靈前、其詞曰、

扶桑甲侯
奕葉稱賢

懿矣令德
皇教廣宣

萬揆厥叙
五典惟傳

政洽四達
威振八挺

及異域外
擅布其權

似滄溟內
使朝百川

嗚呼哀哉

遠期難克
盈數豈全

容華忽零
體澤自捐

霄駕肅々
翠蓋翩々

群臣慟後
邦族哀前

喪櫃既祖
泣涕流泉

靈輜永訣
舉聲聞天

嗚呼哀哉

在疾未省
延首悽焉

於亡增歎
撫胸慨然

恩顧素館
不追塵緣

視望清廟

如坐紅蓮

山澗微供

心香縷烟

恭設祭奠

願感格旃

嗚呼哀哉

尚饗

官合譜貴

勇兼義豐

鐘盞代氣

鼓淳古風

莅下有道

政化稍隆

爲民父母

恭何厥公

奈何澆運

星流管中

空華難繫

逝水何忽

俯慕黃壤

仰望蒼穹

秋雲愈暗

淚雨濛々

未悟漚幻

憂心忡々

遽失依怙

吾誰適從

嗚呼哀哉

維寶曆五年乙亥夏、吾
邦君圓德院殿故從四位下左近衛少將薩隅日三國主兼領
琉球國源公覺滿良義大居士、不圖罹沈痾、醫禱無驗、
嗚呼天乎命乎、卒以六月十六日戊午逝于東武芝邸矣、
年八月二十一日壬戌奉歸葬於本州之福昌精藍矣、
臣藤原（本）久茂（本）不任哀感之至、今臨中陰之日、倡食邑之
苾芻、謹以澗藻溪蘋而奉祭靈帷、厥詞曰、

嗚呼哀哉

修明遺業

光昭舊邦

終陟有位

黎民時雍

效天法地

敢不伐功

胸宇海濶

仁愛春融

惟精惟一

圖始慎終

不酣歌室

不恒舞宮

既翻否泰

愁腸如烘

籲天何及

踏地奚容

等觀宇宙

何質有庸

春樹素葉

秋林紅楓

代謝理顯

以呈心空

我儂血淚

傾何涔々

聊陳俎豆

恃表寸衷

靈其鑒格

享伊蒲供

〔一種子鳥藏人久芳獻之〕

維時寶曆五年乙亥夏、吾

邦君圓德院殿故從四位下左近衛少將薩摩日三國主兼領
琉球國源公覺滿良義大居士罹病、醫藥禱爾無驗、六月
十六日戊午終身實於江府之館邸、於此奉殯靈櫃於玉龍
精舍、以八月二十一日壬戌恭規前例浮屠之法、而以奉
闡維、茲臨中陰之日、家臣平久芳一不忍哀慟之至、命
采邑之梵侶、敬備蘋蘩之微供、以奉致祭於尊靈之幃下、
敢告以文、其辭曰、

嗚呼哀哉

尚饗

嗚呼哀哉

維嶽降靈

天產賢良

三州封侯

殊光列將

寬柔以教

實南方強

蘭孫惠子

松茂柏芳

仁政鴻基

千歲彌昌

嗚呼哀哉

今茲何歲

此告不祥

龍髯難攀

仰望彼蒼

黃鳥可贖

百身誰當

竊量壽算

地久天長

薤露忽殞

吾心欲狂

嗚呼哀哉

邊海沐寵

恨恩難償

甘棠餘愛

沒世不忘

招魂蓋返

空慕黃壤

恭陣俎豆

悒傾心腸

神其有明

垂鑑靈場

嗚呼哀哉

尚饗

〔島津淡路守久柄獻之〕

欽曰、稽 圓德院殿故從四位下少將薩隅日三國主兼領
琉球國源公覺滿良義大居士、淹罹疾病起居失安、禱藥
不驗、寶曆五年乙亥六月十六日即世於東武芝邸、八月
二十一日奉歸葬於本藩福昌寺矣、源久柄一雖世襲別封
本 公室餘裔承恩維渥、是以同月二十五日遣大安寺主
白七及十餘員僧、就寺謹具薄奠如以法施奉祭 尊靈、
以辭曰、

嗚呼哀哉

三國賢主

源家棟梁

慈愛內在

武威外彰

行仁政則

親於文王

運兵道則

過於子房

令群臣穩

使萬民康

可謂生德

四海勇將

嗚呼哀哉

維天維地

頻降不祥

異日罹病

寢殿臥牀

良醫拱手

巫儒不詳

茲歲何歲

二豎侵傷

大命既盡

赴馱都場

去何處往

雲水茫茫

嗚呼哀哉

訃唱東武

痛徹赤腸

杏隣千里

慟聞喪亡

恩澤深海

諱景焚香

空憑梵侶

恭伸昇章

雖膳其薄

備尊靈傍

神夫不昧

願垂明光

1695

〔^(宋)島津備中貴備獻之〕

惟時寶曆五稔乙亥夏、吾

邦君國德院殿故中大夫羽林次將薩隅日三國主兼領琉球

國源公覺滿良義大居士、不圖罹微疾、良醫妙劑巫師丹

悃兩無驗矣、嗚呼天乎命乎、竟以六月十六日戊午逝于

江都芝邸、今也奉歸殯、靈櫬於舊邦玉龍精舍、越八月

二十六日丁卯族臣藤原^(宋)「貴備」不堪痛哭悲嘆之情、命采

邑之梵侶恭備沼沚蘋蘩之薄奠、謹奉祭 尊靈前、其辭

曰、

嗚呼哀哉

尚饗

嗚呼哀哉

德以道樹

禮以仁清

惟君之懿

早歲飛聲

義窮幾冢

文蔽班揚

性癖剛絜

志度淵英

潤民恩澤

依稀花生

惠臣胸懷

彷彿月明

富榮如夢

而立未盈

容花晨凋

命葉昏零

訃音遙傳

尊昇傷情

嗚呼哀哉

抑祝壽算

永扇佳名

胡蝶夢中

鄉隔萬程

杜鵑枝上

月照三更

驚鳥別魂

生緣難停

灑花淚雨

胸天無晴

浮雲變態

輻輳幽冥

靈光不昧

脫軀現成

天高風清

凄然月晶

恭陳尊饋

敬伸丹誠

嗚呼哀哉

1696

(卷) 「島津大學久尚獻之」

維時寶曆五龍次乙亥夏、

邦君圓德院殿故從四位下左近衛少將薩隅日三國主兼領

琉球國、源公覺滿良義大居士係疾痾于東武芝邸、醫無

妙劑、禱無感應、嗚呼天平命乎、卒以六月十六日戊午

易實於邸之正室、

尊榻、踰月而歸本府、就于玉龍精舍闋維之禫儀畢矣、

越八月二十七日戊辰臣(卷)「久尚」不堪哀悼之至、龔備沼沚
蘋蘩之淨饌於 尊靈床下、其詞曰、

嗚呼哀哉

尊君續業

治國七年

倚伏立別

自繩其愆

五行偕下

七札皆穿

講武明略

論文談玄

近好接士

遠圖尊賢

俘囚絕獄

犁欲爲田

嗚呼哀哉

白揚葉墜

薤露不乾

丹砂竈破

黃金謾鮮

訃聞動地

哀至怨天

雙手埋玉

雙淚傾川

一朝成古

萬慮如烟

瀟々風色

遍滿陌阡

嗚呼哀哉

僅覺物故

強稱遊仙

桂花影暗

得誰爭妍

驂騑聲苦

無人執鞭

浮休有數

長生那全

云使梵侶

虔設法筵

以殯繫僕

供奉靈前

嗚呼哀哉

尚饗

1697

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、同氏薩摩守卒去付也

上意之趣奉書相達、從

大納言様、御詫之段奉書達之、難有由得其意外、依之

爲御禮被差越使者外、紙面之通各申談及 上聞外、恐、

謹言、

〔卷〕

「寶曆五年」

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

1698

全上

御札令披見外、同氏薩摩守卒去付也

上意之趣奉書相達、從

大納言様、御詫之趣奉書相達、難有由得其意外、依之

爲御禮被差越使者外、紙面之通及言上外、恐、謹言、

1699

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、同氏薩摩守卒去付也、以上使御香奠被

下置、從

大納言様、御意有之、難有由得其意外、依之爲御禮被

差越使者外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐、謹言、

〔卷〕

「寶曆五年」

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

1700

全上

御札令披見外、同氏薩摩守卒去付也、以上使御香奠被

下置、從

大納言様、御詫之趣、難有由得其意外、依之爲御禮被

差越使者外、紙面之趣及言上外、恐、謹言、

〔卷〕

「寶曆五年」

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

〔卷〕

「寶曆五年」

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

繼豊公御譜中

正文在文庫

七月十八日付にて御文下されり、御同氏薩摩守殿御死去
こ付て

公方様 大納言様より 上使岩はしにて

竹姫君様へ御悔仰進しられり御事御承知被成、御手前様

におゐて有難思しめしり由、御禮御申上被成り通よろし

く申あげまいらせり、かしく、

(朱) 「寶曆五年」

松しま

岩はし

うら尾

小枝

瀬山

まつ平

大すみの守様

御返事

人々御中

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

薩摩國一圓

本國薩摩

薩摩守嫡子

高六拾萬五千石餘

大隅國一圓

松平又三郎

外

日向國之内

亥十一

拾貳萬三千七百石

琉球國

生國薩摩

居城薩州鹿兒島

但

寸尺野九寸五部 横二寸八部料紙中奉書

上包小奉書披キ包上ニ明細書二枚と記

(朱)

「右御明細書二枚可被差出旨、大目附能勢因幡守様より前日御

(頓唐)

留守居方ニ申來、亥八月廿三日右之通相調、岩下佐次右衛門

二而被差出候事、

1703

全上

扣正文在家老座

白熊對之御鍵

右者此節 御家督被遊外付の者 白熊之御鍵爲御持可
(朱)一文ニ付而別紙を以 御意之趣問合申越度候 以上
被遊儀奉存外、此節

1704

圓德院様御道中ニ及貳對爲御持被遊外付、爰元ハ者御
鍵無御座外間、其許より被差越可被進哉、御翰之儀者
三對爰元御兵具所ニ有之外、 慈德院様 圓德院様
御家督之節者、白熊御鍵等吃と被進外と之儀、書留等
見當不申外、 御代々様爲御持被來外御道具ニ外得者、
此節及

隅州様より被進外旨被 仰進筋ニ及可有御座外哉、又
者 御家督被遊外付の者、爲御持被遊筋ニも可有之哉、
御先例等被相調へ、被相窺儀外者被申上、何分ニ及被
申越度候、此段申越外、以上、

「寶曆五年」

八月廿一日

（朱）

伊集院十藏

「九月十六日」

（朱）

島津主鈴

1705

重年公御譜中

先是

近衛左大臣内前公悼 重年即世、賜 賻銀三十兩於京師吾
錦第一也、是以今茲八月二十六日供之于福昌寺牌前、

1706

重蒙公御譜中

扣正文在家老座

1707

大守様ハ 刑部卿様御姫 保姫様を御縁與被遊外儀、可
(朱)一文之趣 大守様丑戌去ル三日之夜 隅州様居白之趣具 萩原との申達
宜との御事 從

菊姫様、主鈴殿・相馬に御直ニ承仕旨及有之、其後從
召上候、右事ニ付而者、初松嶋様より御内ニ而爲被仰入事候間、御城江

御守殿思召之程委萩原之御方を以承知仕、 御先代ニ御
萩原殿被上候節、松島様思召之趣得と申進候上なから、誠之御内ニ而

内ハ者申上置外、委ハ主鈴殿御存知之通之事ニ外、今度
当分よりハ御通用も被成間敷との趣得と申進候様ニ可致旨、姫君様より被

相馬其御地罷立外節者、從 菊姫様段々御意之趣及承知
仰付候、右次第候於

仕罷越外、到着早速同席中申談外處、何ぞ存寄申儀無之
御守殿も近年者以上御聞せ被成、其外江者一切御聞せ不被成、寄、も

乍憚御相應可被遊哉と申談、段々之次第得と 隅州様達
其沙汰不申通様ニ壓被仰付候、右通、姫君様御同意被居召上候付、其趣

御聽外處、御少高之儀ニ付の者、少々御構無之外、
菊姫様江度萩原殿より被遊、御願候得ハ、別而御大變被、思召上候、御事

此御方様ニ及近年段々御物入相重、御所帶御不續之御事
候ニ而も御年寄衆迄へ御聞せ被成候而、其外江者曾而御聞無之様ニと、姫君

ハ故、御手細方却ゝ先様御幸被 思召ハ、尤 太守様未

御年若ニ被成御座ハ故、御婚姻等之御時節者、何れ御廿

以上ニ御成不被成ハ得者不相調事ハ、此儀刑部卿様御方

ニ表大体御落着之上被仰答トハ被 思召上ハ得共、到其

節一年ニ表早ク御取組可有之杯ト有之ハ、

此御方様ニ表難被成事表ハ半間、得ト頭より御落着有之

様御縁組可被遊ト之御事迄者、從 御守殿被仰達 御守

殿 菊姫様御方ハ御内ニ御通用可有之儀ハ、其通ニ表可

有之ハ、太守様御方 隅州様御方杯ハ、御内クならも

御通用等ハ先今程無様ニ有御座度被 思召ハ、此儀 御

守殿同意被思召上ハ、、弥思召之通御縁組可被遊ト

此御方様ニ表御幸ニ被 思召上ハ段、拙者共より各迄申

越ハ様 御意ハ條、右之趣を以 御守殿ハ被申上、 菊

姫様ニ表 思召之通相濟ハ様、御序を以可被申上ハ、尤

隅州様思召之通、弥 思召寄無之ハ、、 御守殿御世

話ニ被遊、御内約之儀相濟ハ様ニ被 思召ハ、尤此儀

者 太守様未御存知無之事ハ間、被申上儀ハ、被達

御聽ハ様ニ可有御座事候、此段申越ハ、以上、

〔寶曆五年〕 九月六日 鎌田典膳〔宋〕

〔朱〕 十月廿三日 義岡相馬〔宋〕

〔宋〕 島津主殿〔宋〕

〔朱〕 島津主鈴殿

〔朱〕 伊集院十藏殿

全上

扣正文在家老座

此間の御挨拶かた／＼申上まいらせりまゝ何も宜御

申上被成ハ様ニ存まいらせり、なを御する／＼と

御整遊し、幾久しく萬々年も御長久御はんしやうの

御事ニて、御めて度ささのミと祝入まいらせり御事

ニ御さハ、何もよろしく御さた被成へくハ、なを／＼

そもしさまニも、何かと御世話共御申上被成ハ御事

ニて、御しゆひよく御する／＼との御事ニて、御め

てたさいか計／＼忝りまいらせり御事ニ御さハ、め

てたくかしく、

上々様方御機嫌能ならせれ御めてたくハ、

竹姫君様ニもます／＼御機嫌よく入らせれハ御事、御め

て度有難かりまいらせり、扱は此間仰られハ一ツ橋御姫

様御縁談の御事、いよく御取組あそはしりハんとの御事、何も一ツ橋へ申上りへハ

刑部卿様殊外ニ御悦遊し忝かられ、御満足遊しり、いた御内々の御事故、御禮御内々にて私方へ仰られり御事故、何も宜御禮の御事、私より申上り様ニ御たのミ遊しりまゝ、此よしよろしく御序ニ御申上被成りへくり、此御事早速申上りハん處、昨日も御日並故、御めて度こん日申上まいらせり、めてたくかしく、

(朱) 「寶曆五年」

荻原さま

人々申給へ

松しま

方

1709

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披閱り、就御同氏薩摩守殿卒去、奉書到來、從大納言様及御記之趣奉書到來之由、仍芳簡御念入儀存り、恐々謹言、

(朱)

「寶曆五年」

九月七日

尾張中納言

宗勝判

松平大隅守殿

御報

1710

全上

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲西尾隠岐守可述り也、

(朱) 「寶曆五年」

九月七日



松平大隅守殿

1711

全上

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之り、遂披露之處一段之御仕合り、恐々謹言、

(朱) 「寶曆五年」

九月七日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

1712

重豪公御譜中

正文在文庫

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重進上之り、遂披露之處、一段之仕合り、恐々謹言、

(朱) 「寶曆五年」

九月七日

秋元但馬守

涼朝判

松平又三郎殿

繼豊公御譜中

同年九月十一日、衛忠洪承^二台許^一襲^二家統^一也、繼豊間^レ之、則今日差^二使者四元宇左衛門兼丘番^新於東都、奉^レ謝^レ之、獻^二上三種一荷于

家重公、一種一荷于

家治公、干鯛一箱于

簾中一也、

重年公御譜中

扣正文在家老座

一紗綾 拾卷

一 同 五卷ツ、
(采)「本文違 貴聞置候、以上」

一同 三卷ツ、

村田五右衛門(經 彦)

大野鐵兵衛(清 純)

黒田次郎兵衛(清 安)

右老川々御手傳御普請御成就^二付、去十二日 御座之間^レ 御出座、十藏被 召出、今度御手傳御普請首尾克相濟、御褒美被 思召上、拜領物被仰付^レ段拙者より申聞、頂戴被仰付、引次堀右衛門より小左衛門迄一列被召出、同斷申聞、頂戴被 仰付^レ、

一 右相濟、御勝手之間^レ 御出座、彦九郎^方次郎兵衛迄一列被召出、同斷申聞、是又頂戴被仰付^レ、

一 同日右拜領物相濟^レ後、十藏殿^レ老御近習番所、堀右衛門より小左衛門迄^レ老御用人座、彦九郎より次郎兵衛迄^レ老於新座、吸物肴御酒被下^レ、

右之通此節御普請首尾好御成就^レ付、拜領物被仰付、御酒等被下^レ、先年上野御手傳之節^レ老、相勤^レ外面^レに御料理等被下、惣奉行より^レ及御膳進上、御能被備御覽、且御家中より御祝差上、御能興行、御立入町人共にも拜見被仰付^レ筋^二帳留相見得^レ得共、此度之儀老御時節柄^二も^レ外故、前條之通御酒等被下^レ、此段申越^レ外間隅州様可被達 御聽^レ外、以上、

伊集院(久 惠)十藏殿
堀(貞 起)右衛門
諏訪(兼 貞)甚兵衛
伊地知(季 周)新大夫
佐久間(盛 邦)源大夫
山澤(盛 福)小左衛門
川上(親 英)彦九郎
石川(長 澄)正右衛門
山元(秀 周)藤兵衛
愛甲源(季 平)左衛門

〔實曆五年〕^(朱) 十月十二日
九月十五日^(朱) 嶋津主鈴

嶋津主殿殿

義岡相馬殿

鎌田典膳殿

全上

扣正文在家老座

今月四日堀田相摸守様より被相達儀有之之間、御留守
〔朱〕本文達 貴門監候、以上
居一人可罷出旨御用人中より切紙到來、佐久間源太夫

罷出外處、川く御手傳御普請付、御用相勤外御家來拾
三人、明五日四時 御城に可被差出旨、別紙之通之御

書付御用人を以御渡被成外付、達 貴聞、同日相摸守
様は源太夫御使者より、右御書付之趣御承知被成外旨

御答被 仰達外、右十三人之内堀堀右衛門儀ハ病氣ニ
由 御城に罷上躰無之外付、脇く御手傳之御方御聞合

之上、別紙之通之御書付并御留守居名前之書付兩様相
認、同日相摸守様は源太夫致持參、御用人に取會致對

談外處、御名書之方可被差出旨承、御書付差出外處御
承知被成外段被仰聞外旨、源太夫申出外、

一 御時服 六

一 白銀 五拾枚 伊集院十藏

一 御時服 三ツ、

一 白銀 貳拾枚ツ、 堀 堀右衛門

諏訪甚兵衛

伊地知新太夫

佐久間源太夫

山澤小左衛門

川上彦九郎

石川正右衛門

山元藤兵衛

愛甲源左衛門

村田五右衛門

大野鐵兵衛

黒田次郎兵衛

(鉄助) 蘇之間に罷通、御坊主

組頭小坂長春に取會、名書之書付小左衛門より相渡、

堀右衛門儀者相煩登 城難叶、其段昨日堀田相摸守様

に御書付を以御届被成外處、御承知被成外旨被仰聞外

段相達外、左外御目付衆より右長春を以一列之内名

代より拜領物頂戴被仰付候由被仰聞、小左衛門名代相

勤り段申達、名元書付長春に差出外、左外に於檜之間、

御坊主組頭中出會に石積古相濟、相摸守様檜之間に御

出席、大御目付能勢(頼唐)因幡守様・松下肥(之助)前守様・神尾備(元)

前守様(憲)御詰、一同罷出外處、川に御普請御手傳御用相

勤り付、拜領物被仰付外由被仰渡退座、左外に十藏儀

又々罷出、御奏者青山(忠朝)因幡守様より御時服御渡頂戴、

時服持下、銀臺者御進物番衆被引取、引次堀右衛門名

代小左衛門・甚兵衛一所に罷出、因幡守様・松平周防

守様より御時服御渡頂戴、御時服銀臺に戴持下、夫よ

り兩人ツ、順々に罷出頂戴相濟、又々一同罷出御禮申

上外、其節因幡守様より御禮申上外由、御取合有之退

座、御引進之御目付牧野織部様・岡部久太郎(元貞)様二外、

一右之通拜領物被仰付外付、則日從

太守様御禮、御老中様方・若御年寄様迄赤松(則忠)甚右衛門

御使者に被仰達、御内證よりも御守殿に奉伺外上

公方様 大納言様 御簾中様に御文を以御禮被仰上

外、

一右に付、京都諸司代・大坂御城代・御三家様并御一門

様方其外にも爲御知可有之哉と、脇々御手傳之御方承

合外處、御家來に拜領物被仰付外付る者、御しらせ等

無之由り付、右御方々様は爲御知無之、尤右通り得

者、長崎・御隣國に御知らせにも不及筈外、此段者爲

御納得り、

一右付 隅州様御勤可有之哉と、御留守居・御使番・御

右筆にも爲致吟味外處、何ぞ付御家來に拜領物被仰付

外節、御勤にも不及事外間、此節も御勤に不及筈と致

吟味外、尤御内證御勤之儀者

御守殿に奉伺外處、御勤に不及旨御差圖有之外付、表

向御内證共御勤不及筈に御座外、

一御家來十三人、自分之御禮則日兩御丸御老中様・若御

年寄様に參上、御禮申上外、

御勤定奉行

御普請場御目付代

一色周防守様(政述)

大久保荒之助様(忠興)

新見又四郎様(正榮)

石野三次郎様(範三)

淺野左膳様(氏從)

高受御寄合御普請御係 高木新兵衛様

重豪公御譜中

扣正文在家老座

(朱)「御返答」

高木 内膳様

高木 玄蕃様

美濃御郡代右同斷

青木次郎九郎様
(安) 憑

右に同六日七日參上ニ由同斷御禮申上り、堀右衛門病氣付廻勤難致、三日共ニ名代小左衛門ニ由御禮申上相濟り、

右之通申越り條 隅州様被達 御聽、御女中様方に

被申上儀者可被申上り、先以御手傳首尾好御成就、

御家來に拜領物迄被仰付、恐悅奉存り、別紙御書付

寫二通・首尾書三通爲御見合差越申り、以上、

(朱)「寶曆五年」
十月十二日
九月十五日

(朱)「上」
伊集院十藏

嶋津主鈴

嶋津主殿殿

(朱)「下」
義岡相馬殿

鎌田典膳殿

今度 御家督付、御什物御讓狀御先例之通從 隅州様、

御家老御使者を以被進、亦者御發之御本尊御近習役御使者を以被進り段、被仰進ニ可有御座候、御本尊之儀者爰許に崇有之候、此段爲御存り、以上、

(朱)「寶曆五年」
九月十五日 (朱)「上」
十月十二日
島津主鈴

島津主殿殿

義岡相馬殿

(朱)「下」
鎌田典膳殿

全上

1720

扣正文在家老座

御家督御禮迄被爲濟候付の者、白熊對御鑓御持せ可被遊事り得共、未御登

(朱)「一」本文被申越致承知達 貴問候、以上」

城表不被遊御事候得者、先當分之通黒熊對御鑓御手道具

共御持せ被遊可然り、以後御登 城被遊り節より、白熊

對御持せ可被遊事り、御手道具之儀者 白つミ毛ニ由

思召次第可被遊御事り由

隅州様御意承知仕り、此段申越り間、被達 貴問御登

城被遊迄者、やはり只今之通、對黒熊御鑓、白猪之毛御

1721

1723

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間

1722

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間
可御心易外、隨ち干鯛一箱被獻之外、各申談逐披露外處
一段之御仕合外、恐々謹言、

〔寶曆五年〕

九月十八日

松平大隅守殿

本多伯耆守

正珍判

1724

重豪公御譜中

可御心易外、隨ち干鯛一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔寶曆五年〕

九月十八日

松平大隅守殿

秋元但馬守

涼朝判

同年九月二十二日、月直老中本多伯耆守正珍召忠洪之家臣、則江都留守居岩下佐次右衛門方峯詣其第一也、正珍傳台命曰、忠洪以幼弱使下京極兵部高主使青山七右衛門成親書院番頭朽木和泉守廣綱組書院番爲御目附遣薩府、監國家之事也、即日使留守居佐久間源太左衛門盛邦詣正珍之第一、拜台命、至其他老中若年寄各位之第一、亦使留守居謝之、而翼朝使支族島津淡路守久柄代餘詣正珍之第一、拜謝懇命之辱上、既在邸家老島津主鈴久郷伊集院十藏久東等相議告之薩府同僚、以達繼豐公之聞、乃修膳兩監國之旅館於府下客舎之内客舎一冊之内以三屏垣中門一互爲二、隔レ之爲二兩第、間立二通殿之所一、以告舎館既成於幕府、於茲明年夏四月五日、高主成親發江戶焉、高主之家老鞍知五郎右衛門、用人寺田左内馬場藤左衛門、給人崎山文太・中川官藏、近習崎山男也・大島歌藏・増村部、中小姓藤坂清次郎・

鈴木甚内、徒士小谷治兵衛・林多七・下村助八・窪田休右衛門、足輕小頭田代次郎兵衛、足輕六人・中間十三人家者用人等從僕亦在此内、乘馬一匹、成親之家老村瀬伊左衛門、用人小林忠次郎・村上左仲、給人奥墨吉太夫・杉本利助、近習深津元治・伊藤平次・速水源次、中小姓三枝羣次、神田伴助、徒四人、足輕七人・中間十三人家者用人等從僕亦在此内、乘馬一匹從駕也、吾留守居岩下方峯、使番佐久間新左衛門村央、目附堀孫太夫與央、其他諸有司等亦自江都同驛附、從兩監國、經東海・伊勢路之驛、同十六日至城州伏見、十七日駕舟從流而下至攝州大坂、豫自薩府使目附大脇彌五右衛門爲名假爲船奉行、警固兩監國所乘船、往大坂迎之、於是翼十八日已雖駕其船、適風雨海上不穩故繫船于大坂木津川口三日、而同二十二日出木津川口、五月九日至豐前州小倉、翼十日陟陸歷九州之驛、同十七日入薩西出水郷、止宿米之津、忠洪及繼豐公豫命大目附樺山左京久智往勞之、十八日過高尾野・野田、止宿阿久根、十九日過西方國高城郡、止宿大小路國水引郷、二十日過中郷・東郷・山崎、止宿宮之城、二十一日過中津川國大村郷、巡見山箇野金山國横川郷、止宿于此、二十二日過石原國邊郷・加治木、止宿脇本國帖佐郷、於是又命

家老高橋縫殿種壽往勞之、而翼二十三日入廳府、家老・若年寄・大目附・寺社奉行・勘定奉行・與頭・番頭等出迎之旅館、使諸有司接待之、

1725

全上

扣正文在右筆所

松平又三郎

若年・付國許爲御目附、京極兵部・青山七右衛門被遣外間、可被得其意外、

(奉)「右之通、亥九月廿二日御用番本多伯耆守様より被召呼、岩

下佐次右衛門罷出外處、右御書付御渡被成外事」

1726

全上

扣正文在右筆所

私儀若年・付、國許爲御目附、京極兵部・青山七右衛門被(奉)「飛札差懸候様可被致候」

仰付外付、同氏大隅守於國許承知仕外上、御禮之儀如何相勤可申外哉、被成御差圖可被下候、以上、

(奉)「寶曆五年」九月廿三日 松平又三郎

(奉)「右之通亥九月廿三日御用番本多伯耆守様より御留守居被召呼、御附紙を以被仰渡候」

全上

扣正文在家老座

昨廿二日御用番本多伯耆守様方御家來被召呼外付、御留守居岩下佐次右衛門罷出外處、太守様御若年付、御國許に爲御目附、京極兵部様・青山七右衛門様被遣外旨、御取次を以被、仰渡、別紙御書附被成御渡外付、達、貴間、御留守居佐久間源太夫を以伯耆守様に御請被、仰上置、御非番之御老中様、若御年寄様は若御留守居御使者を以御禮被仰達、伯耆守様は御禮御勤之儀考、松平加賀守様・松平勝五郎様御方承合外上、昨日考遲方に被、仰渡、及夜分外故、今朝五時御名代島津淡路守殿に御禮被仰達外、其外之御方に考御禮被仰達、及不申外、

一右付 太守様御内證御勤之儀 御守殿に奉窺、今日

公方様 大納言様に御銘、御文を以御禮被 仰上、

御簾中様に御禮考

大納言様御方御文之内被相込被仰上外、

隅州様御承知之上、表向御勤之儀御用番様に御窺書今日被差出外間、御差圖之趣追可申上外、御内證御勤之儀考、御守殿に奉伺、是又可申上外、

一右通被仰渡外付考、御守殿・櫻田に及申上、其外御

一門様方兼右躰爲御知有之御方に考、御使者通達を

以爲御知有之外、京・大坂、御隣國、長崎御奉行に爲

御知等之儀考、相しらへ追可申越外、

一兵部様考御使番御役、七右衛門様儀ハ朽木和泉守様

組に外、右御兩人様御國元御越之御時節并道中勤又

考於御國元御會釋等、御並様方承合外儀、且又御兩所

様に御留守居致參上得御差圖外儀考、以御使者今日被

仰入外、委細之儀追可申越外、

右之通被、仰渡、今日御使被差立外付、先比迄申越

外間合等相濟次第兩三日中極々急飛脚差立、委曲申

越筈外、此段申越外條、隅州様被達、御聽、御女中

様方に被申上儀考可被申上外、別紙御書附寫差越申

候、以上、

〔寶曆五年〕 九月廿三日 伊集院十藏

〔十月廿八日〕 上 島津主鈴

〔朱〕 島津主殿殿

〔朱〕 義岡相馬殿

〔朱〕 鎌田典膳殿

重豪公御譜中

扣正文在家老座

圓徳院様御病中より今度 御家督付、堀田相摸守様は御内意等其外松平隠岐守様・水野肥前守様被成御世話付、右御三人様に

隅州様より御挨拶之儀申越越り處、其後達 御聽、於爰元御挨拶御相應首尾可仕旨 御意之段八月十二日朱書御返答致承知、先月廿二日肥前守様に御挨拶、相摸守様に老肥前守様より御挨拶被仰傳被進り様、被仰越り趣を以御相應主鈴御使者相勤り處、同廿六日肥前守様此御方に右爲御答御出、御挨拶之趣被入御念儀被思召り、宜申上り様承知仕り、相摸守様に老廿五日御出、御挨拶之趣被仰入り處、被仰進り段委細被成御承知、被入御念り、宜御傳り様被仰り旨被仰聞り、且又隠岐守様に老肥前守様御方同日主鈴御使者相勤、御挨拶御相應申上り處、翌廿三日御家老御使者を以被仰進、御挨拶之趣被入御念儀思召り、宜申上旨御答被仰進候、

右之通御挨拶相濟、御答被仰進り付、此段申越り條可被達 御聽り、以上、

〔卷〕

一寶曆五年 十月四日

伊集院十藏

島津主幹

島津主殿殿

義岡相馬殿

鎌田典膳殿

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、然老同氏薩摩守願之通遺領又三郎被 仰付候、又三郎事幼少付、領分并琉球國仕置等之儀、其方心を付取計り様可仕旨 上意之趣相達、難有由得其意り、依之爲御禮被差越使者り、紙面之趣各申談及 上聞り、恐々謹言、

〔卷〕

一寶曆五年

十月七日

松平右近將監

武元判

松平大隅守殿

全上

御札令披見り、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、然老同氏薩摩守願之通遺領又三郎被 仰付り、又三郎事幼

1733 1732

少付、領分并琉球國仕置等之儀、其方心を附取計り様可仕旨 上意之趣相達、難有由得其意り、依之爲御禮被差越使者り、紙面之趣及言上り、恐々謹言、

〔寶曆五年〕 十月七日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

〔朱〕 〔又三郎忠洪公十一歳ニ而御家督故御幼少云ミトアリ、後重豪公ト改メラル〕

重豪公御譜中

御家督ニ付、御什物御讓狀

〔朱〕 〔本文被申越承知仕、主節より御直達 貴聞候處、以後御下國之節御讓物

圓徳院様御相續之節也

可被遊御覽旨 御意候、別紙御記録奉行書付、此方互留置候、以上〕

隅州様乍御隠居被進置り得共、今度御家督被仰出り付り共、御領内萬端都る御支配之儀り故、御什物おのつから

御所持之筈り、其上此節也 隅州様又御隠居之儀ニ付間、

御先例を被置、御讓狀被進及間敷り、右通り得共 御本

尊表直御崇敬可被成置儀ニ付、右之趣各間より 御直ニ

申上置り様可仕旨被 仰出り條可被申上り、以後

御下國之節、御讓物也 御覽被遊ニる可有御座り、此段

申越り、以上、

但別紙御記録奉行書付共爲御納得差越り、

寶曆五年

十月十二日 〔朱〕 〔上〕 義岡相馬守 〔下〕 〔下〕

島津主鈴殿

伊集院十藏殿

重豪公御譜中

扣正文在家老座

每朔之御條書年中二三ヶ月ニ一度ツ、御弘メ可被仰付旨

慈徳院様御家督之節

〔朱〕 〔御返答 本文致承知、達 貴聞候、此段及御返答候、以上〕

淨國院様被 仰出置、其通ニる

圓徳院様御相續之節表右之通ニ付故、今度 御家督ニ付

り共 御先代之通可被仰付儀と申談、月次御禮罷出り面

々、來月朔日方拜聞可申渡り、組中之諸士拜聞之儀及先

例之通可被申渡旨、與頭口申渡 御條書渡置り、此段申

越り條可被達 貴聞り、以上、

〔朱〕 〔寶曆五年〕 十月十二日 〔朱〕 〔上〕 義岡相馬

島津主鈴殿

伊集院十藏殿

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能成御座、恐悦旨尤、將
 又同氏薩摩守家督又三郎に被 仰付、難有由得其意、
 依之爲御禮以使者目錄之通被獻之、各申談遂披露、
 一段之御仕合、恐、謹言、

〔卷〕
「寶曆五年」

十月十九日

松平右近將監
武元判

松平大隅守殿

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能成御座、恐悦旨尤、將
 又同氏薩摩守家督又三郎に被 仰付、難有由得其意、
 依之爲御禮以使者目錄之通被獻之、遂披露、
 一段之御仕合、恐、謹言、

〔卷〕
「寶曆五年」

十月廿一日

秋元但馬守
涼朝判

(宛所ナシ)

重豪公御譜中

扣正文在家老座

太守様御若年ニ付、御國元ニ御目附衆兩人被遣、一段被仰
 渡、九月廿三日、同廿五日御使又飛脚便被申越趣
 隅州様達 御聽、御勤御書等者今月末式日御使便、昨廿
 一日御目附ニ被差越替、右付被 思召上、
 太守様御若年故、乍御隠居

隅州様諸事被附御心、御領分并琉球國仕置等御取計、様
 上意之趣御奉書御給、乍御病身萬端御出精御仕置方御差
 圖被成儀、右通御奉書御給之段、御役人様方御隣
 國爲御知有之、御領國中皆共致安心、琉球ニ表右之旨
 被仰渡、脇、御若年之御方に、御目付衆可被遣、得
 共、御家督御若年ニ表此御方之様御隠居之御方、御國
 許に被成御座、御仕置方之儀ニ付、右之通御奉書を以被
 仰渡、御方者、餘例有之間敷事、御目付被遣、
 最前 隅州様に諸事被附御心、様被仰渡、詮、無之事
 外、就中琉球之儀者御官位薄、疎存儀、可有哉之旨、
 琉人立之節御内意等被仰上置譯、有之、御領分なからも
 前より段々被仰出置、趣、有之事、右之通御奉書を
 以被仰渡、御目附衆被差越候、者

隅州様御仕置方不相屈筋共ニ琉球より考違、御威光薄可奉存儀及難被計、御氣之毒ニ被思召上リ、依之堀田相摸守様ニ者御由緒及有之、兼而御内用及御頼被置付、右思召之旨趣者、不相殘様得と御内談被仰入度、

公邊ニ及右之次第者被仰上度儀得共、事長付付、先別紙御案文之通於相成儀者、以御書御斷被仰上度、何分ニ及相摸守様思召を以御文言等御取直シ被進度、左リ右御書其元御印紙調ニ被差出、時節者、右ニ申越、御受之御書被差出、已後可然哉、又者御一所ニ被差出可然哉、此儀及相摸守様思召次第致首尾、追其趣可申上旨被仰出、最早右之通被仰渡、上、御内談迎及如何成由御留守居杯申儀及可有之得共、隅州様御内存之趣ニ得者、いつれニも相摸守様ニ御内分被仰入度、御留守居ニ御内談御都合も不宜ハ、各間ニ御内談可被仰達旨被仰出候條、何分ニ及被申談相摸守様思召之譯首尾可被申上、御勤之御書者式日御使便ニ被差越、得共、右御使到着無之内、此一件前以御内談有之答付、今日急飛脚貳人申付、此段申越、以上、

(朱)

「實曆五年」

(朱)

鎌田典膳

義岡相馬

1739

(朱)

島津主 鈴殿

伊集院十藏殿

島津圖書

(朱) 「御返答

本文被申越 御意之趣一々承知仕、相摸守様ニ御内意等申上、儀、意味有之儀者水野肥前守様ニ被仰談事、此節 隅州様思召之旨趣者、爲重立儀ニ故、肥前守様ニ可申上儀と申談、達 貴聞、昨十六日肥前守様ニ主鈴致參上、御意之趣不相殘様申上、被仰聞、御幼年之御方、御國ニ御目附被遣、儀者御大法ニ在、御斷被仰出、儀難被成答、脇方ニ及御隱居之御方御國元ニ被成御座、御方は不被遣事ニ及得者、御斷之被仰出様及可有之哉、左様之御先例及無之儀、猶亦御國許御仕置方爲見聞被遣、又者何様之御用筋ニ被遣、其段者何方ニ及不相知儀、御斷被仰出、儀決、不宜答、且又御上方被仰渡、右式より輕キ儀ニ及御取返者無之儀、由承知仕、然共 隅州様思召之儀、相摸守様ニ御内談之被成様有御座間敷哉之旨申

上ハ處、此儀者爲差知事ハ、相摸守様ニ御内談込及難
被仰達儀ニハ間、此旨申上ハ様承知仕ハ、此段申越ハ
條、右之趣を以可被達 御聽ハ、右通ハ間、先達ハ申
越置ハ諸御手當之儀者、無間違様被申談ニハ可有之ハ、
御旅宿等之儀及相究趣、早々可被申越ハ、

右爲可申越、急飛脚貳人申付今日差立遣ハ、別紙御
案文差越ハ、以上、

十一月十七日」(本文書ハ一七三八号文書ノ行間朱書ナリ)

相添ハ御案文

一筆致啓上候、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悅奉存ハ、然
者同氏又三郎儀若年付、國元ハ爲御目附京極兵部・青山
七右衛門被遣ハ旨承知仕ハ、先達ハ又三郎幼少付ハ、領
國并琉球國仕置等私心を附取計可申旨 上意之趣御奉書
被成下早速申渡、領國中之者共安心仕ハ、私儀病身ニハ
參府仕ハ儀者難叶ハ得共、未老體ニハ及無之、爰元ハ罷
在、上意之趣を以一涯相勤、仕置等堅固申付儀御座ハ、
爲御目附被遣ハ儀、到私難有次第奉存ハ得共、遠國之儀
御面勤奉存ハ間、成合於申儀者御斷申上度奉存候、右之

趣を以何分表宜御取成所仰ハ、恐惶、

十月

御老中

御連名

重豪公御譜中

同年冬十月二十二日繼豐公遣ニ使於江府、賜ニ太刀一腰・
馬代黃金一枚見賀ニ余之襲封、宗室之懿親伯叔亦各有ニ
贈物一矣、至 若 大臣以下諸士進獻有レ差島津周防忠紀・島津
備中貴備各進上御太
刀・金馬代、一種一荷、島津出雲久定・島津大學久尚・島津図書久亮・島津筑後久
茂各進上御太刀、銀馬代、干鯛一折、家老、若年寄、大目附、一所持及寄合、寄合
並相與進上繩十卷、三種二荷、用人、
以下諸士相中、紗綾二十卷、三種二荷

全御譜中

扣正文在家老座

(采)御返答

御先代御家督之節、每朔御條書、御留守中諸御役人ハ讀
聞セハ様御副書を以爲被仰出事ニハ、此節之儀者、御袖
判表被仰出間鋪旨 隅州様 御意之趣朱書御返答承知仕
候、左ハ得者、每朔御條書御與書之儀表被 仰出及間敷
哉、何分ニ表被申談、 隅州様ハ被相伺儀者被申上ニハ
可有御座ハ、其趣を以達 貴聞ハ様可致ハ、此段申越ハ、

御先代被 仰出置候間 御当ハニ茂其通相守候様ニ
より之御条書右之通 御先代被 仰出置候間 御當ハニ茂其通相守候様ニ
判表被仰出間鋪旨 隅州様 御意之趣朱書御返答承知仕
候、左ハ得者、每朔御條書御與書之儀表被 仰出及間敷
哉、何分ニ表被申談、 隅州様ハ被相伺儀者被申上ニハ
可有御座ハ、其趣を以達 貴聞ハ様可致ハ、此段申越ハ、

以上、

〔寶曆五年〕

十月廿三日

〔宋〕

伊集院十藏

〔十一月廿五日〕

〔宋〕

島津主鈴

鳴津圖書殿

島津主殿殿

義岡相馬殿

鎌田典膳殿

1744

全上

扣正文在文庫

琉球國より大清國に年々相渡り進貢料・接貢料之儀、文字銀を以慶長銀之位ニ、銀座ニ為吹直相渡度旨被相願外付、寛保年中右之通申渡り、右慶長銀之儀、來子六月より通用相止、潰銀相成り筈外間、此節者勿論向後弥銀座ニ為吹直相渡り様可被取計り、

〔寶曆五年〕 亥十月

〔宋〕

「堀田相摸守様御用人中より切紙到來、十月廿三日岩下佐次右

衛門被差出外處、右御書付御用人坂元六郎兵衛を以被成御渡

外」

1745

継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又八月十五日同氏又三郎家督之御禮、名代嶋津淡路守を以申上外處

御目見有之、難有由得其意外、依之爲御禮被差越使者外、紙面之趣各申談及 上聞候、恐々謹言、

〔寶曆五年〕

十月廿五日

松平右近將監 武元判

松平大隅守殿

1746

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又八月十五日同氏又三郎家督之御禮、名代嶋津淡路守を以申上外處、

御目見被仰付、難有由得其意外、依之爲御禮被差越使者外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

〔宋〕

「寶曆五年」

十月廿五日

秋元但馬守

涼朝判

絳豊公御譜中

正文在文庫

なをく御表より御禮御申上被成りへ共、猶御申上

被成り通宜申上まいらせり、めてたくかしく、

九月十三日付にて御文下されり、

公方様 大納言様 御簾中様ますく御機嫌よくならせ

られり御事、御めて度思しめしり由、扱は先月十五日御

同氏又三郎殿御家督の御禮、御名代嶋津淡路守を以て御

申上被成り處、御目見仰付られり段申参り、御手前様に

おるて有かたく思召りよし、右の御禮

大納言様 御簾中様へ御申上被成り御文之通、よろしく

申上まいらせり、めてたくかしく、

〔朱〕
〔寶曆五年〕

松平大隅守殿

重豪公御譜中

扣正文在家老座

〔朱〕御返書
太守様 御家督

本文致承知達 貴聞置候、以上

隅州様 お嘉久様に御祝之御料理可被進旨被仰出り段

被申越り付、御近習役御使者を以右之段被、仰進、去

ル廿五日御料理可被召上旨被 仰出、御手當申渡、當

日 御下屋鋪御奥新御書院に

隅州様御出座 お嘉久様御同座に、二汁五菜之御料

理、備中殿・周防殿御相伴被 仰付り處、周防殿差支

儀有之御斷故、備中殿・お巖殿御相伴に御機嫌能被

召上、玄蕃殿・圖書殿・本殿・石見殿・お徳殿・お民

殿・お鐘殿・お鐵殿・おけさ殿にも被相詰、御料理被

下、お賑々敷御取はやし御満悦被思召上り、御禮宜申

上旨被仰出り、お嘉久様よりも御禮被仰上候、拙者共

にも相詰御膳下被成下、難有奉存り、御本丸御下屋敷

御側御用人、御近習役、御納戸奉行其外 御下屋敷御

側廻・納戸廻り・奥女中にも一汁三菜之御料理被成下

り、御詰之御方々御禮被申上、拙者并其外御料理被

下り面々いつれ表御禮申上り、

一 おとめ殿に表、何ぞ御祝可被進儀と申談、右同日御樽

松しま

岩はし

うら尾

さえた

せやま

まつ平 御返事
大隅守様 人々御中

肴・御籠飯一組、御近習役御使者を以被進外、御禮之儀宜申上旨承知仕候、

右申越外間、可被達 貴聞候、以上、

〔寶曆五年〕^(朱)

十月廿八日

〔上〕^(朱) 義岡相馬

〔十一月廿四日〕^(朱)

島津主鈴殿^(朱)

伊集院十藏殿^(下)

繼 豐 公

寶曆五年十一月

重 豪 公

至同六年四月

追 舊 記 雜 錄 卷百十一

1750 重豪公御譜中

自先代由^一舊章、書^二數條之法令^一是日每朔祭^二家永三年、令^三家
四月朔日始建此式目
老大臣及諸有司等聽^中其條目上、余襲封之後今茲十一月朔
日、仍^三先蹤^一肇成此式、厥條書^{是書或損之益}之^{是時宜之}見^三于左、

1751 正文在右筆所

掟

一 公義之御政務堅固相守之、段々被 仰出御條目之趣、
謹^可奉得其意事、

一 幾里志丹宗門之儀御太禁之條、領内稠敷所令制禁也、

弥以相守此旨、自然隱居者於有之者、見立聞立可申出之、

公義御褒美之上自分之褒美急度可申付之事、

附 一向宗之儀子細有之、當家代々令禁止之早、若違

犯之族有之者、不依貴賤宗門改人其外支配頭^ニ可

申出之事、

一 當家累代第一相守

公義之御政法并參勤交替無懈怠相勤之、且復國家之仕置無緩疎就申付之、首尾好所令連續也、國中之者共存此旨、勵忠義奉公方無吳儀可相勤之、

附 親子兄弟之睦、朋友之交正禮法、不可紊風俗、就

中若者共學問・武藝俄に修練難成事^ハ間、別^ハ心

掛可相嗜之、其身勤正敷行跡能者^者、奉公之品能

可召仕之、連々我儘に生立、士に不似合月代・衣

類等異様之爲躰にて、大勢列立或路次門頭寄屯、

非法之狼藉等を働、仕置之妨に成儀甚以不可然、

稠敷令制禁之事、

一 武具・馬具等分限相應に可調之、見分迄を存或吳様或

結構成道具調間敷^ハ、匱相^ニ有之^ハ共、不事欠儀を專

相考可致所持、左様成無心掛、領過分之知行、忘數代

之恩顧、耽身之安樂、或妻子以下之衣類を飾、或愛酒宴遊興、内證之脱之駢に身上令衰微之輩者不勘之至也、尤雖爲小身應分限可致其心得、何之子細者不相知進退令逼迫、奉公難勤者者可及僉儀之間、常々可用儉約、次にハ一身之以才覺、領地をも雖致所持、何之勤者不致、恣に誇利欲、專自己之輩者、爲國家之費之條能々可守仕置之趣儀可爲肝要事、

附 諸事奉公方申付刻、或輕儀を申立致佗言、或構虛病於令難澁者、可爲曲事事、

一家老中より申付儀致違背間敷、其外奉行・頭人申付、趣、支配中之者無吳儀可相動之、惣て下役之者者、其分相立、様相心得、禮儀正敷、頭人よりも對下役不致無禮、丁寧に相交、役所之風俗無作法無之様互に可相嗜事、

一 不依何色黨をむすひ類を引、或最負或致連判、其所之妨に可成程之事を相企儀一切令禁止早、若違犯之族於有之者、可行殿科、口事沙汰之儀於與中可相濟之、自然與中之扱於不致承引者可遂披露、決斷之上非儀相究、
外ハ、可爲重罪事、

一 喧嘩口論堅所令停止也、萬一不意之儀ニ及諍論、外共

隨分致堪忍、短慮（働脱カ）之無之様致覺悟、道理於有之者可遂披露、理不盡に事をやふるにおひてハ、沙汰之上加成敗可没収所帶、勿論雙方荷擔之人者、不論理非可爲本人同罪事、

一 隱居願之儀或病者或老體之外申出間敷事、
一 亂氣之者於有之者、親類共入念可申付之、令油斷惡事を仕出、親類中可爲越度事、

一 不限地頭所并領地一所之地、法外之仕置非分之課役等於申付者可及沙汰、且又農民之仕置題目之事、飢寒之くるし、なき様ニ救之、耕作之時節を不違、年貢取納等之儀、無油斷様其支配人出精可申付事、

一 諸所堺目之儀、常々申付置之條別而入念、萬一隣國騒動之儀於有之者、實否共に早速鹿兒島に可令言上之、

附 堺目他方に入交、他領人と縁與又者別、致

入魂儀、堅令禁止之事、

右條々堅固可相守之、此外加判形申渡置、條目之趣、致忘却間敷、就中留守中之儀、不依大身小身領國靜謐之儀專可心懸、若違犯之族有之者可及沙汰者也、
仍如件、

右之通從

御先代被 仰出置り、至當代弥不致忘却堅固可相守
之者也、

寶曆五年十一月朔日

1752 重年公御譜中

扣正文在右筆所

琉球中山王代替付り、來々丑年從大清國封王使渡來之由

中山王申越り、此段申上候、以上、

〔寶曆五年〕 十一月朔日 御名

右御届書御用番本多伯耆守様(正勢)、御留守居山澤小左衛門(盛福)ニ而

御日付之當日被差出外處、御届書之趣御承知被成外段、御用

人小川忠太夫ニ而被仰聞外事、

1753 繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將

又爲重陽之御祝儀、時服并御肴拜領之、難有由得其意外、

紙面之趣各申談及 上聞り、恐々謹言、

〔寶曆五年〕 十一月十二日 酒井左衛門尉 忠寄判

松平大隅守殿

1754 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將

又從

公方様爲重陽之御祝儀、時服并御肴拜領之、難有由得其
意外、紙面之趣及言上り、恐々謹言、

〔寶曆五年〕 十一月十二日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1755 重豪公御譜中

扣正文在右筆所

先達之御届申上り通、來々丑年琉球江封王使渡來之筈外、

從前代封王使之節者、琉球王進物之内刀・鑓・長刀・具

足を學外之贈申儀御座外、尤右之品用方ニ者不能成、見

分計道具之形相拵申外、中山王一世一度爲差立舊式之進

物ニ之御座外間、別紙先例之通申付度候、此段相同申候、

以上、

〔寶曆五年〕 十一月廿一日 松平又三郎

〔右御書付ニ例書被相添、亥十一月廿一日御用番本多伯耆守様
 正御留守居山澤小左衛門ニ而被差出外處、被成御受取外、追而
 御挨拶可被成旨御用人小川忠太夫を以被仰聞外事、御用番本
 多伯耆守様を御達被成儀有之外間、御留守居罷出外様申來、
 佐久間源太夫罷出外處、本文御願書ニ御付紙を以被仰渡外、
 御用人小川忠太夫を亥十二月三日被相渡外〕

琉球に封王使渡來ニ付、中山王贈物之内武具を學外
 亦相用外先例之覺

一 刀四拾腰 但鋼鐵なし

一 鑓拾本 但右同

一 長刀拾振 但右同

右封王使に於琉球遣申外、

一 具足一領 但皮きたいなし惣亦用方不具ニ相調申外

一 刀貳拾四腰 但鋼鐵なし

一 鑓拾本 但右同

一 長刀拾振 但右同

右封王使歸帆以後、琉球より謝恩使を以大清皇帝に獻
 申候、

一 右何れ表武具を表外迄ニ有、於日本禮式太刀を用申外
 同前何そ用方ニ者不罷成外、然共唐人共ニ者武具を受

用仕外と存來、專舊記を以致沙汰由御座外、

一 吳國に武具を差渡外儀者、御禁止之旨堅固相守、武具
 ニ似寄外物ニ有及一切差渡不申事御座外、然共封王使
 之節計者以前より蒙御免、天和三亥年封王使之節及前
 代之通引續右之品用來外、

一 於琉球右之品相調外儀者、一切不罷成外付有、封王使
 之節者、前より於薩州屹檢使申付相調させ、餘計之
 員數曾有差渡不申事御座外、

一 封王使者翰林學士ニ武官を相添、惣人數五六百人又者
 七八百人程ニ有御座外、尤冠并官服其外品、贈物有之、
 屹規式執行中山先王之廟所に及敕使相越、祭等旁慙慙
 之仕形ニ有御座候、

一 右贈物之品々武具と者難申候得共、唐人共ニ對外有者
 武具之唱表有之、自餘之品ニ者相替外故、先例之通被
 仰付被下度奉願外、琉球王一世一度適用意之上申請外、
 封王使ニ付有者、爲差立官物之定法相欠外儀者、絶有
 不罷成由琉球人申外、

右之通享保二酉年、故松平薩摩守在國之節相同外處、
 伺之通被仰渡外、以上、

十一月

継豊公御譜中

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、然

者同氏又三郎儀若年付、爲國目付京極兵部・青山七右衛

門可被差遣旨申渡り段被承之、難有由得其意、紙面之

趣各一覽之時候、恐々謹言、

(朱) 〔寶曆五年〕

十一月廿五日

酒井左衛門尉 忠寄判

松平大隅守殿

一全上

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、然

者同氏又三郎儀若年付、爲國目付京極兵部・青山七右衛

門可被差遣旨申渡り段被承之、難有由得其意、紙面之

趣令承知、恐々謹言、

(朱) 〔寶曆五年〕

十一月廿五日

秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

(朱) 〔又三郎君十二歳ニ而御家督、後重豪公ト改メラル〕

継豊公御譜中

正文在文庫

なをく御表よりも御申上被成りとの御事、何もよ

ろしく申上まいらせ、めてたくかしく、

十月廿一日付にて御ふみ下され、

公方様 大納言様 御簾中様ますく御機嫌よくならせ

られ、御めて度思しめし、由、扱は御同氏又三郎殿事

御若年ニ付、御國許へ御目附として今般京極兵部・青山

七右衛門遣され旨仰渡され、御手前様にも有かたく思

しめし、由、右の御禮

大納言様 御簾中様へ御申あげ被成りとをり、よろしく

申あげへく、めてたくかしく、

(朱) 〔寶曆五年〕

お

松しま

岩はし

うら尾

さえた

瀬やま

松たいら 御返事

大隅守様 人々御中

重豪公御譜中

扣正文在家老座

(朱) 〔御返答〕

京極兵部様・青山七右衛門様爲御目附被差越外付、段
本文被申越越致承知達 貴間候、御旅宿等出来方之儀ニ付而書
 く被申越趣有之

御面所様より段々被仰聞趣有之、別紙を以申越通候

隅州様達 貴間外處、御目附衆御越付の者思召有之、

先達の飛脚を以申越通外、御願之通可相濟哉、何分ニ

及相究外者早く可被申越外得共、先御用係等者被仰付

方可宜と申談、御用係御用人相良彌長一兵衛・宮之原宇通

右衛門通其外諸御役人之内御用係被仰付、去ル寅年巡見

上使之例を以會所被相立、しらへ方被仰付置外、右御

兩所様御旅宿之儀者、御春屋内作添塀構等相調、貳ヶ

所相見得外様取繕外方、又者加治木屋敷・禰寝孫左衛

門屋鋪被明渡筋ニ及可有之哉、當時之儀外故費無之様

吟味申渡外處、御春屋内御旅宿ニ被成方宜外付、先其

通被仰付答外、差圖者今日便ニ者不相調外付、重る可

差越外、御目附衆御越否之譯何分ニ及申來外節、作事

等者取付被仰付答外、然者來正月末二月初頃ニ者其元

御出立之積之由、先月廿三日便ニ被申越外得共、御普

請其外之御手當其内可相調哉、只今よりハ難計外條先

達る被申越外通、御旅宿成就之程合前以此方より可申

越外間、其節御案内被申上御出立有之様前廣被申上

度候、

一 去ル寅年 上使之節者、金山御見分之儀、於其元 上

（朱）本文山ヶ野金山之儀者、此節儀御巡見可被成哉、錫山之儀者先年御代替

使之御方ハ御留守居名前ニのケ條書を以相伺、其内ニ

御巡見 上使之節儀御巡見無之候、此節者何様可被成哉と相伺置候得共、

芹ヶ野金山之儀者、享保二年中休之御申上、當分堀

子及不能居趣、且又谷山下福元村之内、加納丸錫山邊

路ニの通路狹御座外由申上外處、山ヶ野金山迄御見分

可被成外、外之兩所者御見分ニ不及と附紙を以被仰渡、

山ヶ野迄御見分有之外、此節之儀及先年之通於其元被

相伺筋ニも可有之哉、山ヶ野之儀者、先年之通手當可

申渡置外、芹ヶ野者當分名ノミ計外故、御通路之節御

挨拶一通り申上外ハ、可相濟儀ニ者外得共、猶又被

申談被相伺儀外者、被申出相究趣何分ニ及可被申越候、

一 先達の被申越外通、大坂より赤間ヶ關迄之船中里數湊

（朱）本文大坂より小倉迄之船中里數付、并小倉より鹿兒島迄之里數付致清書、

く、小倉より鹿兒嶋迄里數宿、又者西日船中里數湊

く、御領内里數相記、別紙差越外間清書被申付、御兩

所様ハ可被差出外、左外者何方筋御越之段可相知事外

條、無滞可被申越外、他領道中・船中里數之儀者、道

中記・船中記等を以見合書記差越外付、究之儀者不

相知外條、被差出外節者右之趣を以被申出外様可被致

右之通申越外條被達 貴間可被致首尾外、此方御手

當可相成儀共者、追々被申越る可有御座外、以上、

〔朱〕
「實曆五年」〔正月五日〕
十一月廿五日 〔朱〕 高橋縫殿 〔禮部〕

〔朱〕

島津主鈴殿

伊集院十藏殿 〔久野〕

全御譜中

同年十一月二十六日

女御御入内 〔一條故明白、兼香公女〕、於レ是遣ニ使者于京師、獻ニ太刀一

腰・馬代金三枚于

禁裏御所、白銀二十枚于

女御 〔月日使名今、不レ可レ考〕

1763

繼豊公御譜中

同年十二月七日嚮レ是既蒙ニ 台許ニ、以ニ菊姫ニ配ニ偶偶 〔ウツコ〕

筑前福岡城主松平筑前守繼高之嫡男松平修理大夫重政好
述一、今日自ニ芝守殿ニ于ニ歸溜池邸ニ整々焉、成ニ大禮ニ也、
〔ユイテトシキ〕

1764

重豪公御譜中

扣正文在家老座

太守様御縁邊之儀付

隅州様思召之程段々先達申越趣候處、

御守殿に荻原とのにて被申上、御同意被 思召上付付、

松島様に被仰達御内々無滞相濟旨、細々被申越朱書

之趣

隅州様達 貴聞御満悦被遊外、尤松島様御文表掛御目

外、右通誠之御内々之御事外故 御守殿御年寄衆・若

御年寄衆迄御聞せ、御部屋にも御年寄迄御聞せ被成

外旨承知仕、爰元にも若準右申談 御女中様方に納殿

役人を以直申上、大御目附以上之御役々承知有之、御

側御用人・御近習役迄、誠之内々にも申聞せ置外、

右式故御祝儀表態と其御地にも若申上外、

隅州様に御内々恐悦之旨我々申上外、 〔橋守〕 刑部卿様より

表御禮等松島様も何方様へも宜御頼被成り付る者、從

隅州様表 刑部卿様御方に御互ニ御満悦、又右之御挨拶

等被仰進方宜外ハ、荻原との方御取計外様々各迄

申越り様々被仰付候、

姫君様 菊姫様よりも 隅州様に御挨拶等先御差扣不

被 仰進外間、可申上旨被申越趣を以達 貴聞外處ニ、

御互御満悦被遊候、其上 姫君様 菊姫様何角と御世

話被遊、首尾能相調外付る猶又宜申上外様被仰付外、

一右ニ付相馬に萩原とのこゝ御意之旨承知仕、難有奉

存外、何分ニ及成合外様御請御禮頼存外、

右一件何及無滞所相調恐悦御同意奉存候、以上、

但 松島様御文留置外、

〔朱〕「寶曆五年」 十二月十五日

高橋縫殿（通考）

鎌田典膳（殿）

義岡相馬（久忠）

島津主殿（久朝）

鳴津圖書（久忠）

鳴津主鈴殿

伊集院十藏殿

1765 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、十月廿四日東叡山

（家重生母、大久保氏） 深徳院様 御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙

面之趣各申談及 上聞候、恐々謹言、

〔朱〕「寶曆五年」 十二月十八日

西尾隱岐守 忠尚判

松平大隅守殿

1766 全上

御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間可御心易外、隨而鯛一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕「寶曆五年」 十二月十八日

西尾隱岐守 忠尚判

松平大隅守殿

1767 全上

御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間可御心易外、隨而鯛一箱被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕「寶曆五年」 十二月十八日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1768

重豪公御譜中

正文在文庫

今朝蜜柑一箱・炙鮎一箱進上外、遂披露外處一段之仕合外、恐々謹言、

(朱)
「寶曆五年」
十二月十八日
忠尚判

(朱)
「在口裏」
松平又三郎殿
西尾隱岐守
忠尚

1769
全上

今朝蜜柑二箱・炙鮎一箱進上之外、遂披露外處一段之仕合外、恐々謹言、

(朱)
「寶曆五年」
十二月十八日
涼朝判

(朱)
「在口裏」
松平又三郎殿
秋元但馬守
涼朝

1770
繼豊公御譜中

正文在文庫

爲歲暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平右近將監

可述外也、

(朱)
「寶曆五年」
十二月廿七日

重豪公御譜中
墨印
松平大隅守殿

1771
全上

爲歲暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(朱)
「寶曆五年」
十二月廿七日
秋元但馬守
涼朝判

松平大隅守殿

1772
重豪公御譜中

正文在文庫

爲歲暮之御祝儀、以使者御小袖一重進上之外、遂披露外之處一段之仕合外、恐々謹言、

(朱)
「寶曆五年」
十二月廿七日
秋元但馬守
涼朝判

松平又三郎殿

1773
重豪公御譜中

正文在文庫

吉書

長生殿裏春秋富 不老門前日月暈
君か代ハちよにや千世にさゝれ石の

いはほとなりて昔のむすまで

寶曆六年正月元日 忠洪御判 (鳥津重豪)
(花押) (No.5)

重豪公御譜中

扣正文在家老座

1775

舊臘五日飛脚を以被差越り御旅宿繪圖、兵部様御方江同

廿四日岩下佐次右衛門致持參差出外處、七右衛門様御同

列の御逢、御家中何某と申方屋敷の御哉と御尋被成

外間、御客屋敷と申外、前代より御座外屋敷の、家

作等表有之外付、御旅宿に取繕申外、先年御巡見上使之

御方様表、御止宿爲被成御宿にて外由御答申上外處、御

家來小屋相圓り不申外、若し不繕有之外條、繪圖面得と御

一覽被成、何分は及可被仰聞旨爲被仰由外處、同廿八日

御兩所様、佐次右衛門被招呼、繪圖面之内堀并少々御

栖居被相替、中門等之締且又御家來罷居外小屋表相圓り

居外様繪圖面押札之通被成度由被仰外付、御好之通取繕

外様可申越旨申上置外段申出外、右次第候得若、いつれ

(朱)「下」

義岡相馬殿

鎌田典膳殿

高橋縫殿殿

島津圖書殿

島津主殿殿

(朱)「寶曆六年」三月十一日 (朱)「上」
伊集院織部 島津主鈴

之筋に表御望之通御取繕可有之儀候得若、御栖居等表相
替儀外故、繪圖面相添急飛脚を以此段申越外條
隅州様被達 御聽、繪圖面押札之通御取繕等可被申渡外、
以上、

1776

繼豊公御譜中
正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露外處一段之御
仕合外、恐々謹言、

(朱)「寶曆六年」正月七日 本多伯耆守 正珍判

松平大隅守殿

1777

全上

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露_レ處一段之御
仕合_レ、恐々謹言、

(卷)
「寶曆六年」
正月七日
秋元但馬守
涼朝判

松平大隅守殿

1778
重豪公御譜中

正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折進上之外、遂披露_レ處一段之仕
合_レ、恐々謹言、

(卷)
「寶曆六年」
正月七日
正珍判

松平又三郎殿

(卷)
「在口裏」
本多伯耆守
正珍

1779
全上

爲若菜之御祝儀、鯛一折進上之外、遂披露_レ處一段之仕

合_レ、恐々謹言、

(卷)
「寶曆六年」
正月七日
涼朝判

松平又三郎殿

(卷)
「在口裏」
秋元但馬守
涼朝

1780
重豪公御譜中

去歲秋七月忠洪襲封、今茲寶曆六年春正月十一日、仍舊
章_一、於_二江府芝邸_一命_二右筆_一、初行_二吉書式_一、花押則親手書之故
事、然以未幼弱
及_レ茲、自_レ是而後在_レ國、在_二江戶_一、每歲成_二此式_一、不_二
復書_一、

1781
正文在文庫

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨、可有沙汰之狀如件、

寶曆六年正月十一日 忠洪

1782
繼豐公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被

獻之外、遂披露外處一段之御仕合候、恐々謹言、

(卷)
「寶曆六年」
正月十二日

西尾隱岐守
忠尚判

松平右近將監
武元判

本多伯耆守
正珍判

酒井左衛門尉
忠寄判

堀田相摸守
正亮判

松平大隅守殿

1783
全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被
獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(卷)
「寶曆六年」
正月十二日

秋元但馬守
涼朝判

松平大隅守殿

1784
重豪公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩進

上之外、遂披露外處一段之仕合外、恐々謹言、

(卷)
「寶曆六年」
正月十二日
正珍判

(在口裏)

松平又三郎殿
本多伯耆守
正珍

1785
全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩進
上之外、遂披露外處一段之仕合外、恐々謹言、

(卷)
「寶曆六年」
正月十二日
涼朝判

松平又三郎殿
秋元但馬守
涼朝

1786
継豊公御譜中

寶曆六年丙子正月十五日

大樹家重公俊鷹所擊之鶴一隻賜之繼豊、仍執政副奉
書、本多伯耆守正珍出驛路證印而授之、於是家臣佐

多休左衛門直矩馬・丹生彌兵衛恒道新步士二人輕卒六人

警衛之一、即日發芝邸、夜以繼日經東海・山陽・西

海之驛路、二月十五日到麗府四配亭、則就拜戴之、

是日齋報翰及正珍所出證印、矢野清八清香新・吉井孝

右衛門泰音新以至江都、步士二人輕卒二人隨從焉、

同日命島津市太夫久隆、使于江都謝恩賀也、清香・

泰音等匆匆傳驛路、三月十二日至江都、直如松平右

近將監武元之第一呈報翰、且納驛路證印矣、久隆歷

西海・備後路・東海之驛、同月十七日至江都、而同月

二十二日造執政各之第一、呈繼豐之書翰、四月朔日應

徵登、城奉繼豐之獻物一種一荷、於白書院拜調

家重公及

儲君家治公勤使節、奏者番鳥井伊賀守忠孝奏達之、

久隆別獻上御太刀一腰・馬代銀一枚・紗綾一卷于

家重公、於白書院又拜調

兩公、爲私觀禮忠孝奏達之畢、而登

西城、所獻于

家治公一種一荷、就奏者番松平周防守康福奉之、久

隆亦獻納御太刀一腰・馬代白銀一枚、四月七日再登

城則西尾隱岐守忠尚於檜間、附與賜繼豐之奉書、

斯時紗綾三卷久隆拜戴之、奏者番金森兵部少輔賴錦執

達也、同月九日西城執政秋元但馬守涼朝召久隆於其第一、

附與賜繼豐之奉書、而後久隆發江都還薩府、

1767

全上

正文在文庫

一筆令啓達、

公方樣 大納言樣益御機嫌能被成御座間可御心易、

將又御鷹之鶴拜領、以宿次差越、恐、謹言、

〔實曆六年〕

正月十五日

西尾隱岐守

忠尚判

松平右近將監

武元判

本多伯耆守

正珍判

酒井左衛門尉

忠寄マ

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

1768

全上

寫正文在右筆所

寫

此狀箱并鶴壹、從江戸至薩州鹿兒嶋、松平大隅守所に相
届返札可來り間、於江戸月番之老中に急度可持參者也、

(卷) 「寶曆六年」 子正月十五日 伯耆印

右宿中

繼豊公御譜中

正文在文庫

なをく何もよろしく申上りへくり、めてたくかし
く、

十二月廿一日付にて御ふみ下されり、

公方様 大納言様 御簾中様ますく御機嫌よくならせ

られ、御めて度思しめしりよし、さては菊姫方御婚姻に

つき、十一月廿一日

御簾中より色りんす

竹姫君様へ進しられり御事、御手前様も有かたき御事

と思しめしりよし、御文の趣宜申あけまいらせり、め

てたくかし、

(卷) 「寶曆六年」

松しま

松たいら

大隅守様

御返事

人々御中

岩はし

うら尾

さえた

瀬やま

(末) 「近秘野帥大信公御傳」

寶曆六年丙子正月二十二日、〔小松帯刀禮也〕彌腹孫左衛門爲若年寄改稱

式部、二十五日招宴兩使於芝邸餞之也、〔爲津維也〕有邦公饋之杉

盆組、四月五日兩使發行、公使留守居・使番等偕導之

國途次寵待尤篤矣、五月二十三日兩使至廳府、公使使

番饋兩使太刀各一腰・馬代各金一枚・二種各千匹、有

邦公亦使馬廻饋紗綾各三卷・二種各五百疋、以勞之、六

月十一日兩使臨府城乃進膳〔三汁八菜〕備中貴儔接伴、十六日

〔爲津重年〕先公小祥于福昌寺、兩使遣家老進香、十七日謁南泉廟、

此日佐土原侯久柄亦遣使贈二兩使太刀・馬代等、七月三

日巡抵谷山、十一日還于客館、八月十二日巡城南觀土街

路、至南林寺洲崎、二十五日訪周防第、九月三日訪筑後

第、四日過妙谷寺、十一日訪備中第、十五日訪出雲第、

二十一日訪主殿宅、二十六日渡海櫻島、十月九日訪主鈴

宅、其他圖書・縫殿等及福昌南泉・南林・興國・淨光諸

刺莫不訪問、皆招宴也、十六日兩使辭府城既而發回、龍送如初、十一月八日御家老織部久、卒、十二月四日樺山左京久智爲御家老、菱刈孫兵衛實、爲大目附、

重豪公御譜中

綱貴公繼室信證院初稱發代家臣 田五兵衛國重女自舊臘一患痰癘、不_レ安、寢食老病日漸、禱爾藥療無_レ應驗、以_レ今茲正月晦日、棄_レ世于廳府武亭、享年九十三、法名信證院殿壽國總守元持大禪尼、二月二日夜斂棺、翌三日夜出_レ武亭遷_レ壽國寺、現住大瀧和尚爲_レ引導、家老島津圖書久亮代_レ忠洪奉_レ持_レ靈牌、島津出雲久定代_レ忠洪爲_レ燒香、家老義岡相馬久中代_レ繼豐公爲_レ燒香、自_レ同十一日至_レ十三日、於_レ壽國寺修_レ中陰之梵儀、安置靈牌及肖像一軀、而建_レ石塔、爲_レ日牌料、每歲寄_レ附米六石、文銀拾五枚及祭器許多品、此時忠洪依_レ幼年、淹_レ留于江都芝邸、故在國家老島津久亮・島津久馮・鎌田政昌・高橋種壽等飛_レ脚力、告_レ之江都、則以_レ側小姓中野織右衛門利典爲_レ吊使、二月二十九日發_レ江都、三月二十日到_レ廳府、翌二十一日窺老君繼豐公及其伯母榮於之起居吊_レ慰焉、

重豪公御譜中

扣正文在家老座

(朱)御返答

信證院様御病氣御大切被遊御座候段末、今朝急飛脚を以_レ申上通付、書過より御食事等一向不被召上付、極々着候処、開州様御勤之御書御文被寄付、而段、日親も有之、又香飛脚到御大切御成、八時分より別所被差重、御養生色く被盡候得共不被爲_レ叶、今七ツ時被遊御卒去付、

太守様御忌服不被遊御座候、

開州様御事末、繼御祖母様ニお御忌服無御座付得共、御心入を以_レ日數十回御内々御慎被遊答御外、

様御事定式之御忌服被遊御請答候、御留守居罷出、別紙首尾書之通得御内意候処、御居書別紙之通御返有之公邊御届之儀何様可有御座付哉被承合、何分ニ被致

首尾其段可被申越付、
一 お喜代様御事末、開州様御同前御忌服無御座段、御用人より別紙之通申出外間、右之趣可被申上付、

一 右付月次御禮罷出外間、明日御本丸江罷出、御兩殿様奉伺御機嫌御家老對面致答付、

一 御卒去付、御當地之儀今日より日數七日、鳴物・遊興

ケ間敷儀令停止外、普請并漁獵之儀、今日より日數三日鹿兒嶋中停止申渡外、御直土髮・月代等相立外、不

及候間、其許御屋敷中慎、右ニ準シ可被申渡外、尤京・

大坂に老今日飛脚便慎之儀申越外、

一 御遣禮壽國寺に御納りの筈に、壽國寺御引導相勤筈外、御法名之儀老跡立る差越可申外、

一 熊本・松山・佐土原に御しらせ明日申越筈外、長崎御奉行に老御家老中より御知せ不及、長崎御屋代方彼御方

御家老中迄致演説外様申越させ外、

一 松平隠岐守様に御卒去之段早速御知せ可被申上候、
〔朱〕本文隠岐守様江被申越趣、御使者を以爲御知被仰進候、其外右跡爲御知有之御方へも爲御知有之候

お榮様於御機嫌老何ぞ御障不被遊御座外、此段表被申上二可可有之外、

〔朱〕一御守殿并 菊姫様御方江、御卒去之段申上、菊姫様ニハ継曾御祖母様之御統ニ而、御忌服ハ不被成御座候、 御守殿江表被申上、麻布・櫻田御屋敷に表可被申上外、其外爲御

忌服ハ不被遊御座候得共、御心入を以日致十日、御内々御儀被遊候段、知被申上外に老、被申上二可可有之候、其御元は同申上候、右及御返答候、 兩州様被遊 御懸儀者、可被申上候、別紙御機嫌之儀老、御使便申上二可可有之外、此段各爲

届書写并名書紙、御留守居首尾書差越申候、拙者共より伺御機嫌今日便御存外、以上、

申上候、但被差越候別紙留置候

〔寶曆六年〕正月晦日

〔朱〕二月廿九日

〔朱〕鎌田典膳

鳥津主殿

〔朱〕島津主 鈴殿

〔下〕伊集院織部殿

1794 継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、如承改年之慶賀珍重外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相濟と目出度被存由得其意外、隨ち御樽肴被獻之外、各申

談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕寶曆六年

二月六日

松平大隅守殿

堀田相摸守

正亮判

1795

全上

御札令披見外、如承改年之慶賀珍重外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相濟と目出度被存由得其意外、隨ち御樽肴被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕寶曆六年

二月六日

松平大隅守殿

秋元但馬守

涼朝判

1796

継豊公御譜中

同年二月十一日 一條關白道香公之令妹 佐保君選二女

御一、舊冬十一月二十六日入

内禮成矣、繼豐馳_ニ使者於東都_一奉_レ賀_ニ之_ヲ

大樹家重公

大納言家治公一、因執政投_ニ奉書_一、左開_レ之、

1797

全上

正文在文庫

御札令披見_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、然

老舊冬

女御入 内相濟_レ段被承之、目出度被存由得其意_レ、依

之被差越使者_レ、紙面之趣各申談及 上聞_レ、恐_レ謹言、

(卷)

「寶曆六年」二月十一日

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

1798

全上

御札令披見_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、然

老舊冬

女御入 内相濟_レ段被承、目出度被存由得其意_レ、依之

被差越使者_レ、紙面趣及言上_レ、恐_レ謹言、

(卷)

「寶曆六年」二月十一日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

1799

正文在文庫

正文在文庫

尚_レ何もよろしく申上へ_レ、めてたくかしく、

正月十五日付にて御ふ_ミ下され_レ、

公方様 大納言様 御簾中様ます_一御機嫌よくならせ

られ、御めて度思しめし_レよし、扱は菊姫方御婚姻御整

被成_レ付、御献上物被成_レ所、右御使春井へ拜領物仰

付られ、有かたき事_ニ思召_レ由、御文の趣よろしく申あ

け_レへ_レ、めてたくかしく、

(卷)

「寶曆六年」

松しま

岩はし

うらを

さえた

瀬やま

松平

大隅守様

御返事
人々御中

重豪公御譜中

扣正文在家老座

〔御返答〕

信證院様先月晦日御卒去付、則日急飛脚を以申越り、

〔朱〕「御返答 本文被申越致承知候、左之通御返答申越候」

爲相達ニ可可有之候、

〔島津備前守江田氏〕

一 信證院様去ル二日之夜御入棺、同三日之夜壽國寺に

御入寺被遊り付、武御屋船御出棺前

太守様御名代島津圖書殿を以御焼香

隅州様御名代義岡相馬殿御焼香被仰付り、

一去ル八日之夜五ツ時御葬送相濟り、壽國寺御引導相動

り、御位牌

太守様御名代圖書殿に被仰付被奉守り、

太守様御代香島津出雲

隅州様御代香相馬殿、お嘉久様より納殿役人御代香、

おとめ殿御代香納殿役相動り、

一 島津備前殿・島津大學〔久造〕・島津幡磨〔久磨〕・宮之原甚五兵衛〔通 興〕・

桂太郎〔久中〕兵衛借綱ニ被爲附り、其外御一門方者御供、御

子様方より爲御見送用頼御寺に被差上り、

一 大御目附以上之御役々垣之内に伺公、其外之御役人御

寺に罷出り、

一 信證院様御葬送付、兼御存被知 御目通ニ罷出り外面

〔朱〕「右五ヶ条之趣達 貴問候」

く、御見送壽國寺に參上被仰付り、

一 御忌服之人數先達を差越り處、御用人しらへ違之由ニ

〔朱〕「本文致承知、別紙留置候」

跡達を別紙之通申出外付、爲御存差越り、

一 御法名打付箱ニ入付差越申り間、何分ニ表被致首尾ニ

〔朱〕「本文御法名 御前江差上麻布・桜田御屋船隠岐守様御方江貴差上申管候」

可可有之候、

但 御法名於爰許鹿兒島中・諸外城・琉球島々迄先例

を以申渡り、

一 壽國寺に御靈屋之儀者被召立不及旨、享保十九年

信證院様被仰出置り付、不相建管り、此段者爲御存り、

御年寄川瀬事

梅仙院

右同尾上事

智明院

右兩人 信證院様御卒去ニ付、剃髮之願申出、願之通

被仰付右之通改名被成御免り、

表使津津事

了節

右同斷切髮之願申出、願之通被成御免右之通致改名り、

一 於壽國寺御中陰御法事今十一日より來ル十三日迄三日

〔朱〕「右行達 貴問候」

御執行被仰付り、鹿兒島中慎先例を以申渡り、

一 御中陰内

太守様御代參大身分

(采)「本文達 貴階別 和留置候」

隅州様御代參御家老相勤答外、御香奠御進納并獻納物

いたし外人數、別紙爲御見合差越外、

一 信證院様御卒去ニ付、

(采)「本文書狀並被露別封外書を以申越候、

太守様御大御目附以上御役より今日便書狀を以奉伺

姫君様御方安元ニ而茂不奉伺御機嫌候間、等而奉伺御機嫌候而、伺御機

御機嫌外、

機之儀差申候」

姫君様御方窺御機嫌ニハ不及答外得共、各より伺御機

嫌等爲被申上儀外ハ、兼而奉伺御機嫌外而、伺御

機嫌何分ニ及頼存外、

一 信證院様御卒去ニ付、

(采)「本文書狀用方申渡候」

機嫌外、書狀御家老中迄差越外間届方頼存外、

一 信證院様御卒去ニ付、

御側廻・中通人數并月次御禮罷

(采)「本文達 貴階別 冊并書付三通打置申候」

出外而、伺御機嫌申上外、名書帳二冊并書付三通差

越外間、可被達 貴聞外、

一 隅州様御心入を以日數十日御内々御慎被遊外ニ付、大

御目附以上之御役々相中々爲伺御機嫌、そは切二十船・

御樽一荷進上仕外付、各々及人數ニ相加へ申外、

お榮様御膝中ニ付、右御役々相中よりそは切貳拾船・

御樽一荷・御野菜一折進上仕外間、是又各々及人數ニ

相加へ申外、

(采)「右二行致承知候、進上物付而者先便御頼申越候様候如、拙者共ニ及人數ニ

一御中陰御法事ニ付而者、大御目附以上之御役々方御香

被相加添存候」

奠青銅百疋獻納仕外、各々及人數相加へ申外、

右奉伺外儀者、隅州様ニ奉伺申渡外、御卒去ニ付而

(采)「右及御返答候、以上」

者、拙者御用係被仰付致首尾外ニ付、此段申越外間

被達 貴聞儀者、被申上被致首尾ニ而可有之外、以

上、

(采)「曆力」

「寶水六年」三月八日

二月十一日 (采)「上」 高橋縫殿

(采)「下」

島津主 鈴殿

伊集院織部殿

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又爲歳暮之御祝儀、時服并御肴拜領、難有由得其意外、

紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

(采)「寶曆六年」二月十九日 堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又爲歲暮之御祝儀、從

公方様時服并御香拜領之、難有由得其意外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

〔悉〕「寶曆六年」 二月十九日

秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1804 重豪公御譜中

扣正文在右筆所

國目附中國許逗留之内、右面々分限半物成相贈外由及承外、其通可仕外哉、此段相伺申候、以上、

〔朱〕〔曆力〕「寶永六年」 二月廿六日

松平又三郎

〔朱〕「右御用番堀田相摸守様は、御留守居岩下佐次右衛門」

而差差出置外處、同廿八日佐久間源太夫被召呼、御用人坂元六郎兵衛を以御附紙被成御渡外、御答之儀表

方御使者を以即日被仰達外事」

〔朱〕「右之例書」

去亥年松平加賀守様御國元は御目附様御越之節、御伺之上御分限半物成被進外由承知仕外、以上、

二月

御留守居名書」

重豪公御譜中

扣正文在家老座

御側御小姓

中野織右衛門

右老 信證院様就御卒去

お榮様は從 太守様御見舞之御使織右衛門被仰付被差越外、右付御口上書を以被仰進外間可被差上外、

隅州様は及織右衛門ニ右御見廻被 仰進外、御口上之儀老織右衛門承知仕差越申外、

一 お榮様は 太守様より御菓子一箱其元調ニ而被進外、

右付の老簽許御使番方同役に申越外、申出ニ有可有之

内可被進外條、於其元見合被進外様可仕旨被仰付外間被申談可被差上外、

隅州様は及御内々方被進物今日便差越外、御近習役方御下屋敷同役は問合申越外、

一 姫君様よりお榮様に御悔被仰進_レ、左_レの御菓子其元
(宋)一本文、お榮様江御悔被仰進、御菓子爰元御取替調、而二階堂林左衛門御使
 調_二可_レ被進_レ、各迄私共方_レ可_レ申越旨、御意之段荻原

殿_二の承知仕_レ間、御悔被仰進_レ段被申上、被進物調
隅州様江御見廻被仰准候段、御懸候間、御近習後より仰文(本マ)、
 方被致差圖可_レ被差上_レ、隅州様江表御見廻被仰進_レ、
而御挨拶可_レ被仰准候

是又各迄可_レ申越旨同人_二の承知仕_レ間、可_レ被達、御聽
 外、

一 姫君様より御香燵銀二枚、御國許御取替を以御寺納被
(宋)一本文御香燵銀二枚三月廿九日御代參御用入江申渡御寺納相濟候、御返
 遊_レ段、荻原殿_二の承知仕_レ間、取仕立等被申渡、御
銀之儀者御御用入より同役江問合越させ候

使者柄先例を以御寺納相濟_レ様可_レ被首尾_レ、御返答之
 儀者御側御用人より同役江問合申越させ_レ、

一 お榮様江 菊姫様より御悔仰文を以被仰進_レ、左_レの
(宋)一本文被進物都而首尾相濟候申出候
 御膝中爲御尋そは切被進_レ、

隅州様江表御内々より爲御尋金子百疋_二應_レ御品被進
 候、右調方之儀、お榮様御方者内山勘左衛門、隅州

様御方者御下屋鋪御近習役江、高田茂太夫より頼越_レ
 段申出_レ、

一 御同人様江、お喜代様方御膝中爲御尋そは切被進、
(宋)一本文前条同断
 隅州様江表御心入を以御慎之儀_レ間、金子百疋_二應_レ

御品御内々被進_レ、右調方前條同郡山嘉右衛門頼越
 外段申出_レ、

一 菊姫様、お喜代様より御香燵銀一枚ツ、御寺納被遊
(宋)一本文御香燵銀一枚、三月廿九日御代參、納殿
 外、御國許納殿役人江、茂太夫・嘉右衛門より問合申

越、得差圖御代參相勤御寺納相濟_レ様申出_レ、
 一 信證院様御寺參織右衛門江被仰付_レ、御寺納物之儀者、
(宋)一本文織右衛門御代參、而御寺納物相濟候
 追水善左衛門方同役江申越_レ、可_レ申出_レ間、織右衛門

勤方等差圖可_レ被成候、

一 お榮様に私共より進上物仕度_レ、被申談進上相濟_レ様
(宋)一本文、付進上物之儀者先而及問合候、為相濟、而可有之候
 頼存_レ、隅州様御事表御心入を以御慎被遊_レ得者進
 上物可仕哉、是又被申談何分_二表頼存候、

右申越_レ、織右衛門江御小者一人相付、今日中急_二
(宋)一右及御返答候、首尾被進、御耳儀者被申上、而可有之候、以上
 而差立被進_レ間勤方可_レ被申渡候、織右衛門并被相付

外御小者代合前_二の被差越_レ條、爰元江被差歸不及
 外、御左右之儀者、便を以被申上_二の可有之_レ、此

段者爲御納得_レ、以上、

(宋)一(釋力)
 「寶永六年」二月廿九日 伊集院織部
(宋)一「四月廿八日」
 「上」 島津主鈴

島津圖書殿
 島津主殿殿

義岡相馬殿
(宋)一「下」

鎌田典磨殿

1807

高橋縫殿殿

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿日東叡山 御靈前

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

(奉)

「寶曆六年」

三月十九日

松平大隅守殿

松平右近將監

武元判

1808

繼豊公御譜中

正文在文庫

松平大隅守使者

嶋津市太夫 (久奉)

今度以宿次御奉書御鷹鶴同氏大隅守拜領仕候付、右以使

者献上物仕御禮爲申上度奉存外、且又使者

御目見被 仰付自分之御禮申上、献上物仕儀先格之

通被仰付被下度奉存外、以上、

(奉)

「寶曆六年」

三月廿二日

松平又三郎

1809

(奉)「御製紙 可爲先格之通外」

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

大納言様益御機嫌能被成御座、正月廿六日東叡山

(家重老梅氏)

至心院様御靈前 御參詣之段被承之、恐悦旨尤外、紙面

之趣及言上外、恐々謹言、

(奉)

「寶曆六年」

三月廿五日

松平大隅守殿

秋元但馬守

涼期判

1810

重豪公御譜中

扣正文在家老座

(奉)「御返書

信證院様御石塔御成就ニ付、今月十四日御遺髮被遊

御納、御點眼御供養之儀、諸事先例を以御手當申渡御

執行被仰付、

太守様御代參島津出雲 (久定)

隅州様御代參禰腰式部 (清香)

お榮様より御代參納殿役人

お嘉久様・おとめ殿より御代參納殿役は被仰付、萬端

1811

無滯相濟申外、

一信證院様四拾九日・御百ヶ日被相込、今日十八日一日

於壽國寺御執行被仰付、

大守様御代參島津備中殿(實傳)

隅州様御代參禰履式部に被仰付外、

一御女中様方より御香奠先例之通被成御寺納、御一門其

外方及御香奠獻納有之外、大御目附以上之御役々相中

より御香奠銀二兩獻納仕外、各々及人數相加へ申候、

右奉伺外儀者 隅州様に奉伺申渡外、此段申越外間

被達 貴聞儀者可被申上外、以上、

(朱)「寶曆六年」三月廿五日 (卷上) 高橋縫殿

(朱)「四月廿一日」

島津主 鈴殿

(朱)「可」
伊集院織部殿

重豪公御譜中

正文在文庫

靈社神文前書之事

一去歲北谷王子跡役私に被仰付、誠以外聞實儀難有仕合

奉存候事、

一不新儀御座候得共、奉對

忠洪様 繼豐様毛頭不挾逆意、專勵忠義可申事、

一對國王疎略之志有御座間敷候、并國中附嶋々至迄政道

正様可申附候、以邪慾國法猥成仕置曾以仕間敷候事、

一自然惡逆之者有之、國中一味仕候共、至私者同意不仕

則可致披露事、

一於私身上被 聞召上儀御座候者、速被遂御穿鑿明鏡被

仰付可被下儀偏奉願存候、少々相掠申儀殘念奉存候、

故申上置候事、

右條々偽於申上者、

罰文略之

寶曆六年丙子三月廿八日

今歸仁王子

朝義判

1813 繼豐公御譜中

正文在文庫

御鷹之鶴拜領付外、爲御禮差越外松平大隅守使者嶋津市

太夫、明朝日五時 御城に可差出外、且又自分之御禮者

可申上外間可存其趣外、以上、

(朱)「寶曆六年」

三月廿九日

(松平武元) 松 右近

松平又三郎殿

留守居

1814 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又二月朔日

竹姫君様被爲 入外節、菊事被召連外處、御懇之蒙 上

意從

公方様 大納言様 御簾中様拜領物被 仰付、難有由得

其意外、紙面之趣各一覽之事外、恐々謹言、

(朱) 一寶曆六年

四月三日

西尾隠岐守

忠尚判

松平大隅守殿

1815

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又二月朔日

竹姫君様被爲 入外節、菊事被召連外處、御懇之蒙 上

意從

公方様 大納言様 御簾中様拜領物被 仰付、重疊難有

由得其意外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

(朱) 一寶曆六年

四月三日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

1816

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月晦日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤候、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

(朱) 一寶曆六年

四月三日

西尾隠岐守

忠尚判

松平大隅守殿

1817

重豪公御譜中

扣正文在家老座

(朱) 一御返答

京極様・青山様より被仰談儀有之由之由、先月廿九日

兵部様御宅江岩下佐次右衛門被召呼、四月五日御當地

御發足之段、別紙之通御書付被相渡外、左外亦御兩

1818

本文被申越趣致承知 御州様達 貴問候、相添候御書付此方并扣置候、以

所様共今朝六ツ時御發足被成り、御同立被差越り、佐次右衛門・佐久間新左衛門・堀孫大夫・醫師三人其外先達より申越置り面々表被差立り、

一今日御發足に付る者、御用番西尾隱岐守様に別紙之通御届被仰出、御付使者并御見送之御使者品川驛迄被進、今晚御泊戸塚驛に以輕使御樽一荷ツ、鮑一折宛、干菓子一箱ツ、被進り、拙者共よりも以書狀安否御尋申上り、

一東海道、伊勢路、美濃路御通路不相決候處、伊勢路御通路之筈り、且又伏見御着之節夜船被成筈り處、京橋に御止宿、翌朝川御下り大坂に御着、翌晚本船に御乗付之筈被仰聞り由、佐次右衛門申出り、先達より申越り趣致相違りニ付此段申越り、

右申越り條被達 御聽、御手當有之儀者被申渡る可有之候、以上、

但別紙二通御留守居首尾書二通差越り、

(朱) 一寶曆六年 四月五日 (朱) 一上 伊集院織部

島津圖書殿

(朱) 一「下」 島津主殿殿

鎌田典膳殿
高橋縫殿殿

1819

全上
扣正文在家老座

信證院様被成御座り武御屋敷、先年
(朱) 一御本文之通可承御役ニ申渡候、宮之原宇右衛門
慈徳院様被進置り、且又田上川原御屋敷之儀者 信證院様御卒去に付る者御物計相成り、右兩御屋鋪御家作共
一右ニ付江戸江伺、御側方案文會委ク有之候、
一右通被進候付而者、典膳殿立度申渡候、
一右付而縫殿御使ニ而被進、御大慶被、思付上候段承知候付、右之段江可申渡り、
戸へ首尾申上候、御側方案文留ニ有之
此節從 太守様 隅州様被進り、此旨可承御役ニ

(朱) 一寶永六年 四月 縫殿

1820
重豪公御譜中
扣正文在家老座

高橋縫殿伺

1821

(朱) 一本文達、貴御候處、伺之通可被仰付旨 御意候、
信證院様御佛餉料之儀
(島津吉貞宅) 四月六日 御取次 伊地知喜右衛門
靈龍院様御佛餉料之通、米六石・文銀拾五枚可被召付置哉
(島津重平宅) 瑞仙院様 智光院様御佛餉料者、右員數方相減被召附置

外得共、福昌寺、淨光明寺之儀者、外之御位牌様方被成

1823

御札令披見外、
公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

全上

1822

御座外付、御靈膳等々一同相調差上外付相濟申外、壽國寺之儀者 御壹人様之儀候得者、右之通可被相渡哉、其上 信證院様御存生之内、壽國寺御日牌料其外御佛前廻入料として、古銀拾貫目寺社奉行支配ニ被仰付、御銀被渡置外付、右之内より相渡申答外旨寺社奉行申出外付、此段奉伺外、以上、

(朱)
「寶曆六年」 四月

繼豊公御譜中

正文在文庫

右明日四時

嶋津市太夫(久隆)

御城江可差出外、以上、

(朱)
「寶永六年」 四月六日

西 隱岐

松平又三郎殿

留守居

1824

又今度以宿次奉書御鷹之鶴拜領之、難有由得其意外、依之爲御禮以嶋津市太夫御樽肴被獻之外、遂披露外處、御前江被召出之、入念外段御喜色之御事候、恐々謹言、

(朱)
「寶曆六年」 四月七日

西尾 隱岐守 忠尚判

松平右近將監 武元判

本多伯耆守 正珍判

酒井左衛門尉 忠寄判

堀田相摸守 正亮判

松平大隅守殿

全御譜中

正文在文庫

明朝五時我等宅江可差出外、以上、

嶋津市太夫

(朱)
「寶曆六年」 四月八日

秋(秋元涼御) 但馬

松平又三郎殿

留守居

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將
又今般以宿次御鷹之鶴拜領、難有由得其意、依之爲御
禮以嶋津市太夫御樽肴被獻之、遂披露之處

御前に被召出、入念、段御喜色之御事、恐、謹言、

(朱)

「寶曆六年」

四月九日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

重豪公御譜中

扣正文在家老座

御目附様御用ニ付、三月廿五日便ニ被仰越、御ケ條之
趣承知仕左ニ申上、

一兩御目付様去ル五日江戸御出立、戸塚之驛迄輕使被差
越、御樽壹荷・鮑壹折・御干菓子一箱宛佐次右衛門以
御使者被進、且又御家老衆より、御歡御見廻兼被仰付置、
同九日大井川御越ニ付、御祝儀御見廻兼被仰付置、
趣ニ、佐次右衛門以御使者泊漬一桶、被進、
隅州様より御見廻一通之御使者是又兼被仰付置、趣

を以、御口上御相應ニ佐次右衛門相動、

一御泊之於驛、佐次右衛門初御醫師迄御安否爲御尋、御
兩所様御旅宿に罷出申、御兩所様共ニ時々御逢被成
、尤御用等有之節、又老御仕廻懸之砌ニ御逢不被成
儀及御座、

一於濱松驛兵部様方佐次右衛門に巻煎餅一箱、新左衛門
に漬松茸一桶、孫太夫にからめ一籠、御用人中より
切紙御到來之由ニ被下、問、則答致、上御旅宿に致
參上御禮申上、翌日赤坂驛ニ、七右衛門様方佐次右
衛門に漬松茸一桶、新左衛門に巻煎餅一箱、孫太夫に
御肴一籠、右同斷之趣を以被下、問、兵部様御方同前
御禮申上、

一兵部様・七右衛門様方四日市驛ニ御醫師三人に、塩
鳥一羽宛被下、銘々則御禮參上仕、

一道中無御滞今七ツ時伏見京橋に被成御着、右ニ付從
太守様爲御歡、種子嶋宇左衛門以御使者、兼被仰付
越、趣ニ兩御目付様一荷宛被進、御兩所様共
字左衛門に御逢被成御直答、從 隅州様及右同人以御
使者御歡壹通、是又被仰付越、趣ニ御使者相動、
御銘々様共御直答被仰聞、

一種子嶋宇左衛門并御假屋守伊地知休右衛門、御兩所様御旅宅に罷出、御安否相伺申_レ處、御逢被_レ成_レり、

一明朝六ツ時御乘船_ニる川御下_リ之筈御座_レり、其節從

太守様求肥飴一箱ツ、御兩所様に被_レ進_サ筈_レ處、早朝之御乘船故御取_込之筈_レ間、今晚被_レ進_サ物_ノ御使者序_ニ被_レ進_サ方可然と申談、右_ノ趣佐次右衛門_方御取_込致演說、

是又宇左衛門御使者_ニの被_レ進_レり、尤明朝御乘船之節、御見送_リ之御使者宇左衛門、御兩所様に相勤申_サ筈_ニ御座_レり、

一明十七日川御下_リニ付、晝御辨當御兩所様に被_レ進_レり、

惣御供廻末々迄晝飯被_レ差_出り付、大坂御留守居受_込ニ_る、牧方邊_ニの相仕出_申筈_ニ御座_レり、明日_ニ御日柄故都_ノの精進調_ニの差_出筈_ニ御座_レり、

一御目付様_ハ於道中 太守様_方御使者并御音物等之品員數、大坂_ハ御着迄都_ノ之御模様可_レ申上旨被_レ仰_渡り、御書付寫被_レ差_越致承_知、道中_方伏見迄之御付届右之通申上_レり、大坂_方先_ニ御付届之儀_ニ追_テ可_レ申上_レり、

一御目付様御乘船大里_ニ御着_ニの_ニ無_レ之、小倉_方御船卸之筈_ニ御座_レり、大里_ニ御左右爲_レ聞、其御元_方飛脚被_レ差_越置_レり由御座_レり得_共、右通小倉_方御船卸之筈_レ間、其

御手當_ニ有御座度奉_レ存_レり、乍然此飛脚到着以前御左右聞之飛脚_ニ、被_レ差_立賦_ニ御座_レり、御兩所様御馬、船御乘船前以小倉_ニ着_可仕_レ間、右之便又_ニ御船中_方便宜_ニを以御左右聞之、飛脚大里_ニ參_居り_ハ、小倉之様差越_レ様_ニ可_レ申_進り、

一御目付様於御船中御料理之菜數二三通ツ、御塩梅之次第_ニ御船卸御左右聞之飛脚使_ニ可_レ申上旨承_知仕_レり、一御領内_ニ御差入之前晚御泊之所_ニ、御使者又_ニ附廻御役人、御安否伺_ニ被_レ差_越筈_ノ由、是又承_知仕_レり、其外被_レ仰_越り趣且又不依何篇御心入_ニ相_成り儀_ニ、追_テ可_レ申上_レり、今晚江戸_方之飛脚伏見_ニ致_到着_レり付、御返答旁申上_レり間可_レ被_レ仰_上り、以上、

〔寶曆六年〕 四月十六日 佐久間新左衛門(侍 忠)

相良彌(長 主)一兵衛殿
名越(恒 忠)左源太殿

岩下佐次右衛門(方 忠)

追_テ 隅州様より御付届之儀_ニ、於江戸得_レ御差圖置_レり付、仕出方相濟_レり、首尾其元御使番_ニ新左衛門_方申越_サ筈_レ得_共、爲_レ差懸儀故追_テ首尾書を以_レ可_レ申上_レり、此段_ニ御沙汰_及御座_レり_ハ、被_レ仰_上度存_レ申_上り、來ル十八日御

乗船被成り儀、最早相替儀及無御座外ハ、申上間敷外、
此段及被仰上度存申外、

全上

扣正文在家老座

御目付様御領内御通行之節、在々町店に賣物等出置申
間敷之旨先達、被仰達置外得共、其後又々被仰談外者、
早竟御巡見者御國中夫々之家業をも御覽爲可被成り得
者、やはり家職之商賣物等常式之通出置外様被仰付度
旨、道中於濱松驛兵部様御用人寺田左内を以被仰聞外
付、左様御座外ハ、先達致承知置外趣と者相替、
御領内御通行之砌、無構平生之通商賣物見せ先キ出
置外様可申越旨相達外處、弥其筋可有之旨承申候、
一御領内御差入方鹿兒嶋に御到着迄、御取計之次第於御
船中前廣に御間置被成度旨、昨夜於草津驛兵部様より
(近江國)
被仰聞外、尤右次第之儀者、委細承知不仕外付、御尋
被成外者、究め之儀未申越外、御領内御差入迄之内に
者追々可申越と存申外間、其節可申上旨御答可仕置候
間、御領内御差入より鹿兒嶋御到着迄之御取計之次第、
有増こゝ及被仰越度奉存外、其趣を以可申上外、

一佐次右衛門儀御同立に被差越外付、御兩所様御勝手
及存居、御手當等之儀に付、小倉方御國元は差越り得
者、旁都合及宜有之外半と、隅州様被思召上外、御用

筋に付る者毎々被召呼、御勝手及存居外故、小倉より
先達御國元は罷越諸事御支無之様、取計置、御領内
に御越之考を以又々御迎差越外様、仕度外、小倉筋に
御用及外ハ、佐久間新左衛門に何敷被仰聞度段申
上、御船中又者小倉小屋之瀬邊方、急なる御國元は差
越外様於江戸被仰付外間、於御船中御沙汰申上小倉方
急なる差越外心得に罷在外、併御兩所様依御挨拶に者、
難被差越儀及可有御座と存申外間、此段及被仰上度御
座外、

右之通申上外間被仰上度御座候、以上、

(朱)
「寶曆六年」

四月十六日

佐久間新左衛門

岩下佐次右衛門

相良彌一兵衛殿

名越左源太殿

御札令披見ハ、

大納言様益御機嫌能成御座、二月廿六日東叡山

(家重妾梅氏)

至心院様御靈前 御參詣之段被承之、恐悦旨尤ハ、紙面

之趣及言上ハ、恐々謹言、

(朱) 「寶曆六年」 四月十九日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

1829

全上

同氏大隅守儀多年病氣付カ、國許罷在緩々入湯仕、難有仕合奉存ハ、當夏參府仕ハ筈ハ得共、今以同篇ニ而長途之旅行難仕ハ、可罷成儀ハハ、來夏迄罷在養生爲致度奉願ハ、何分ニ衣被成御差圖可被下候、以上、

(朱) 「寶曆六年」 四月十九日

松平又三郎

(朱) 「張紙ニ而可爲願之通ハ」

(朱) 「重豪公御幼名也」

1830

重豪公御譜中

正文在文庫

今朝御香具一箱并丸熨斗一箱進上之ハ、遂披露ハ處一段之仕合ハ、恐々謹言、

(朱) 「寶永六年」 四月廿二日

忠尚判

松平又三郎殿

西尾隱岐守 忠尚

1831

全上

今朝御香具一箱并丸熨斗一箱進上之ハ、遂披露ハ處一段之仕合ハ、恐々謹言、

(朱) 「寶曆六年」 四月廿二日

涼朝判

松平又三郎殿

秋元但馬守 涼朝

1832

繼豐公御譜中

去歲寶曆五年乙亥九月二十二日、執政本多伯耆守正珍傳ニ台命ニ曰、忠洪弱年故以京極兵部高主番使・青山七右衛門成

親番書院爲ニ國目附一、當下於薩府ニ也、而高主・成親今年

五月十七日過ニ肥後州ニ而至ニ薩州出水一、經ニ水引・山崎・

加治木・重富等之地一、同月二十三日到ニ著魔府之客舍一、

同年十一月三日任歇而歸ニ江都一矣、繼豐豫令ニ於國中一如レ

左、

寫

又三郎殿就幼年、今度從 公儀御目附被差越り間、連く申付置り通、國中之者共猶以不亂風俗、萬端可相嗜之、委細之儀老家老共可申渡り條、堅固可申渡之者也、

子四月

寫條

一今度 隅州様仰出之趣謹可相守之、從 公義御目附様被差越候付る者、專御國之御仕置萬端御見聞有之筈り條、兼る被 仰出置り御條目之趣、無忘却可相守り事、

一御目附様御方に被掛置り面々、末々迄及鹿抹之躰無之、慇懃可相交り、御領内并鹿兒島中表時々御巡見有之筈り條、途中こゝる參逢り節者、慇懃つくばい可相通り事、
附 御目附様御家來用事ニ付る者徘徊可致り條、行當等無之様可氣付事、

一喧嘩口論堅令停止り、往來之於小路、無謂高雜談愆る

無作法之躰無之様可相奢り事、

一若面々夜行辻立停止之旨兼る被 仰渡置り、愆る不行跡無之り様、親兄弟親類中より猶又稠敷可申付り事、

一對御役々、式對鹿抹無之筈り得共、禮儀正敷可有式對り、足輕人家來等ハ就中其涯相見得り様可申付り事、

附 荷付馬并荷を持ちり者共、猥小路不行通往還障ニ不相成様可相通事、

一火用心專可入念り事、

右條々堅可相守之、若違背之族於有之者、可及沙汰

者也、

四月

圖書

主殿

典膳

縫殿